
俺とテストと学園生活

充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とテストと学園生活

【Nコード】

N9184L

【作者名】

充

【あらすじ】

舞台は、ここ試験高、文月学園。

Fクラスに所属することになった主人公が幼馴染の木下秀吉、木下優子や親友の明久らを始めとして繰り出されるコメディ？あり、恋愛？ありの学園生活！

主人公はオリキャラで、頭良いです。

コラボ募集中です！

主人公設定（前書き）

これから、宜しく願います！

主人公設定

早山蒼太。
はやまそうた

性別は男で、身長は162と男としては少し小柄。
顔立ちはなかなかで、女装は着る服によって可愛いにも綺麗にもなる。

髪の毛は、軽いウェーブがかかった髪の毛を肩より少し上で切りそろえている。

ちなみに、茶髪青目。

容姿がいいせいで、女子からは中々人気がある

性格は、めんどくさがり屋だが、友達思いで根はいいやつ

性格から、喧嘩は弱そうだが、実は結構強い

木下兄妹とは幼馴染で隣同士。

他人の恋愛感情は直ぐに分かるのに、自分に向けられる恋愛感情はとても鈍感。

親と妹は海外に在住していて一人暮らし。

親からは、仕送りとたまに電話がかかってくる。

勉強は、全教科教師レベルだとか。

だが、基本やる気がなく、あつたとしても集中力がそこまで続かない

友達関係は、明久と雄二と土屋とは悪友。
しんゆう

秀吉は、親友で幼馴染、優子は幼馴染。

島田と姫路は、純粋に友達

ちなみに、秀吉と優子は蒼太に恋愛感情を持っている

「めんどい……」

「り、理不尽だ！」

「俺は、男だ!!」

「ムツツリーニ、勝手に写真を売るな!!」

「優子！ ちがつ、その間接はそっちには曲がらなああああ！」

「これから、宜しく」

プロローグ

俺は今、通いなれた文月学園への道を秀吉と歩いている。

「そういえば、今日はクラス分け発表だったな」

「なんじゃ、忘れておったのか？」

「まあな」

「まったく、蒼太は、緊張って言うものを知らんのう」

「まあな」

俺達は、笑いながら文月学園への道を歩いているとそこに、「待ちなさあああい！」と声がしたので、俺と秀吉は後ろを向いた。

後ろを向くとそこには、優子が走っているのが見えた。

「よお、遅かったな」

「はあはあ、少しぐらい待っていてくれてもいいんじゃない？」

「秀吉、俺達結構待ったよな？」

「そうじゃな」

「もう少し待っていてくれても良かったのに！」

「いやいや、あれ以上待ったら完全に遅刻だ！」

「そうじゃな…時に姉上」

「何よ？」

「その服の着方、少しちがうぞ？」

「っ!?!」

「そうなのか？ 俺には、よくわからんが…」

「はっはっは、姉上もおっちょこちょい あっ、姉上っ！ ちが

っ……! その間接はそっちにはまがらなっ……!!」

……………秀吉、がんばれ!

「ふう、服装も直したし。行きましょう、蒼太」

「あ、ああ」

「うっっ…腕が、腕が……」

「そういえば、蒼太」

「ん？」

「今回は、まじめにテスト受けたんでしょっかね？」

「ああ、流石にあんだけお願いされたらな……めんどくさかったけど」

そう、俺はテスト前日に優子に真面目にテストを受けてとお願いをされた。

意味は分からなかったが、とりあえず真面目には受けた……しっかし、久々にテストをちゃんと受けた気がする……

「んなつ！？ 蒼太！ それは本当か！？」

「ん？ ああ、本当だぜ？」

「それでは、じゃあワシとは同じクラスにはなれんじやないか！」

「俺に言われても……」

秀吉、いきなりどうしたんだ？ ……まあ、いいか。

なぜかその後秀吉はしょんぼりとしていた。

なんだかんだ歩いていると、俺達は15分には校門前にいた。

校門前には、鉄人こと西村教諭がいた。

「おはようございます、鉄……西村先生」

「おはようございます、西村先生」

「早山、今鉄人っていいかけただろ？」

「いえいえ、まさか！」

「……まあいい」

ふう、助かった。

「ほら、クラス分けだ」

西村教諭こと鉄人は俺達に封筒を渡してきた。

「秀吉と優子はどつだ？」

「ワシはFクラスじゃ」

「私はAクラスよ」

「そうか」

二人のクラスを聞くと、俺は封筒を開け始めた。

「早山、俺は前々から思ってたんだが『もしかするとこいつはいつか大きな失敗をするんじゃないか？』と思っていたんだ」

「先生、それは杞憂です。俺は最後まで気を抜きません！」

「ああ、試験の結果を見て先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「そうです、これで俺はAクラスに……えっ!？」

「テストは完璧だった……だが、やっちゃまったな」

『早山蒼太

Fクラス』

「名前を書かなかつたら、もちろん0点だ」

「んな、ばかなあああああ!」

喜ぶ秀吉ととうなだれる優子の声は、この結果のせいで耳に入っ

てこなかった。

プロローグ（後書き）

感想くれたらうれしいです ^ - ^

第一問（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

「調理の為にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である。

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

早山蒼太の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である。

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

珍しくちゃんと書いてますね…これで名前が書いてあれば良かったのですが……

土屋の答え

問題点：ガス代を払っていなかったこと。

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（ すごく強い ）

教師のコメント

すごく強いと言われても……

第一問

「ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート

……さすがAクラス、教室ってよりホテルだな」

「うむ、さすがはAクラスじゃな」

「……さつさと行けば？」

優子は、そつぽを向きながら答えた。

「……優子、いいかげん許してくれよ」

「さつさと行けば!？」

俺は、不機嫌な優子に問いたが、優子は全く許してくれそうにな
い。

「蒼太、早く行くのじゃ……それではのう、姉上」

秀吉はそう言うと、なぜか俺と腕を組んできた。……秀吉、なぜ君
は俺と腕を組むんだ？

「んなつ!?!? 秀吉!」

「ほら、行くぞい」

「あ、ああ」

「待ちなさい、秀吉!」

「走るぞい」

「っは?」

秀吉はそういって、俺の腕を掴んでFクラスに走り出した。

……途中、俺は後ろを見ると、優子がとてもとても切れているの

が見えた。

・・・俺、今日、無事に帰れるかな・・・

「…やっぱり、知ってる顔が多いな」

「そうじゃの。おお、席は自由な用じゃの」

「みたいだな」

そう言つと、秀吉は上目遣い+捨てられた子犬のような目で、俺を見てきた。

「……一緒に座るか？」

「うん！」

い、今の顔は少し卑怯だな…

「はろはろー、木下と早山もFクラスなんだ。よろしくね」

「よろしくじゃ」

「ああ、よろしく」

「……………俺も、Fクラスだ」

「おお、ムツッリーニもか」

「よろしくじゃな」

「雄二と明久は、Fクラスじゃないのか？」

「坂本なら、そこで寝てるわよ？」

寝てるだつて？ ふっふっふ、いい事を思いつい

「起きてるぞ？」

「！？ ……ちっ！」

「おいコラ待て！ 今お前何考えてた！？」

「…知らないほうが身のためだぜ？」

「お前はいつたい俺に何をするつもりだったんだ!？」

「でだ、明久はどうしたんだ？」

「おい、無視か！」

「あながち、遅刻じゃろう…多分明久もFクラスじゃろうし」

「…それには同感だ(ね)」「…」

「俺はやっぱり無視か! …まあいい、腹いせに明久にでも当たるか」

そう言つと雄二はなぜか教壇に上がった。

すると、ちょうど教室のドアが開いた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このうじ虫野郎」

こ、これは……面白すぎる!!

「聞こえないのか? ああ？」

も、もうだめ……

「あはははははははははは!」

「な、何いきなり!? ……つて、雄二、何やってんの?」

「先生が遅れて来るらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「あははははははは!」

「蒼太、笑わないで!」

「わ、悪い…ぷぷ」

「…もついいよ。で、何で雄二が先生の代わりに?」

「一応、このクラスの最高成績者だからな」

「え? じゃあ、雄二がこのクラスの代表なの?」

「ああ、そうだ」

へえ、それは俺も初耳だな…明久、顔が綻んでるぞ。

「これでこのクラスの全員は俺の兵隊だな」

いやいやいや、俺はお前の兵隊になるつもりは無いぞ？

しかし、床に座っているせいで雄二に見下ろされるなんて……いや、立っ^ていても見下ろされるんだがな…

そんなことを思っていると、明久の後ろに先生らしき人がいた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

「えっ？ あ、はい」

「それと、席についてもらえますか？ ホームルーム HRを始めますので」

「はい、分かりました」

「うーっす」

それを聞いた明久と雄二は、そこらの席に着いた。ふう、やつとHRが始まるのか…すでに疲れたな…

第一問（後書き）

感想待ってます！

第二問（前書き）

問 次の文を英語にきなさい。

「私の妹は楽しそうに見えます」

姫路瑞希の答え

M y s i s t e r l o o k s h a p p y .

教師のコメント

姫路さんには簡単すぎる問題でしたね。

土屋康太の答え

M y s i s t e r s e e s h a p p y .

教師のコメント

惜しいです。seesでは無くlooksに出来たらよかったですね。

吉井明久の答え

M y s i s u t a r l o o k s h a p p i l l i .

教師のコメント

シスターのつづりはsisterで、ハッピーはhappyです。
ローマ字で書かないで下さい。

第二問

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原真です。よろしくお願いします」

そう言うと、先生は黒板に名前を書こうとして、止めた。

……このクラスは、チヨークすら無いのか？ ……やっぱり、Aクラスとは全然違うな…

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば申し出てください」

いやあ、なんというか… Aクラスの設備をくれ！ ……まあ、無理なんだろうけどな。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入っていないです！」

と、クラスの誰かが不備を申し出た。俺の座布団にも綿がほとんど入ってねえ！

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れてます」

「後で木工ボンドが支給されていますので、自分で直してください」「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど？」

「分かりました。セロハンテープとビニール袋の支給を申請しておきましょう」

…窓を変えるっていう選択肢はないのか？ それに、ここは本当

に教室なのか！？ この部屋の隅には蜘蛛の巣が我が物顔で形成されてるし、壁はひび割れや落書きでいっぱいだしな。終わってる！
ここは本当は廃屋じゃないのか！？

「必要なものがあれば、極力自分で調達するようにしてください」

どこからっていうわけじゃないが、教室全体からかび臭い独特空気が漂う。多分だが、床に敷き詰められている古い畳のせいだろう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側からお願います」

廊下側ってことは、秀吉からか。

そう思っていると、秀吉が立ち上がった

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしくじゃ」

おお、秀吉、その笑顔のせいで明久が何か自分に言い聞かせてるぞ。って、次は俺か…よつと

「早山蒼太です。部活は、何にも入ってません。これから一年よろしくです」

ふう。まあ、こんなものだろう。

そう思っていると、俺の隣のムツツリーニこと土屋康太が立った

「……………土屋康太」

それだけを言って、ムツツリーニは自己紹介を終わり、着席した。って、それだけかよ！ おいおい、もう少し何か言えよ！

「 です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

つと、俺が考えていると島田が自己紹介を始めていた。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったんで。趣味は…吉井明久を殴ることです」

そう言うと、島田は明久に向いて「はろはろー」と言いながら手を振っていた。もちろん、明久は顔を引きつっている。

「…あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

しかし、明久もいい加減気づけよな。島田がお前に気があるって事に。普通分かるだろ、あれだけ気があるそぶりをされてればさあ。そんなことを思っていると、明久の前の席のやつが自己紹介を終えたので、明久が立ち上がった。

「こほん。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

これは、言ってやらないとな

『ダアアーリイーン！』

Fクラスの男子全員がそう叫んだ。それを聞いた明久は、顔を歪めた。まあ、普通そうなるだろうな。

「…失礼、忘れて下さい。とにかく、よろしく願います」

明久の自己紹介が終わると、他の生徒が名前を告げるだけの簡単な自己紹介が続いた。…いい加減眠たくなってきたな。

そう思っていると、教室のドアがガラリと開かれると、そこには息を切らせて胸に手を当てている姫路がいた。

第二問（後書き）

感想待っています！

第三問（前書き）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

早山蒼太の答え

『正義の力』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

第三問

「あの、遅れて、すいま、せん」
『えっ?』

そりゃ、まあびっくりするよな、普通。俺と明久は振り分け試験の時近くにいたから、あんまり驚かないけど。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします
……」

…いやあ、姫路はやっぱり癒されるなあ。

「いつて！ 叩くな、秀吉！」
「ふん！」

秀吉、俺、何かしたか？ って言うか、秀吉が俺を叩くなんて色々だな。それだけ怒ってるのか？

「はいつ！ 質問です！」

そんなことを思っていると、自己紹介終えた姫路にクラスの男子
が質問をしていた。

「あ、は、はいっ。何ですか？」
「何でここにいるんですか？」

まあ、確かに姫路はAクラス並みの成績だから気になるよな。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…
…」

『ああ、なるほど』

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？確かに難しかった』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『試験前日の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

……お前ら、発想がバカすぎる…流石はFクラスってことなのか？

「で、では、今年一年間よろしくお願いします」

そう言っつて、姫路は明久の隣の席に座った。…明久が「ぼ、僕の隣!？」見たいな顔をしている…ぷぷつ、変な顔だなあ。

姫路が席に着くと、雄二が姫路に話しかけた。一体何を話してるんだかな……

「よ、吉井君!？」

俺がそんなことを思っていると、姫路が声を上げた。そういえば、姫路って明久のことが好きだ様な…

「それって誰ですか!？」

…姫路。流石に声を上げすぎだ。みんながお前を見ているぞ。…
そして、明久が声を出さずにやがる泣いてやがる…何してんだよ。

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

半分て何だよ！？ 何！？ 明久が半分なのか！？ くつそお。
めっちゃ気になる！

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

と、明久が声を上げると、先生が教卓を軽く叩いて明久たちに注意をした。

「あ、すみませ ん？」

すると、教卓がバキバキと、音を立てて、先生と生徒の前でゴミン屑と化した。…いやいや、もろすぎだろ！

「え〜… 替えを用意してきます。少し待っていてください」

そういつて、先生は教室を出て行った。

「さ、流石はFクラスじゃのお…」

隣で秀吉が苦笑いをしていた…っていうか、流石にこれは酷過ぎじゃねえか？ ……ん？ 何で明久と雄二が廊下に出て行くんだ？ ……めんどくさい事にならないことを祈る気がする…

「蒼太」

「どうした、秀吉？」

「そのじゃな…」

「??？」

「後で、話があるのじゃが…」

「今は話せ無いか？」

「流石に、今はのう…」

「分かった。俺とお前の仲だ、話ぐらいは聞いてやる！」

「ありがとうなのじゃ。」

…気のせいか、秀吉の顔が赤いような気がする…熱でもあんのかな？ とりあえず、額でも触って見るか。

「ひあっ！ い、いきなりなんじゃ？」

「いや、秀吉が熱でもあるんじゃないかと思ってさ」

「むう。そ、そうか」

「で、大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃ…蒼太がいきなり近づかんかったら（ボソ）」

「ん？ 今、何て言ったんだ？」

「べ、別になんにも言っておらんぞ!？」

「ならいいけど」

そんな会話をしていると、先生と一緒に明久と雄二が戻ってきた。

先生、ボロくない教卓は無いですか!？」

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です。趣味は…」

先生の言葉によって、淡々とした自己紹介が再開した。

そして、残るは我がクラスの代表の雄二を残すだけとなった。

第三問（後書き）

感想待っています！

第四問（前書き）

問題 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです

早山蒼太の答え

『振り続ける雨。そして恋に悩み続ける主人公…だが、彼女に出会った瞬間その悩みも吹っ飛んだ。そして、天気は主人公の心を写すかの様に快晴に！ 次回に続く！ の1932』

教師のコメント

続きは補習室で書いてください。

第四問

「坂本君、君が自己紹介最後ですよ」

「了解」

先生に呼ばれると、雄二は教壇に上がった。

「坂本君は、クラス代表でしたよね？」

先生が聞くと、雄二は首を縦に振った。そうなんだよなあ。雄二
つてば、このクラスの代表なんだよな……そんな雰囲気ないけど。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きな
ように呼んでくれ」

うん？ 雄二の目が、真剣そのものだ……。めんどくさそうなこ
とが起きそうな予感がする……

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言つと、雄二は教室にいる生徒全員を見渡した。皆の視線が
向けられるのを確認すると、部屋を見渡した。

黴臭く、蜘蛛の巣が張られている教室。

古く汚れ、刺繍跡が付いている座布団。

薄汚く、すぐ壊れてしまつ、脆い教卓。

落書きが目立つ壁。そして傾いた黒板。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

雄二は一呼吸置いて、静かに告げた。

「不満はないか？」

『大ありじゃあああつー！』

2年Fクラスに集まった男子（俺と秀吉以外）の魂の叫びが教室に響いた。

「だろう？ 俺だってこの現状は不満が大いにある。」

『そうだ、そうだ』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎるー！』

雄二の発言を軸に、生徒の不満が爆発する。…まあ、当たり前だろつがな。

「皆の意見はもつともだ。そこでだ」

…あのやろう。今、不適な笑みを浮かべやがった！ これは、絶対めんどくさい事になる！ …最悪だ（泣）

「これは代表としての提案だ。FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

我らFクラスの代表の坂本雄二は、今ここに戦争の引き金を引いた…しくしく。

しかし、それは現実味の乏しい提案にしか思えない。そう思っているのは、俺だけではなく、このクラスの人たちも含まれているようだ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ！』

『姫路さんがいたら何もいらない！』

『早山がいたら、それでいい！』

「コラ待ちやがれ！ 最後の誰だよ！？」

と、とりあえず、現状説明と行こうか…後で必ず最後の言葉を言ったやつ、殺つてやる

ここ、文月学園は点数の上限がないテストが採用されてから、四年が経過した。

このテストには、一時間の時間制限と無限大の問題が用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも点数を伸ばせるという仕組みだ。

また、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』というものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使できる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争 『試獣召喚戦争』と呼ばれる戦いだ。

しかし、戦争で重要になるのは、もちろんテストの点数。つまり、バカが集まったFクラスでは成績優秀のAクラスに勝つのは相当難しい…いや、不可能だろう。

「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる！」

雄二が教壇の上で高らかに告げた。なんか、ゲームに出てくる勇者みたいな台詞だなあ。

『何を馬鹿な事を言っているんだ』

『出来るわけ無いじゃないか』

『何を根拠にそんなことを…』

しかし、クラスから大否定…まあ、当たり前だな。俺と秀吉だって、否定的な意見を言っていた。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。」

『それは本当か!?!』

「ああ。それを今から説明してやる。呼ばれた奴出て来い」

そう言うと、雄二はまた不適に笑みを浮かべた。…まあ、俺の名前は出てこないだろう…ふあああ、やばっ。眠くなってきた。

「じゃあ呼ぶぞ。おい康太、豊に顔つけて姫路達のスカートを除いていないで前に来い」

「……………！(ブンブン)」
「は、はわっ」

ムツツリーニは、必死になって頭を左右に振って行動を否定したが、頬についてある畳の跡が全てを物語っていた。姫路は、スカート裾を急いで直していた。

「土屋康太。こいつがああの有名な、ムツツリーニ寡黙なる性識者だ」

土屋康太という名前はあまり知られてないが、ムツツリーニという名前は別だった。男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『む、ムツツリーニだとお！？』

『馬鹿な。奴がそうだといいのか！？』

『だが見る。未だに首を振って否定しているぞ！』

『確かに、ムツツリに恥じない姿だ』

ちなみに、ムツツリーニの頭がこすり付けられた場所は、座布団がカモフラージュに使われていた。…畳に跡が付くぐらいこすり付けなくても…。流石は、ムツツリーニと言ったところか。

「それと、姫路もいる。姫路の実力は皆も知っていると思う。前に来てくれ」

「わ、私ですか？」

「ああ。うちの主戦力の一人だ。もう一人は、蒼太！ 来い」

……………。今、俺の名前が呼ばれた気がする。まあ。眠気が起こした幻聴だろう。

「何してる。早く来い！」

「…。幻聴だ、幻聴…」

「なに言ってるやがる！ 早く来い！」

……、どっやら幻聴ではないらしい…

「はぁ。分かったよ」

そう言っつて、俺は教壇に上がった。

第四問（後書き）

感想、待ってます！

第五問（前書き）

今回のバカテストはお休みです。

第五問

「こいつは、普段はアレだが、やる気を出せば点数は全教科先生レベルだ」

『せ、先生レベルだって!?!』

…いや、確かにとれるけど、集中力が持たないって。

「この二人は、我クラスの主戦力だ。頑張ってくれ」

「は、はいっ。頑張ります」

「まあ、ほどほどにやるさ」

『おお、確かに二人ならAクラスにも引けをとらない!』

『ああ。彼女たちが居れば何もいらぬ!』

『そうだそうだ!』

「ちよつと待て! 俺は男だ!」

「それに木下秀吉だっている」

「雄二、お前もさつき、そうだそうだ、って言ったよな?」

「うっ!?! 当然俺も全力を出す!」

『坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか?』

『なら、実質俺たちにはAクラスレベルが3人いるってことか?』

『なんか、やれそうな気がしてきた!』

……とりあえず、後で雄二は処刑だな。それにしても、本当に勝てるのか? 俺は無理だと思っけど…

「それに、吉井明久だっている」

……シン

おいおい、ここで明久の名前をだしたらだめだろ！

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を出すのさ！そんな必要ないよね」

『誰だ、吉井明久って？』

『さあ、聞いたこと無いな』

『有名なのか？』

「ほら、雄二！僕は雄二たちとは違って、普通、なんだから、わざわざ説明しなくって、何で教壇にいる人全員で僕を睨むの！？」

明久が普通だと？ 違う！ あいつはバカだ！ 断じて普通ではない！

「そうか……知らないようなら教えてやる。こいつは、観察処分者だ」

えっ！？ ……バカだ、バカだとは思っていたが…。もうそのレベルまで達していたのか…

『それって、バカの代名詞じゃなかったかっけ？』

「ち、違っよ！ ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称でっつて、蒼太！ その哀れむような視線は止めて！」

「そっだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな。バカ雄二！」

そう言つと、明久は立ち上がって雄二のところまで来た。明久、誇り高く生きるよ。

「あ、あの……坂本君」

「どうした、姫路？」

「観察処分者ってどういうものなんですか？」

「知らないのか？ 具体的に言うとなら教師の雑用係だな。」

「仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなす生徒のことだな」

「そうなんですか？ でも、それって凄いですよね。」

「試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

へえ。召喚獣って力持ちだったのか……。なら、確かに便利だな。

「ただな、召喚獣は教師の監視下でなければ喚び出せない。」

それに、物に触れるようになった召喚獣の負担が何割か明久自身にフィードバックされるんだ」

「えっ。それじゃあ……」

「さすが姫路、察しがいいな。」

フィードバックされるということは、召喚獣の疲労や痛みは明久自身に返ってくる。」

教師の許可が必要なせいで自分の為にも使えないから、正に罰だな」

なるほど。俺も観察処分者って言うのは、バカの代名詞ってことしか知らなかったから、いろいろ分かったな。」

『おいおい、観察処分者ってことは、召喚獣がやられると本人も苦しむってことじゃないのか？』

『それなら、おいそれと召喚できない奴が1人いるってことになるよな』

『ただでさえ戦力が少ないって言うのに……』

『役に立たないじゃんか』

いや。召喚してもあんまり戦力にはならないと思うけどな……。明久はバカだし。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、それは流石に言いすぎじゃないか？」

「蒼太！ ありがとう　って、だからその目は止めて！　なんだか悲しくなってくる！」

「わ、悪い」

「ここで、俺から提案だが：俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

『おお、まずはDからか！』

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当たり前だ！！』

「ならば筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！』

「俺たちに必要なのはAクラスのシステムデスクであって、卓袱台ではない！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

うん、姫路が言うとなんか新鮮だなあ……秀吉、その目はマジで止めてくれ。怖すぎる！

「……で、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう」

「……僕の記憶が正しければ、下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ！　やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「ああ、本当だ！」

「…分かった。使者は僕がやるよ」

そう言うと明久は、Dクラスへ向かった。…明久、大丈夫かな…。

「吉井くん、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ。死んで帰ってくる」

…雄二、お前はやっぱり死刑だな。

数分後

「騙された！」

明久がぼろぼろになって帰ってきた。…痛そうだな。

「やはりそう来たか」

「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」

「すこしは悪びれるよ！」

「まあ、落ち着け。こいつが酷いのは、前から知ってるだろう。」

俺がそう言うと、明久は「た、確かに」と言った。明久、頑張れよ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

姫路と島田が明久に近寄りながら言った。いやあ、二人とも頑張れよ……。明久は、何で二人の好意に気づかないんだろう。姫路は仕方が無いとして、島田のは気づきそうなのにな。

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

「ああっ！ もうダメ、死にそう!!」

……。島田。そういうことを言うから、明久はお前の気持ちがいらないんじゃないか？ はあ、明久もそれが冗談って分かればいいんだけどな。

「明久、立てるか？」

そう言っつて、俺は明久に手を差し伸べた。

「え？ あ、うん。ありがとう、蒼太」

「そんな事より、今からミーティング行くぞ？」

「雄二。今、僕を騙したことをそんなことで済ましたな！」

「ほら、早く行くぞ」

そう言っつと、雄二はさっさと屋上に向かった。それに連れられて、姫路たちも屋上に向かった。

「行こうぜ、明久」

「……うん。蒼太だけだよ、僕を気遣ってくれるのは」

「そうか？」

「うん。流石は僕の親友だね」

「まあ、そうかな……。さあ、行こうぜ」

「うん、そっだね」

そっ言つと、俺たちも屋上に向かった。

第五問（後書き）

感想待っています

第六話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

【C6H6】

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

【ベン+ゼン=ベンゼン】

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

【B E N Z E N】

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るよつに。

第六話

あれから、俺と明久は雄二たちに追いついて、屋上に着いた。しかし、雲ひとつ無いいい天気だなあ。俺が天気には浸っていると、雄二が話を始めた。

「明久、ちゃんと宣戦布告はしてきたな？」

雄二は、フェンスの前にある段差に腰を降ろして言った。

「一応、今日の午後に関戦予定と告げては来たけど」

明久がそう言うと、俺たちも皆、腰を降ろし始めた。秀吉、何か近くないか？

「それじゃ、先にお昼ご飯ね」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ？ 吉井君ってお昼ごはん食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」「……あれは、食べてると言えるのか？」

「何が言いたいのさ？」

「いや、お前の主食は 水と塩だろ？」

「失礼な！ ちゃんと砂糖も食べてるよ！」

…：そんなんだよなあ。こいつの主食は、塩と砂糖と水なんだよな。
…：なんでこいつはそれで生きていけるんだろうか…。謎だ。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」
「舐めるといふ表現が正解じゃろうな」

「うんうん、確かにな」

「ま、飯代まで使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

そう。こいつの親も俺の親と一緒に、海外に単身赴任だから仕送りで生活している。……まあ、こいつの場合は、仕送りが少ないんじゃないくて趣味に使いすぎなんだよな。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか?」

「…え?」

…姫路、あの事を俺は知っているから、その言葉は悪魔のような言葉に聞こえる…。明久、さようなら。

「本当にいいの? 僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ!」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「よかったじゃないか明久。手作り弁当だぞ」

「うん!」

おお、とびっきりの笑顔…。明日には引きつった顔になるんだろうな…。頑張れ、明久。

「……ふーん。瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井、だけに作ってくるなんて」

島田、面白くなさそうだな。言い方にも棘があったし。

「あ、いえ! 皆さんにも…」

「っ!?!?」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

「……………蒼太。どうしたんじゃ？ 顔色が悪いぞ？」

「っえ！？ いやぁ……………ははは」

そりゃ顔色も悪くなるって！ ど、どうにかしてこの状況を打開しないと……………

「わかりました。それじゃあ、皆に作って作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」

……………俺は、姫路が悪魔に見える……………

「そ、そんな……………」

「今だから言うけど、僕、初めて会った時から君のことが好き……………」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「……………にしたいと思ってました」

……………明久、その回避方法は無いだろう。

「明久、それじゃあ欲望をさらけ出した、ただの変人だぜ？」

「だって……………お弁当が……………」

明久。そこらへんは……………気づけよな。

「さて、かなり話が逸れたな。試召戦争に戻ろう」

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ

？ 段階を踏んでいくんならEクラスじゃろし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「簡単だろ？」

「蒼太は分かるのか？」

「当たり前だ」

「じゃあ、何で何じゃ？」

「さっきも言ったが、理由は簡単。戦うまでもない相手だからだ」

「じゃが、相手はワシ等よりクラスが上じゃぞ？」

「それは振り分け試験の時の話だろ？」

「いつたい、どういこと蒼太？」

「お前の周りにいる面子を良く見てみる」

「え〜つと……美少女が3人にバカが2人とムツリが1人だね」

「誰が美少女だ！」

「ええ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

「……………(ポツ)」

「ムツリーニまで！？ どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

「まあ、落ち着け明久」

「そうじゃぞ。代表とムツリーニもじゃ」

「…うん。そうだね。ありがとう、蒼太(美少女)」

「俺は男だ！」「ちなみに、ワシも男じゃからな！」

「秀吉(美少女)には何も言ってないよ！？」

「今言っただであらうが！」

……なんだか、また話が逸れていつているような…。

「ま、要するにだ」

これを見かねて、雄二が俺の後を継いで話を始めた。

「蒼太と姫路に問題のない以上、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上は、Eクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「いやいや、俺には問題がいっぱいあるって。集中力が続かない事とかさああ。」

「？ それならDクラスと正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」「なら、最初っから目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？ それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「さっきってことは、あの時明久と雄二が出て行った時は、この話をしていたのか。」

「あ、あのー！」

「ん？ どうした姫路？」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦略について話し合ってたんですか？」

「ああ、それが。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて」

「そ、それはそうとー！」

「……。明久、わざわざ声を張り上げなくてもいいじゃんか。どうせ、姫路もお前の事好きなんだからさ。」

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ(だろ)」「

まあ、負けるわけないからな!

「お前等が協力してくれれば絶対に勝てる」

「絶対に勝てる? 試召戦争で? 最低クラスの僕等が?」

「そうだ。いいか、お前ら。ウチのクラスはな……最強だ」

……おもしれえ。やってやろうじゃないか。

「いいわね。面白そうじゃない!」

「が、頑張ります」

「……………(グッ)」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。のう、蒼太?」

「ああ。やってやるぜ……………ん? Aクラス……………」

「どうしたのじゃ、蒼太?」

「いや、何かを忘れているような……………」

「気のせいじゃろ」

「ならいいけどな」

…命のかかわるようなことだった様な気がするんだけどな……。まあ、いいか。

「それじゃ、作戦を説明するぞ」

雲が一つも無い天気の下で、俺たちは勝利のための作戦に耳を傾けた。

第六話（後書き）

感想、待ってます^^

第七話（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木』から落ちる、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

(2) 泣きつ 面蹴つ たり

早山蒼太の答え

(2) 殴られたり蹴られたり

教師のコメント

君達は鬼ですか。

第七話

「吉井！ 木下達がDクラスで交戦状態に入ったわよ！」

おお！ 秀吉たちが……。大丈夫なのか？ ……心配だ。さつさと回復試験を終わらせるか。…ちなみに、俺と姫路は今雄二に言われて回復試験を受けている。

「先生、次下さい」

「わ、私もお願いします」

「少し待って下さいね」

ふう。少し休憩だな。…しかし、この休憩時間が無かったら、俺の集中力が持たないんだろうな……。我ながら少し悲しい…

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「ありです」

ふう。次は…げっ！ 英語じゃねえか…。英語やっていると、直ぐに集中力が無くなるんだよな。…はあ。

「……………先生、次お願いします」

「早！」

「分かりました」

……………姫路がいるなら、今回の俺の出番は無しっばいな。…少しゆっくりやるか。でも、秀吉が少し心配だなあ…。つま、秀吉なら明

久が死ぬ気で守るだろうし、大丈夫だな。

「先生、次お願いします」

「報告します。姫路さんと早山さん以外の人たちは至急前線に出るようにと、代表が！」

「待て！ 今お前、俺のことをさん付けで言っただろ！」

「それでは、お願いします」

「待てコラー！」

報告をして行ったやつは、直ぐに部屋を去った。そして、部屋には俺と姫路と先生だけになった。

「先生、次お願いします」

「姫路さん。あなたは本当にFクラスですか？」

そう言いながら、先生は姫路にテストを渡す。俺もつかうかしてらんねえな。そう思っていると、ピンポンパンポン《連絡です》と聞こえてきた。

「何だ、何だ？」

《船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています》

「……。哀れなり、明久」

「何が哀れなんで」

《生徒と教師の一線を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「……吉井君」

「姫路。分かっているとは思いますが…これは雄二の作戦だからな？」

「そ、そうですよねえ……」

こいつ、本気にしてたな……。それにしても、明久は大丈夫だろうか…。まあ、後で知恵を貸してやるか。

「先生、次お願いします！」

「…あなた達は、何でFクラスにいるんですか？」

「まあまあ、そこは気にしない方向で」

そんなことを言いながらも、俺はちゃんと問題を解いている。もちろん姫路も。そして、そんなことが続いていると、またあの報告野郎が来やがった。

「姫路さん。そろそろ出番です」

「わ、分かりました」

そう言つと姫路は席を立つて、報告野郎と一緒に部屋を出て行った。

「…俺は、もうテストを受けなくてもいいんじゃないか？」

「いいえ。ここにいる以上、ちゃんとテストを受けてもらいます」

「マジっすか!？」

「はい。…はい、次のテストです」

「…はあ。」

そんなこんなで、俺が活躍する場面は無く、試召戦争はFクラスの勝利で終戦した。そして、俺達は今Dクラスにいる。

「あの、その、さっきはすいません」

姫路がDクラス代表の平賀に誤った。なぜ誤るんだらうか？

「いや、誤ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

なるほど。そういうことか。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

「いや、その必要はない。」

平賀が言ったのに対して、雄二は即返事をした。：まあm、俺の考えてることが合ってるなら、そうだろうな。

「え？ なんで？ 折角普通の設備を手に入れられるのに」

「忘れたのか？ 俺達の目標はAクラスだ。Dクラスじゃない」

「じゃあ、最初っからAクラスを狙わないの？」

「いろいろ準備があるんだよ」

「へえ。考えがあるならいいけど」

ほう。今回の明久はなんだか物分りがいいな。

「しかし、本当にいいのか？」

「ああ。ただし条件がある」

「……聞かせてくれ」

「俺が合図したら、外にあるあれを動かなくしてもらいたい」

「… Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから当然教師からある程度は睨まれる可能性があるとは思うが、悪い取引じゃないだろう？」

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……わかった。では、ありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「わかった…。じゃあ」

そう言つと、平賀は去つていった

「さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消費した点数の補給
行つから、今日のところは帰って休んでくれ！ ひとまず今日は解
散！」

皆はそれを聞いて、家に帰って行つた。

「蒼太、帰ろうなのじゃ」

「おう。じゃあな、皆！」

そう言つて、俺と秀吉はDクラスを後にした。

第七話（後書き）

感想、待ってます！

第八話（前書き）

今回は、少し短めです。そして、いつもよりグダグダです。><

今回のバカテストは、お休みです。

第八話

「蒼太、姉上はいいのか？」

「クラス違うからいいだろ。さっ。帰ろうぜ」

「う、うむ」

そう言っつて、俺と秀吉は下駄箱から靴絵を取り出して、校門を潜った。

そして、公園前にさしかかると、秀吉に「少し寄って行かんか？」
言われたので俺達は公園に入った。

「いやあ、懐かしいな？」

「そうじゃな。蒼太は、いつもあのベンチに座って、よくカードゲームをしておったな」

「あれ？ そうだっけ？」

「そうじゃ。…ちょっと座ってみるかの？」

「ああ、いいぜ？」

そう言っつて、俺達はベンチに腰掛けた。ちなみに、なぜか今は人がいない……。ちょっと気味悪いな。

「そ、蒼太！」

「ん？ 何だ？」

「そ、その……」

「????？」

そう言っつと、秀吉は顔を赤めて下を向いた。

「その、ど、同性愛についてどう思っっておる？」

「同性愛!?!」

あまりにも唐突だったので、俺は大声で叫んでしまった。……つてか普通はびっくりするよな?

「そうじゃ」

「うーん……そうだな。世間的にはおかしいと思われるんだろうな」

「し、そうじゃろつな」

秀吉は辛く悲しいような顔つきになっていた。

「だがな、秀吉?」

「なんじゃ?」

「俺敵にはだけど、恋愛には歳の差も、性別も関係無いと思う」

「つえ!?!」

「だから、別に同性愛がどうだとか、歳の差がどうとか。俺は気にしないってこつた」

「そ、蒼太」

俺がそう言うと、秀吉は顔を赤らめて俺を見つめた。な、何かおかしくないか!?! それに、秀吉が男なのに……女みたいだ。

「わ……私、蒼太に言いたいことがあるの!」

「つえ!?! 秀吉、口調が!?!」

「わ、私! 性別は男だけど……」

「……」
そう言うと、秀吉は立ち上がって俺のほうを向くと、微笑んで言った。

「私は、蒼太の事が好き…大好き！」

そう言った秀吉の顔は、何かを吹っ切れたような笑顔だった。…しかも、俺はその笑顔をすごく…一人の女性として可愛いと思った。

「だから蒼太。私と付き合って？」

「……ああ。いいぜ」

「ほ、本当に？」

秀吉？ はすごくオロオロしていた。多分、まさかこんなにあっさりとOKをもらうなんて思っていなかったんだろう。…やばい。何かぎゅってしてやりたいかも……。って、俺大丈夫か！？

「とりあえず、帰ろうぜ？」

そう言うと、俺は秀吉に背中を向けた。すると、秀吉は俺の服の裾を軽く握ってきた。

「ま、待って」

「ん？ 何だ？」

「わ、私達はそ、そのお……恋人同士だよな？」

「まあ、そうなるな」

「じゃ、じゃあ…キスして」

「…え？」

「……」

俺が振り向くと、すでに秀吉は目を閉じていた。…マジか？

「ひ、秀吉？」

「……」

これは、やらないと帰らない的なアレか？ ……仕方ないんだよな？

「……ん」

俺は、ファーストキスを秀吉にあげた。……うわあ、バリ恥ずかしいやねえか！……でもまあ、秀吉が幸せそうならいいかな。

「ほら、帰るぞ？」

「うん！」

そう言つと、秀吉は幸せそうな顔をして腕を組んできた。

「くつつきすぎだー！」

「いいの、いいの」

「ったく」

そついいながら、俺達は家に帰っていった。

第八話（後書き）

感想、待ってます！

第九話（前書き）

問 ロシア革命の時、社会主義をかかげる世界最初の政府をつくる中心となった人物は誰か答よ

姫路瑞稀の答え

「レーニン」

教師のコメント

流石は姫路さんです。ちゃんと復習をしていますね。

土屋康太の答え

「伊藤博文」

教師のコメント

伊藤博文は日本最初の内閣総理大臣です。この時代に生きていたら、それは幽霊です。

吉井明久の答え

「モナ・リザ」

教師のコメント
もはや人ですらありません。

第九話

あれから秀吉はずっと腕を組んできた。…まあ、多分周りから見たらバカップルだろうな…。だが！俺は思いだした。優子の存在を。

「ど、どうしよう…。なあ、秀吉？」

「……………」

だ、駄目だ。秀吉のやつ、鼻歌を歌いながら俺の腕に顔をくっつけて来てる。…しかも万遍の笑みで。そんなに俺と付き合えたのが、嬉しいのか？

「って、それよりも！優子に何て説明しようかな…」

「私がどうしたって？」

「!？」

「姉上？」

……お前、タイミング最悪だろ。まだ何も考えてないのに……。

「って秀吉！何であんたは蒼太と腕を組んでんのよ!」

「何でって…そりゃ、ワシらが付き合っておるからじゃ」

あれ？秀吉の口調が直ってる…。何か淋しいな…。じゃない！秀吉め、ストレートに言いやがって！

「なっ、なっ、なんですってえええええ!？」

「うっせ！いきなり叫ぶな!」

「た、確かにうるさかったのう…」
「蒼太、分かつてるの!? 秀吉は男よ!? (ま、まさか一日でこんなに先を越される何て…)」
「ん? ああ、別に分かつてるけど…。なあ、秀吉?」
「じゃな。ワシがちゃんと聞いたしな」
「そ、そんな…。(い、言うなら今かしらね?)」
「あのさ、流石に人の目があるからさっさと帰らねえ?」
「そうじゃな。蒼太、行くのじゃ」
「ああ。ほら、優子も固まってないで早く帰るぞ?」
「あ、うん」

…にしても、秀吉のやつ…優子に会った時に腕の力を強めやがった。何か心配事でもあるのか?

「って、何であんたはずっと蒼太と腕を組んでんのよ!?!」
「だから、ワシと蒼太は付き合っ…」
「周りの目を考えなさい! あんただけじゃなくて、蒼太まで変な目で見られんのよ!?!」
「っ!?!」

そう言われた秀吉は、少し辛そうな顔をした。その後、秀吉は腕を解き掛けた。

「別にいいよ。変な目で見られても」
「えっ?」
「周りにどんな目で見られようとも関係ないって事だよ」
「蒼太…。ありがとうなのじゃ」
「別に。あんまり、そういう事にすんな」
「!?! 本当にありがとうなのじゃ」

そう言つと、秀吉はまた腕を組んできた。さつきより力が強いぞ？　しかも顔を赤らめやがって。…可愛いじゃねえか！　しかし、さつきから優子が凄く睨んでるんですけど…

「優子、どうした？」

「何でもないわよっ！」

いやいや、明らかに苛々してるって。…まったく、しゃあねえな。

「何苛ついてるんだよ？」

「苛ついてなんか…！？」

俺はそう聞くと、優子が何かを言おうとした所で頭を撫でた。すると、優子は顔を真っ赤にして、少し落ち着いてるように見えた。

「で、何をそんな苛ついてたんだ？」

そう言つと、俺は頭を撫でるのを止めた。

「あっ……。だつて…」

「だつて？」

「……しいじゃない」

「え？」

「羨ましいじゃない！」

「……はっ？」

「だつて、秀吉だけ腕を組んでズルイじゃない！　私だつて、私だつて…」

そう言つと、優子は顔を真っ赤にしたまま顔を伏せた。…ってか、その事だけで苛ついてたのか？

「じゃあ、お前も組めばいいじゃん」

「っへ？」

「いや、だから…お前も腕を組めばいいじゃん？」

「……いいの？」

「ああ、別にいいよ」

「は、本当？」

「こんな事で嘘をついても、得がない」

「そ、蒼太…ありがとう」

そう言つと、優子も秀吉と同じ様に腕を組んで来た。…あのお、秀吉さん。腕が折れそうです。

「ひ、秀吉？」

「……なんじゃ？」

「何で不機嫌なの？」

「…別に」

「いや、だって…腕がとてつもなく痛いんですけど」

「……ふん」

そう言つと、秀吉はあつちの方を向いてしまった。…さらば、俺の左腕…。っと、もう家か。

「二人とも、そろそろ離してくれないか？」

「…うん」

そう言つて、二人とも名残惜しい様に俺の腕を離れた。良かった、俺の左腕は生きてる！

「じゃあな」

「またね」

「またなのじゃ」

俺は簡単な挨拶をして、自分ん家に入って行った。

第九話（後書き）

感想、待ってます！

第十話（前書き）

問題 『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

第十話

「ふうっ、今日はいろいろなことがあったな」

俺は今、自分の家のソファに腰掛けている。…ってか、飯作んのがだるい…。こう言う時に、誰かが作ってくれたらなあ…。

「無いものねだりしても、しゃあねえな。…ちやつちやつと済ますか」

そう言っつて、俺は冷蔵庫の中を見た。…はい？ 中身が…醤油とお茶だけ！？ …コンビニ弁当にするか。

「っつて、まだ金あつたっけな…。良かった、まだある」

そう言っつと、俺は財布を持って家を出た。すると、丁度秀吉が家から出て来た。

「よっ、秀吉」

「えっ！？ な、何で蒼太がいるんじゃ!？」

「何でっつて…。コンビニに行くからだけど…」

「そ、そうじゃったか…。蒼太、ワシもコンビニに用があるのじやが、一緒に行かんか？」

「ああ、別にいいぜ？」

「ちよつと待っておれ！」

「へっ？」

そう言っつと、秀吉はなぜか家に戻って行った。…なぜ家に戻ったんだ？

「……トイレか？」

いや、まさかな……。じゃあ、何で家に？

「……財布を忘れたのか？」

いや、明久じゃあるまいしなあ……。駄目だ、理由が思いつかん。

「ふう。…しかし、いったい何だったんだ「ぎゃああああ」……
秀吉？」

な、何が起こったんだ！？ 今のは絶対秀吉の叫び声だよな！？
そう思っていると、扉が開いた。扉から出て来たのは、秀吉では
なく私服姿の優子だった。

「さあ、行くわよ！」

「……優子？」

「何、蒼太？」

優子は辺りに「何があったか聞いたら殺すわよ」的なオーラが出
ていたので、何があったかは聞かないでおこう。

「いや、何でもない」

「あっそ。じゃあ、行くわよ」

そう言っつて、優子は手を組んできた。なぜに？

「優子、何で手を組むんだ？」

「だって、さつき組んでもいいって言ったじゃない」

「確かに言っただけどさあ……」

「それとも、秀吉は良くて私は駄目なの？」

「いや、そう言う訳じゃないけど」

「なら、いいじゃない」

「…まっ、そうだな」

これ以上反論したら、多分この右手は使い物にはならないだろう。こうして、俺と優子はコンビニに向かった。

「そういえば、蒼太のクラスって試召戦争したのよね？」

「ああ、Dクラス相手にな」

「でっ、勝ったのよね？」

「ああ、情報が早いな」

「まあね。それで、設備はいつ交換するの？」

「ああ、それは……」

そういえば、これの目的は打倒Aクラスだよな？　そして、優

子はAクラス……。理由は教えられないよなあ…。

「時間が時間だったから、明日交換するはずだ」

「なるほどね。じゃあ、明日からは少しクラスが近くなるのね？」

「あ、ああ。そうなるな」

「ふふふ（Fクラスじゃあ遠くて諦めてたけど、Dクラスだったらまだ近いわね。これで、秀吉はっかりにいい思いはさせないわ！）」

優子の顔が何か黒い。こう言う時は、あまり話かけない方がいいんだよな…。そんな事を考えていると、俺達はコンビニに着いた。

「じゃあ、俺は弁当見てくるわ」

「あっ、私もそこよ」

「えっ？　お前らって親いなかったっけ？」

「失礼ね。ちゃんと居るわよ！」

「じゃあ、何で弁当買いに来たんだ？」

「それは、お父さんとお母さんが今日から一週間、旅行に行ったからよ」

「……もしかして、それを忘れてて飯を用意してなかったとか？」

「ギクツ！ ……わ、私は覚えてたのよ？ でも、秀吉がね」

「見え見えの嘘はいいって。…じゃあ、今日は久々に三人で食べるか」

「本当！？」

「ああ、本当だ。そつちが良ければだけどな」

「もちろん、いいに決まってるわよ」

「じゃあ、弁当じゃなくて俺が作ってやるつか？」

「本当に？ でも、材料が無いわよ？」

「このコンビニは食材とかも売ってるんだよ」

「そうだったの…。じゃあ、お願いしてもいい？」

「ああ、かまわねえよ。そうと決まれば、さっさと買っちまおうぜ」

「そつね」

そつ言って、俺達は今日の夕食の材料+白米を購入した。今日の夕食はグラタンだ。

「じゃあ、帰るか」

「うん」

そつ言って、優子は空いている方の手を組んできた。……もういや。それからはどうでもいい話をしながら帰って行った。

「ふう、じゃあお邪魔します」

「はい、お邪魔されます」

こうして、俺は木下家にお邪魔した。

「さてっと、じゃあ台所を借りるぜ」

「どつぞ」

そう言って、俺は木下家の台所に入って行った。……そういえば、秀吉は大丈夫なんだろうか？ まあ、飯の時には帰って来るだろう。…多分だけど。飯作つとくか。そう考えながら飯を作り始めた。

第十話（後書き）

感想、待ってます

第十一話（前書き）

問 次の漢字の読み方を書きなさい。

『古今東西』

姫路瑞稀の答え

「「「「ん」と「せい」」

教師のコメント

正解です。

早山蒼太の答え

「「「「ん」と「せい」」

教師のコメント

惜しいです。西はざいと読む時があります。覚えておきましょう。

吉井明久の答え

「「「「ん」と「せい」」

教師のコメント
全て訓読みです。

第十一話

そんなこんなで、料理が出来た。

「優子ー、秀吉ー。料理が出来たぞ〜。」

俺がそう言つと、優子は直ぐに2階から降りてきた。しかし、秀吉は中々降りて来なかった。

「優子、秀吉は?」

「秀吉なら寝てるわよ?」

「そ、そうか。ならいいんだ」

、寝てる、と聞いて、死、を連想してしまった。

…おそろべし優子。

「じゃあ食べましょう?」

「そうだな」

「「「いただきま〜す」「」」

俺と優子がそう言つと、上の階からドンドンと音がした。

「何だ? 見てくるわ」

「あつ、待って」

「何だ?」

「行かなくていいわよ」

「へっ?」

「いや、だから行かなくてもいいの!」

「…何で？ 気味悪くない？」

「べ、別に大丈夫よ！」

「……へえ。大丈夫ねえ…。」

「な、何よ？」

「後ろに幽霊が！」

「……はっ？」

「へっ？」

「…あんたって、こう言う時は馬鹿丸出しね」

「うっ。…ま、まあ見てくるわ」

そう言つと、俺は席を立って2階に向かった。

「確か、音がしたのってリビングの上らへんだからここだと思っけど…」

そして、俺はリビングの上であろう部屋の前まで来た。

いやいや、秀吉の部屋って…。これって、入っていいの？ いや、

やっぱり彼女？ の部屋に勝手に入るのわなあ…。

…だが、良く考えたら音を立てるって事は助けて欲しいのか？

ダメだ、分らん！

「んんんー！」

「！？ ひ、秀吉？」

「んん！」

俺が考えている間に部屋から声が出た。

これは…やっぱり突入だな！ よし！

「秀吉、入るぞ！」

「んんん！」

そして、俺は秀吉の部屋を空けた。
そこには、可愛いらしいまるで女の子の部屋の様な風景があった。
そして秀吉は……地面で手足と口を縛られながら寝ていた。

「んんん!」

「秀吉!? な、なぜ縛られてんの? ……まさかそう言う趣味?」
「んんん!」

うわあ、すげ睨まれた。

秀吉つて睨んだら結構怖いんだぜ? まあ、後が怖いから助けるか。
俺はとりあえず秀吉を縛ってある縄を解いた。

「あ、ありがと。蒼太」

おっ、口調が変わった。

「気にすんな。……」

「な、何にも聞かないの?」

「……どうせ、ゆう左手がちぎれる様に痛い痛い痛い!」

「どうせ、何?」

いつの間にか、上に上がって来ていた優子にタイミング悪く話を聞かれていた。

ってか、マジでちぎれるって!

「ぎゃあああああ! ……」

「あ、姉上! やり過ぎじゃ!」

「……少しやり過ぎたわね」

優子はようやく俺の左手を解放した。

…良かった。ちゃんと着いてる…。

「ほらっ、早くご飯食べに行きましょう」

優子はなぜか俺と手を組んできた。

「優子、なぜ手を？」

「別にいいんですよ？」

「まあ、いいけど」

…後ろにいる秀吉から出てる殺気はハンパがないな。

「姉上、なぜ手を組むのじゃ!？」

「別にいいじゃない、これぐらい」

「良くない!」

「秀吉、これぐらいはいいだろ？」

「なっ!？」

「お前も組むか？」

「…蒼太」

秀吉はそう呟いて、俺と手を組んだ。

…二人とも？ 俺の腕の耐久力はもうほとんどゼロだつて…。

そんなこんなで、ようやくリビングのテーブルに着けた。

ちなみに、席はさっきまでは優子と隣同士だったが、今は優子と

秀吉が隣同士で俺が一人だ。

「ふっつ。じゃあ、もう一回…」

「…いただきます!」「…」

俺達は、やっとご飯にありつけた。

第十一話（後書き）

感想くれたら嬉しいです。

第十二話(前書き)

問題 以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $\{ \}$?
の中から選びなさい

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B$
O S B ? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 \circ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

(1) $X = \pi$ およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

第十二話

「「ごちそうさまー!」」

「はいよ」

俺達は、夕ご飯を30分ぐらいかけて食べた。にしても、30分
つて…。

まあ、いいか。それより、片づけをしないとな。

「蒼太。私、宿題があるから片付けをお願いしてもいい?」

「ああ、大丈夫だ」

「ありがとう、蒼太」

優子はテーブルから立つと、自分の部屋に戻っていった。…ふう、
これで食器が壊れるなんていう下手な展開はないだろう。

「じゃあ、ワシも部屋に戻るとするかの」

そう言つて、秀吉も自分の部屋に戻った。…なんだか嫌な予感が
する……なんでだろう?」

まあ、考えても無駄だな。

それから、俺はちゃっちゃと洗い物を片付けた。ふう、一段落だ
な。

さてさて、何をするか……とりあえず、テレビでも見るか。俺は、
リビングに向かい、テレビをつけた。

「…面白い番組が一つもねえ…」

俺は、テレビを消して秀吉の部屋に向かった。

「秀吉、いるか？」

「……………」

「…おかしいな…ん？ 優子の部屋からおかしな音が…帰ろう」

俺は、命の危険を感じてさっさと自分の家に帰った。

自宅

「ふう、ただいまっ」と

いやあ、誰もいないのになぜかただいまって言うちやうんだよな。

「さて、することも無いし、寝るか」

俺は寝室に入ってベッドに転がると、10秒程で眠りに落ちた。

翌日

「ううん…………ん？ んん！！？」

…と、とりあえず今の状況を整理しよう。

俺は、いつも通りにいつも通りの時間に起きたはずだよな？ な

のに、何で…何で…

「秀吉と優子が俺の隣で寝てるんだああああ！？」

「ううん…どうしたのじゃ蒼太？」

「…………どうしたの、蒼太？」

「いやいや、俺の反応が正しいと思うんですけど!?!」

「それより、早く朝ごはんにするのじゃ」

「そうね」

「……お前等、どうやって家に入った？」

「「ギクツ!」」

「おい! 今、ギクツって言ったろ!」

「な、何の事じゃ?」

「そ、そうそう。早く朝ごはんにしよう」

「……まあ、いいか」

そうして、俺達は朝ごはんを食べると学校に向かった。

……ちなみに、秀吉たちがどうやって侵入したかというところ、俺の部屋の鍵を無理やりに開けたらしい……不幸だ……。

「ふう、今日は回復試験か……だるいな」

「まあまあ、そういうものではないぞい」

「そうよ。ちゃんと受けなさいよ」

「まあ、そうするわ。次はBクラスと試召戦争しなきゃならないしな」

「へえ、あんた達Bクラスにも戦争をするのね」

「ああ。雄二と明久の提案でな」

「坂本君と吉井君の?」

「ああ、そうだ」

「……まあ、いいわ。それより、今日はやることがあるから」

そう言つと、優子はさつさとAクラスに向かって行った。毎回の事ながら、嫌な予感がする……。

「……じゃあ、行くか」

「そうじゃな」

俺達は、そのままFクラスに向かった。勿論、回復試験もちゃんと受けた（集中力が続く限りだけどな！）

余談だけど、明久は船越先生に近所の男性を紹介して難を逃れたそう。大変だな、明久も。

「ああー…づかれたあ」

そう言うと、俺と明久は机に突っ伏した。だって疲れたんだから仕方がない。

「確かに疲れたのう。蒼太、お茶はいるかの？」

「ああ、貰うよ。」

そう言うと、秀吉はお茶を持ってきてくれた。うん、気が利くなあ。

「サンキュー」

そう言うと、俺は秀吉からお茶を受け取った。うん、おいしい。

…なぜか、明久がめっちゃ見てくるんだが…。

「……」

「どうした、明久？」

「…何か、秀吉と今まで以上に仲良くない？」

「ああ、色々あってな」

「色々って？」

「それはだな」
「ワシと蒼太は付き合っておるんじゃよ」
「っな!？」

『何いいいいいいいい!？』

Fクラスの全員が驚愕した。：おいおい。
しかし、少し立つと直ぐに拍手に覆われた。ちなみに、明久はちよつと悲しそうな顔をしている。

「蒼太、おめでとう」

「なんか悪いな、明久。：いつものお前なら、ここらへんで、くええええええええ!」とか言つて攻撃して来そうなのに」

「大丈夫だよ。流石に蒼太にはそんなことはしないよ」

「そうか」

「じゃあ、昼ごはんでも食べに行こうよ」

「だな。秀吉も来るよな?」

「勿論じゃ」

「俺も行くぞ」

「……………(コクコク)」

「じゃあ、うちも一緒にいい?」

「ああ、別にかまわないぞ。なあ?」

「うん、別にいいよ」

「……………(コクコク)」

「じゃあ、混ぜてもらおうね」

とりあえず、食堂だな。さて何を食べようかな……。何かを忘れて

いるような気が…。

「吉井、なんかうちの悪口考えてない？」

「めっそもございません」

…考えてたんだな、明久。

「じゃ、僕も警沢にソルトウォーターあたりを」

「…なにか奢ってやる」

「本当！？ ありがとう、蒼太！」

「あ、あの。皆さん……」

立ち上がって食堂に行こうとすると、なぜか姫路が声をかけてきた。…何かを忘れているような気がする。生命に関わる何かを…。

「どうしたの姫持さん？ 手に重箱なんか持って」

ん？ 重箱？ ……重箱から連想されるのは、弁当……あっ！

確か、今日の昼飯は姫路が作ってくると言ってたな…。善は急げだ！

「秀吉、行くぞ！」

「なんじゃ、いきなり？」

「ほら！」

そう言つと、俺は秀吉の手を握った。とたんに、秀吉の顔が真っ赤になった。

「ひゃい」

そして、俺と秀吉はすぐさま食堂に向かった。

第十二話（後書き）

感想、待ってます。

第十三話（前書き）

問題 以下の文章の（ ）にはいる正しい物質を答えなさい
『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください

土屋康太の答え

『塩化吸収材』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です

第十三話

食堂

「はあはあ」

「い、いきなりなんじゃ！」

「いやあ、実を言つとだな……」

俺は、姫路の料理がどれだけの破壊力があるのかを説明した。

「つてな訳だ」

「すぐく嘘っぽい話じゃな」

「嘘なら、良かったんだけどな……」

「ほ、本当なんじゃな？」

「ああ、真実だ」

「……ありがとう」

「何が？」

「そのお……私を守ってくれて」

「！？ ……ま、まあな。い、一樣彼氏だしな！」

「か！？ ……そ、そうだったね」

秀吉の口調変わった。正直、俺はこっちの口調の秀吉の方が好きだったりする。

「……つてか、おおお俺、今とっても恥ずかしい事を言わなかったか！？」

「……」

「……折角食堂にいるんだから、飯でも食べるか？」

「…うん」

…秀吉の顔が真っ赤だ。なんか、こうしてると秀吉が男だって事を忘れそうだ。

それから俺と秀吉は一緒にご飯を食べた。…しかし、外がうるさいな。何か祭りでもしてるのか？

ご飯を食べ終わる頃には、外も静かになった。一体何をやってたんだか…。

「さてと、じゃあ教室に戻るか」

「そうだね」

ちなみに、飯を食っている間秀吉はずっとこの口調だった。

俺達は、さっさと教室に戻った。

そして教室の一角には、ぐったりしている雄二と優子と綺麗な人がいた。

「…どういう状況？」

「雄二は大体予想は付くけど、優子はなんでFクラスにいるんだ？」

「さあ？」

「来た来た。蒼太、ちょっといい？」

「ん？ ああ、別にいいけど」

そう言つと、俺は優子と綺麗な人と雄二がいる席に付いた。

「…とりあえず聞きたいんだが」

「何を？」

「何で優子がFクラスにいるんだ？」

「簡単よ。戦線布告をしにきたのよ」

「戦線布告ねえ…はっ！？ はあああああ！？」

教室に俺の叫び声が木霊した。
俺の声を聞いた明久たちが、どうした？　っていう顔で俺を見てきた。

「な、何で!？」

「まあ、いろいろあるんだけどね」

「……雄二、それで返事は？」

「そうだな…別にかまわんぞ」

「んなつ!？」

「……じゃあ、1時間後に会場で」

「ああ」

「じゃあね、蒼太」

「……………」

綺麗な人と優子は、それだけ言うと帰っていった。

……とりあえず、雄二に話を聞くか…。

「雄二、どうなってんだ？」

「ああ？　どうもこうもないだろう」

「いやいや、あるだろ！　それに、次はBクラスじゃなかったのか!？」

「Bクラスは、すでにAクラスに負かされたぞ？」

「へっ？」

「それで、Aクラスが俺達に戦線布告してきたんだよ」

「……………」

「元々、俺達の目標はAクラスだ。別に問題はないだろう」

「…まあ、そうだな。しかし、なんでBクラスを攻撃したんだろうな？」

「ああ、それはな」

「それは？」

「なぜか、木下姉が俺達は次にBクラスを狙うって知ってたかららしいぞ」

「何で知ってたんだ？ それに意味が分からん」

「だからだな、俺達がBクラスを狙うって事はそれだけの戦力があるってことだろ？」

「ああ」

「だったら、その標的をなくせば俺達の戦力はどうなる？」

「そりゃ、そのまま残るだろう」

「それだよ。元々Bクラスと戦えるだけの戦力があるんなら、戦線布告をされても断る理由がない」

「いやいや、あるだろう！ それにBクラスとAクラスには差があるだろ！」

「後は、プライドの問題だな」

「プライドって…はあ」

「ああ、言い忘れてたが」

「ああ？」

「負けたほうは、何でも言うことを2つ聞かないといけないからな」
「へえ……って、はあああああああ！？」

本日2度目の叫び声が、教室に木霊した。

「何でOKしたんだよ！？」

「1つはお前えの仕返しだ！」

「はっ！？ 何を意味の分からねえ事を！」

すると、雄二が俺にしか聞こえない声で言ってきた。

「お前、姫路の料理の腕前を知ってただろ？」

「！？？」

「だから、お前は逃げたんだろ？ ……俺達を置いて」
「……」
「ちなみに、俺はあの弁当とくびょうを一人で食べさせられたんだぞ？」
「！？ ……正直、すまないと思った」
「分かってくれればいいんだ」

そう言つと、雄二は教壇に登つた。

「皆、聞いてくれ！ 俺達はBクラスではなくAクラスと戦つことになつた」

『んな馬鹿な！？』

『な、何でいきなり…』

「そして、その戦う方式だが…5対5の一騎打ちで戦う」

『5対5の一騎打ち！？』

『それなら、俺達にも勝ち目があるんじゃない？ ……』

『そうだ！ 俺達には、早山さんと姫路さんがいる！』

「おいコラ待て！ 今さりげなく、俺を女扱いしただろ！」

「そうだ。そして、俺には秘策がある」

『秘策だつて！？』

ほほう。それは頼もしいな。…俺を女扱いしたやつ、後で覚えとけよ。

「そうだ。その秘策つて言つのが、皆も知つていると思うが霧島翔子に対してのものだ」

…、あの綺麗な人のことだろうか。

「それで、秘策の内容つてなんな？」

「そうだよ雄二。もったいぶらないで教えてよ！」

「ああ、そうだな」

島田と明久に押されて、雄二が咳払いをすると皆をまっすぐに見た。

「俺は、翔子の弱点をしている」

『な、なんだてえええええええ！？』

「そして、その弱点って言うのが…日本史だ」
『に、日本史だって？』

へえ、そうなんだ。でも、弱点だからってFクラスの雄二がせめて勝てるのか？

「ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

小学生レベルって…そんなんで勝てるのか？ すごく不安だ。そんなことを思っていると、明久が行言葉を言い放った。

「でも同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「俺もそう思うけどな」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ 幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「って言うことは、何かあるんだな？」

「ああ、そうだ。翔子はある問題が出れば必ず間違える」

「ある問題？」

「その問題は……“大化の改新”」

「大化の改新？ 誰が何をやったみたいなお題、小学生で習ったか

「？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純な問いだ」

「単純ってことは、年号とかか？」

「その通りだ。その問題が出たら、俺達の勝ちだ！」

「確か、大化の改心って645年だったよな？」

「ああ、そうだ」

「こんな簡単な問題、本当に間違えるのか？」

「ああ。翔子は絶対に間違える！ これは確実。だからその問題が出たら俺達の勝ちだ。晴れてこの教室とはおさらばって訳だ」

そこまで断言するあたり、信用する価値はある。

しかし、流石に雄二でも霧島さんのことを知りすぎじゃないか？

「あ、あの坂本君？」

「どうした、姫路？」

「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

おお。俺が気になっていたことを聞いてくれた。サンキュー、姫路！

……明久も、気になってたんだな。顔に出てるぞ。

「ああつ。俺と翔子は“幼馴染”だ」

「総員、あいつを狙え！」

「なっ！？ 何故明久の号令でみんなが急に構える！？」

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様を殺す！！」

「俺が何をしたと！？」

「遺言はそれだけか？ ……待て、須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後口に押し込むものだ」

「了解です。隊長」

って言うか、何で明久が隊長なんだ？ 意味が分からん！ とか
言ってる俺も攻撃に参加してる訳だが…。

「あの吉井君」

「のう、蒼太？」

「ん。何、姫路さん？」

「どうした、秀吉？」

「吉井君は霧島さんのような人が好みなんですか？」

「蒼太は霧島さんの事をどう思っているんじゃない？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「いやあ、美人としか」

「……………」

「何で二人は俺達（僕達）が攻撃態勢をとられてるんだ（の）！

？」

「そして美波はなんでそんな危険な物を僕に投げつけようとしてい
るの!？」

「……理不尽だあああああああ!！」

その後、Aクラス戦前まで命がけの鬼ごっこが始まった。

第十三話（後書き）

感想、待ってます。

第十四話（前書き）

問 1914年に起こったオーストリアの皇太子夫妻はどこで誰に殺されましたか？

姫路瑞希の答え

「サラエボでセルビア人の青年の殺された」

教師のコメント

正解です。

早山蒼太の答え

「差羅絵簿で背瑠美亜人の青年に殺された」

教師のコメント

ちゃんと書いてくれれば正解でした。

吉井明久の答え

「京都で舞妓さんに殺された」

教師のコメント

なぜオーストリアの皇太子夫妻が京都のいるのですか？
職員室で
じっくり聞かせてください。

第十四話

「…あんだ達、どうしてそんなに汗だくなの？」

「生命の危機に立たされてたんだ（よ）っ！」「」

「…あんだ達もたいへんねえ」

「…ほとんどは、お前のせいだ（よ）！」「」

「ええっ！？」

とりあえず、俺達は1時間逃げ切ったので命は無事だ。今は、皆で会場にいる。

いやあ、本当に死ぬかと思った。…後ろからカッターが飛んできたり、上からカッターが降ってきたり…。

全部カッターじゃねえか！ とか言わないでくれよ？

「…両名、準備はよろしいですか？」

今回は、Aクラス担任で学年主任の高橋先生が立会人だ。

いや、タイトスカートから伸びる足が、またなんというか…綺麗だなあ。

「……（キッ！）」「」

「（ブル！？）な、何だ？ 今の殺気…」

とりあえず、俺は後ろから殺気を感じたのでさりげなく後ろに振り向いた。

そこにいたのは、目以外は万遍の笑みを浮かべている、秀吉がいた。

「ああ」

「……問題ない」

返事をしたのは、我等が代表とAクラス代表の霧島さんだ。

…秀吉、いい加減殺気を送るのは止めてくれ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「私が行くわ」

「じゃあ、こっちは」

「ちょっと待って。…蒼太、ちょっと来なさい」

そう言つと、優子は廊下に出て行った。…やっぱり、行かなきゃ駄目なのか？

「っで、どうしたんだ優子？」

「…あんだ、さっき高橋先生を見て鼻の下伸ばしてたでしょ！」

「はっ！？ いやいや、お前の勘違いだから！」

「嘘おっしやい！ さっき、おもいきり伸ばしてた！」

「うっ。の、伸ばしてない！」

…実際は伸ばしていたがな。

「嘘つくな！」

「待て優子！ 俺の右腕の間接はそっちには曲がらないiiiiiiii
iiiiiiiiiii！」

俺は、そこで意識を手放した。

それから、少し経つとようやく俺の意識は戻った。そして、戻って直ぐに聞こえてきたのは…姫路の声だった。

「……私、このクラスみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

はは、なるほど。姫路らしいな……。さてと、そろそろ起きるとするかな。

「ううん…えっ？」

「おお、起きたか。大丈夫かの、蒼太？」

「えっ？ あっ…大丈夫…です」

「ん？ どうして敬語なんじゃ？」

「何でつてそりゃ…」

普通は敬語になるだろ！ だって、今の俺の状況は…秀吉が膝枕をしてくれてるんだぞ！？

「ま、まあ気にすんな！ いや、気にしないで下さい」

「じゃから、何で敬語なんじゃ！？」

「さて、起きるとするか」

「無視！？」

俺はちよつと悲しいが、いつまでも膝枕をしてもらつと秀吉の悪いのでさつさと起きた。

起きる時に秀吉が、「もう少し、寝ててもよかったのに」って小声で言った。

…秀吉さん、全部聞こえていますからね？

「これで二対二です」

そんなことをしていると、高橋先生がそう告げた。

ほほう、ラスト勝負か！ 最後は、多分雄二と霧島さんだから…
勝った！

「最後の1人、どうぞ」

「……はい」

「俺の出番だな」

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

おお、言い切った！ ……Aクラスの皆さんはもちろんざわついているが、これで勝ちはもらったな！

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

そう言うと、高橋先生はノートパソコンを閉じ、教室を出て言った。
声を掛けるなら今のうちだな。

「雄二、がんばって来いよ！」

「蒼太、起きたのか。…ああ、がんばるさ」

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

俺の直ぐ後に、明久が雄二に声を掛けた。

「……………(ピッ)」

そして、次にムッツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向けた。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」
「……………(フッ)」

ムッツリーニは口の端を軽く上げた笑みを浮かべると、ゆっくりと戻って行った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」
「ああ。明久の事が。気にするな、後は頑張れよ」
「はいっ！」

…一体、明久の何を聞いたんだ？ 少し気になるな…。
そうしていると、高橋先生が雄二と霧島さんを視聴覚室に来る様に言った。

そして、雄二たちが視聴覚室に着くと、会場にあるモニターには視聴覚室の様子が写された。

『では、問題を配ります。制限時間は50分、満点は100点です』
『不正行為などは即失格になります。良いですね？』

『……………はい』
『わかってるぞ』
『では、始めてください』

こうして、最後の勝負が始まった。テストが始まると、モニター

には問題も写された。

<<次の()に正しい年号を記入しなさい>>

()年 平城京に遷都

()年 平安京に遷都

流石は小学生レベルの問題だな。これなら明久も解けるんじゃないかな
いか？

()年 鎌倉幕府設立

()年 大化の改新

「よ、吉井君っ」

「蒼太っ」

「ああ(うん)、これで俺(僕)達の卓袱台が」
『システムデスクに!』

Fクラス全員が心から言った。勿論俺もだ。

「最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ!」
『うおおおっ!』

教室をも揺らすような歓喜の声が上がった。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

つ！！
Fクラスの卓袱台が、みかん箱になった。
…あの野郎。絞め殺す

第十四話（後書き）

感想、待ってます。

第十五問（前書き）

問 次の意味の故事成語を答えなさい。

『方角が分からないことから物事に迷って思案にくれること』

姫路瑞希の答え

「五里霧中」

教師のコメント

正解です。

早山蒼太の答え

「五里夢中」

教師のコメント

惜しいです。夢を霧と書けていたら、正解でした。

吉井明久の答え

「迷子」

教師のコメント

警察か迷子センターに連絡してください。

第十五問

「三対二でAクラスの勝ちです」

船越先生は、視聴覚室に乗り込んだ俺達に告げた。
ええ、分かっていますよ。分かっていますとも！

「……雄二、私の勝ち」

霧島さんは、床に膝を突く雄二に歩み寄った。

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

「よ、吉井君。落ち付いてください！」

「落ち着くのじゃ、蒼太！」

明久は姫路に、俺は秀吉に抱き付かれた。

「大体、53点って何なんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だったら」「」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい。アンタだったら、30点も取れないでしょうが！」

「蒼太、あんただったら途中で集中力が切れるでしょ！」

「それについては否定しない！」

「それなら坂本君（雄二）を責めちゃダメですっ（なのじゃ）！」

「くつ、4人とも何故止めるんだ!? このゴリラには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに!」

「それって体罰じゃなく処刑です!」

「それじゃあ生ぬるい! 雄二には絶望という名の快樂を与えてやる!」

「それは絶対にやってはダメなのじゃ!」

な、なぜだ! 処刑よりはマシだろう! ……生きてるし。

そういつているうちに、秀吉と姫路は体を張って俺達を止めた。

まあ、今回だけは許してやろう。ちつ、二人の優しさに救われやがって。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

こいつ、言い訳をしなかったって事は凶星だな。

「……ところで、約束」

約束? ……あつ! 忘れてた。確か負けたほうは、何でも言うことを2つ聞くって言うアレか!

「……………! (カチャカチャカチャ!)」

……ムツッリーニ、準備が早すぎるだろう……。

「分かってる、何でも言え」

雄二がそう言うのと、なぜか優子が顔を赤らめて俺に近づいてきた。

な、なんだ、なんだ!?

「……雄二、私と付き合っ」

「蒼太、私と付き合いなさいっ!」

「……はい?」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか?」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ? 他の男と付き合う気はないのか?」

「……私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

「……霧島さん、一途だなあ。雄二のやろっ、何でそんなに嫌そうなんだ?」

「拒否権は?」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ! 離せ! やっぱこの約束はなかった事に……」

ぐいっ　つかつかつか

霧島さんは雄二の首の根っこを掴み、教室を出て行った。

「じゃあ、私達も行くわよ!」

「いやいや、ちょっと待て!」

「何よ?」

「俺は、秀吉と付き合ってるんだぞ?」

「……」

ふう。これを言ってしまうえば、流石に

「それがどうしたの？」

「へっ？」

「だーかーらー、それがどうしたのって言うてるのよ」

「え？ いやあ、だからお前とは付き合えないって……」

「何でよ、二人と付き合ったらいいじゃない」

「えっ？ んな無茶な！ 第一、秀吉が可愛そうだろ！」

「む？ ワシは別にかまわんが」

「いいんかいつ！」

「って言うわけで、行くわよ」

「どこに！？」

「デートよ、デート！」

「何だって！？」

「ほら、早く！」

そう言うと、優子は俺の腕を掴んで走り出した。

勿論、秀吉も俺の片方の腕を掴んで優子と一緒に走り出した。

…… 本当にこんなんでいいのか？

「「いずれは、蒼太を私だけの彼氏にしてやるんだから（ボソッ）」

勿論、俺は二人がそう言い合っているなんて、全く知らなかった。

そして、Fクラスの担任が鉄人こと西村教諭に変わるなんていう事も知らなかった。

第十五問（後書き）

やっと1巻の内容が終わりました。

感想、待ってます。

第十六話（前書き）

今回はアニメオリジナルの話です。

第十六話

…。
ってな訳で、俺は優子と秀吉と映画館に来ている。…そこには…

「観念するんだな、明久」

「えっ？」

「男とは…無力だ」

姫路と島田を連れた明久と、鎖に繋がれた手枷をした雄二と、鎖を両手で握りしめる霧島さんがいた。

…雄二たち、何プレイですか!?

「……雄二、どれが観たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ『地獄の黙示録：完全版』」

「おい待て！それ3時間23分もあるぞ!？」

「……2回観る」

「1日の授業より長いじゃねえか!？」

「……授業の間、雄二に会えない分の……埋・め・合・わ・せ」

「やっぱり帰る」

雄二は手枷をしたまま、鎖を引き摺りながら帰ろうとした。…が

「……今日は、帰さない」

そう言うと、霧島さんはどこかからかスタンガンを取り出した。

「いやいや、霧島さん！？ スタンガンって何さ！

「な、なんだ翔子！？ それ、な、あべし、や、ちよ、や、ば……………」

…………… 雄二、お前の事は忘れないぞ。

「…………… 学生2枚、2回分」

「はい学生1枚、気を失った学生1枚、無駄に2回分ですね」

おいおい！ それでいいのか！？

「仲の良いカップルですね」

「憧れるよねえ」

「そうねえ。代表いいなあ」

「ワシ等もあんな風になりたいのお」

「ははははは……………」

なぜか、姫路たちは目をキラキラさせている。それを見た俺と明久は、苦笑しか出来なかった。

その後、俺達は別々の映画を見る事になった。

俺達は感動恋愛系の映画を明久達はアニメ系を見ることになった。

「ええつと、3番スクリーンね」

「ほら、さっさと行くのじゃ」

「お前等ポップコーンは要らないのか？」

「別にいらないわよ。第一、私はそんなにポップコーン好きじゃないしね」

「ワシもじゃ」

「そうか…………… じゃあ先に行ってくれ。俺はジュース買ってから行くから」

「わかったわ」

「早く来るんじゃないぞ」

「分かった分かった。お前等は何がいいんだ？」

「私は、メロンソーダで」

「ワシはコーラで」

「了解」

そういつて、俺はジュースを買うために列に並んだ。

列には、「あの豚め、お姉さまと一緒に映画だなんて、許せませんわ！」とか言っている人がいた。

……豚って明久の事か？

そう言つと、その人はどこかに行ってしまった。なんだっただろつな……。

つと、早くしねえと優子達に殺されちまう！

俺は、裏技の「よう、お待たせ！」って言いながら、順番を抜かしていった。

勿論、周りからは「何だこいつ？」「見たいな目で見られた。……皆はするなよ？」

俺はジュースを買つと、直ぐに3番スクリーンに向かった。

「お待たせ」

「遅いわよ、蒼太」

「そうじゃ。そのせいで、ワシ等何回かナンパされたぞい」

「んなつ!?!」

な、ナンパだと!?! ゆ、許せねえ!

「ちょっと急用を思い出した。ここで待っていてくれ」

「……アンタ、私達が誰にナンパされたか知ってるの？」

何だ、そんなことが……そんなもん簡単じゃねえか。

「そんな事」

「え？ 知ってるの？」

「ここにいる男子全員を締め上げれば済む事だ」

「アンタって、とんでもない所でバカよね！」

「じゃ、そういうことで」

「いやいや、待ちなさい！」

「何だ？ 俺は今モーレッツに忙しいんだが」

「全く忙しくないじゃろ！ それに、流石に全員では蒼太があぶないじゃろ！」

「大丈夫だ」

「何を根拠に言っとするんじゃ！？」

「俺は強い！」

「「すぐくバカ根拠だった！？」」

そんな会話を繰り返していると、ブザーが鳴り、映画の予告が始まった。

ちっ！ 命拾いしたな、ここにいる男子共よ。

そして、映画を見終わると、優子と秀吉は泣いていた。

まあ、確かに感動はできたかな。俺は泣いてないけど。

「ほら、顔拭けよ」

そう言うと、俺はハンカチを二人に差し出した。

「蒼太……」

「ありがとうなのじゃ」

二人は、ハンカチを使って顔を拭くと、このハンカチは洗濯して

返す、と言ってハンカチは木下家に持っていかれた。

「さてと、それじゃあ帰るか」

「そうね」

「そうするかの」

そういって、俺達は映画館を後にした。

「ふう、ただいま」

俺は自分の家に帰ってきた訳だが……今日はいろいろと疲れたな。風呂に入って寝ちまうかな。

俺は風呂に入ると、ベッドにダイブした。ダイブすると、ものが見事に意識を失った。

〈 〉

「ううん……誰だ、こんな朝に……」

俺は自分の携帯の着信音で目が覚めた。

「もしもし？」

『あつ、佐々木さん？』

「……はっ？」

『佐々木さん、早くしてくださいよお。皆、待ってますよ？』
「人違いだ！」

そう言うと、俺は電話を切った。……ちなみに今は6時27分だ。

二度寝するにも微妙な時間じゃねえか！ ……とりあえず、弁当でも作っとくか。

こうして、俺は少し豪華な弁当を作り出した。 ……って言うか、時間があるから必然的に豪華になっちゃうんだけどな ……。

第十六話（後書き）

アニメオリジナルですよね？

感想、待ってます。

第十七話（前書き）

今回は、完全オリジナルです。

第十七話

「とりあえず、飯は作ったが・・・流石に作りすぎたか？」

そう言った、俺の目の前には5段になっている重箱がある。

そして、その重箱の全ての段におかずがギツシリ詰まっている。

「……………まあ、秀吉達と食べたら、なんとかなるだろ……………多分」

そう呟くと、俺は時計を見た。…現在8時10分……………はあああああ
あ!?

「遅刻じゃねえか、こんちくしょおお！」

俺はそう叫びながら、着替えや用意などを5分で済まして家を出た。

が、学校までは走れば10分！ギリギリ間に合っはずだ！
そして、俺は学校まで走って行った。……………

「で、お前の言い訳はなんだ？」

「行く途中にジユギングをしていて倒れたおじいさんを介抱しようとしたら、他の人に「おじいさんを押し倒している人がいる！」って叫ばれて、警察呼ばれて、警察から逃げてきました」

「よし。分かった」

「分かってくれてよかったです。じゃあ俺はこれで」

「まあ、待て。教室に行くのはいつものやつを受けてからでもいいんじゃないか？」

そう言った鉄人は、俺の首を握ってきやがった。こ、この野郎、俺を殺す気か！

「何ですか！？ 俺、ちゃんと理由いいましたよね！？ 一から十までちゃんと言いましたよね！？」

「そんな嘘に騙されるバカがどこにいるんだ！」

「少なくとも明久は引っかかります！ そして嘘じゃありません！俺のこの目を見てください！」

そう言うと、俺は鉄人に真剣な眼差しを向けた。これで嘘ではないことが……

「そんなものは見なくても分かる！ ほら、さっさと行くぞ！」

そう言うと、鉄人は俺の首を持ったまま補習室に向かった。

「少しは見るよっ！ は、離せええええええ！」

「誰が離すか！ ほら、早く行くぞっ！」

「り、理不尽だあああああああ！」

俺の声が、文月学園に木霊した。

「っと、言うことがあったんだ……」

「さ、災難だね、蒼太」

「全くだよ。あの野郎、いつか仕返ししてやる」

「っで、その話は本当なの？」

「当たり前だ！ 嘘をつくなら、もっとマシな嘘をつくわ！」

「えっ！ 嘘だと思ってた！」

この野郎……こいつもいつか殺ってやる……。

「で、帰ってきたのがたった今なのね」

「ああ、そうだが……」

ちなみに、現在は皆が昼ごはんを食べたりする時間だ。

……何がうれしくて、こんな時間まで鉄人の補習を受けなくちゃならねえんだよ……。

「で、皆は昼ごはんをどうするの？」

「私は、食堂に行こうかと……」

「俺もだな」

「……………俺も」

「ワシもじゃな」

「あれ？ 皆食堂に行くの？ だったら、僕も食堂にいこうかな」

「そう。蒼太はどうするの？」

「俺は、弁当があるからな……………そういえば、ちょっと作りすぎたんだが、皆も食うか？」

そう。今日の俺の弁当は、量が半端なく多い。一人では、絶対に食べられないだろう。

「本当か？ なら、ワシは蒼太の弁当を食べるとしようかの」

「そうだね。僕もそうするよ」

「ほほう。俺もそうする。蒼太の飯うまいからな」

「……………確かにうまい」

「そ、そうなんですか？ 私も食べてみたいです」

「そうねえ、ウチも食べてみたいわ」

「じゃあ、皆俺の弁当を食べるって事でいいな。じゃあ、屋上行こうぜ」

そう言うと、俺達は屋上に向かった。

屋上には、なぜか優子と霧島さんと、見たことのない髪の毛が黄緑の女の子がいた

「あれ？ 何で優子達がいるんだ？」

「見れば分かるでしょ？ ご飯食べてるのよ」

「なんで弁当なんだ？ Aクラスはご飯とか出るんだろ？」

「たまにはいいじゃない、こういうのも」

「なるほどねえ。で、そちらさんは？」

「ああ、そういえば、アンタは知らないのね。こっちは、工藤愛子
よ」

「始めまして、蒼太君。工藤愛子だよ、よろしく」

「よろしく。……あれ？ 何で俺の名前を？」

俺、屋上に来てから名前呼ばれたっけ？

「そりゃ、分かるよ。何てったって、優子からいろいろ聞かされて
るよ」

「ば、バカッ！」

「優子から？」

「そうだよ。優子ってば、いつもい……」

「愛子！」

「あっ！ ごめん、ごめん。今は忘れてね」

「は、はははは」

忘れられるか！ 何か凄く恥ずかしいじゃねえか！

「っで、蒼太達はどうしてここに来たの？」

「俺達も、昼飯を食べようと思って」

「まあ、昼ごはんと言っても、蒼太のお弁当なのじゃが……」

「蒼太の！？ わ、私も食べるわ！」

「姉上、それ以上食べると太るんじゃないかの」

「だ、大丈夫よ。……多分」

「ま、優子は今が細すぎるから、少しぐらい太ったほうが可愛いか
も知れねえけどな」

「「！？」」

俺がそう言うと、なぜか優子が赤くなり、秀吉は俺を凄い形相で

睨みつけてきた。

……俺、何か言ったか？

「……雄二、これ食べて」

「ちよつと待て！ その怪しい匂いを放つ物が食べ物だと言つのか
！？」

「……早く」

「嫌だあああああああ！」

「……逃がさない」

雄二は霧島さんから逃げるために、凄じ勢いで屋上を去った。勿論、霧島さんは雄二を追いかけた。

「ねえ、雄二は霧島さんのお弁当があるからいらないだろうし、もう食べようよ」

「ああ、そうだな」

明久がそう言うと、俺は弁当を広げた。うん、我ながら上出来だ。

「……これ、本当に早山君が作ったんですか？」

「まあな」

「……アンタって、結構何でも出来るのね」

「そうか？」

「このお弁当、売れるんじゃないの？」

「流石にそれは無理だろう」

「いや、売れるわよ、きつと」

「私なら、これが売られていたら、絶対に買いますね」

「……即買い」

「そ、そうか」

俺は皆に褒められて、少し顔が赤くなった。

「それじゃあ、食べようよ」

「そうね」

『いただきます』

その後、俺達は俺の弁当を全部食べきった。……この人数でこの量……ちょうど良かったんだな。

……そういえば、そろそろ清涼際があったっけな。

第十七話（後書き）

感想、待ってます。

第十八話（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

「Hなほ・・・成人向けの本」

教師のコメント

消しゴムを使いなさい。……それと、貴方ならそれを書くと思って
いました。

早山蒼太の答え

「丈夫な体」

教師のコメント

貴方に何があつたのですか？

吉井明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

第十八話

それから、俺達は昼ごはんを食べ終わると、そのまま授業をうけて普通に過ごした。

……普通に言っても、俺達Fクラスでの普通だかな……。

今は秀吉と二人で帰っているところだ。なぜ二人かと言うとあだ、優子が先生に頼まれて、残って作業をしているからだ。

「そういえば、明日は清涼際の出し物を決めるんじゃないかな」

「ああ、そういえばそうだったな」

「蒼太はどんなのがいいのじゃ？」

「うう〜ん…楽しけりやそれでいいんだけどな。…めんどくさくなければ」

「…蒼太、それは単なるめんどくさがりじゃろ？」

「あつ、バレた？」

「バレバレじゃろ！」

そんな会話をしながら俺達は帰って行った。

……そういえば、優子は何の作業をしてるんだろう。

「コラッ！」

「痛っ！ 何するんだよ、秀吉！」

……なぜか、秀吉が俺の頭を平手で叩いてきた。

「今、ワシ以外の人を考えていたじゃろ！」

「何でわかったの!？」

「なんとなくじゃ!」

「怖いわ!」
「ふん」

……秀吉がそっぽを向いてしまった。
ま、まあ、ちよつとその仕草が可愛いと思うのは俺だけじゃない
だろうな。

でも、これはちょっとどうしようか……。流石にこのままって訳には
いかないだろうな。

うううん、困った。これはほんとに困ったなあ。

どうしたら機嫌を治してくれるんだ？

……。何にも思いつかねえ……。

「ねえ、蒼太？」
「なつ、何だ？」

おつ。まさかの女口調か。
個人的にはこっちの方が好きなんだよな。

「……手、繋ぐ?」
「あ、ああ。別にいいけど……」

そう言うと、俺と秀吉は手を繋いだ……。
何だか、無茶苦茶恥ずかしいんですけど!
……ってあれ? 秀吉ってさっきまで怒ってなかったっけ?
……。まあ、いいか。

「なあ、蒼太？」
「どうした？」
「……なんでもない」
「?????」

…意味が分からん！ しかも、今度は秀吉上機嫌だし…まあ、いけど。

俺がそう考えていると、不意に秀吉が手を離して俺の前に立った。

「どっした？」

「目、つぶって？」

「あ、ああ」

な、何だ！？ 一応言われた通り目をつぶったが…何が起ころんだ！？

「ちゅっ」

「っ！？」

「…これで許してあげる」
「……………」

ええつと…今、何が…っえ？ って言っか今、俺と秀吉がキスをしたのか？ またしたのか！？

「アンタ達、何やってんのよ？」

「へっ？」

俺達がびっくりして後ろを見ると、そこにはここには居ないはずの優子がいた。

「こ、これはその…なあ？」

「そ、そうじゃ…のっ？」

「アンタ達ねえ…蒼太！」

「はいっ！」

怖えええええっ！ 優子さん、オーラが出てますよ！！ その分、
余計に怖えええええええ！

「目をつぶって」

「はいっ！」

俺は優子の言う通りに、目をつぶった。
あれ？ これって、さっきと同じ展開じゃあ…。

「ちゅっ」

「ん！？」

やっぱり…。って、ええええええええええ！？ やっぱりとか言ってる場合じゃあねえって！！

「…は、初めてなんだからね！」

「あ、ああ…」

優子は、顔を赤くすると秀吉が組んでいる手とは逆の手を掴んだ。

「ほら、帰るわよ！」

「あ、ああ。そうだな」

「……………」

その後、俺は優子に引つ張られる形で家に帰った。

………… 去り際に、秀吉の顔が暗かったのは気のせいかな？

その後、俺は晩飯を食べてちゃっちゃと風呂に入ってベッドに入
った…はずだった。

「………… 何で秀吉が俺のベッドにいるんだ？」

そう。俺がベッドに入ろうとすると、既にベッドには秀吉が入っていた。

「べ、別にいいじゃろ？」

「良くはないだろう。それと、どうやって部屋に入ったんだ？」

「窓からじゃ」

「普通に答えるな！ 窓の修理代を払うのは俺なんだからなっ！」

そう、秀吉はなぜか泥棒が使うような器具を使って窓に穴を開け、鍵を開けて俺の部屋に入って来たそうだ。

……ここ、2階だぜ？

ちなみに、今の秀吉の格好は……上下ライトグリーンのパジャマだ。

……やばっ。スゲーかわいいんですけど。

「ねえ、蒼太。一つ聞いていい？」

「？ 別にいいけど？」

……うん。もう、その口調ですっというて下さい、秀吉様！

「蒼太は私の事…好き？」

「いきなりスゲー質問だな……」

「ちゃんと答えて！」

俺がそう言うと、秀吉は少し俺を睨んでそう言った。
よく見ると、秀吉は少し涙目になっていた。

「ど、どうしたんだよ……いきなり」

「だって…私のお姉ちゃんとキスした時は……」

「キスした時は？」

「何か……そのお。私とした時よりも嬉しそうだった！」

「え！？俺、そんな顔してたの！？」

「してた！」

そう言つと、秀吉は顔をぶうつと膨らませた。

……皆に今の状況を説明するとだな……。

パジャマ姿の秀吉が、俺のベッドの上でハの字の形（女座り）で座りつつ、俺の枕を抱いて顔を膨らませている。

……何、この凄く可愛い小動物は！

「聞いている？」

「へっ？ ああ、聞いているよ。……俺的にはそんな事なかったんだけどなあ……」

「でも、顔には……」

「そんな事ないって。俺は秀吉も優子も両方好きだしな。だから、どっちか一人だけが好きって事は絶対はない。……だから、安心していいぜ？」

俺は、秀吉の頭を撫でつつ言った。

秀吉は、それを聞いて満足なのか膨れっ面を止めた。

「……私、信じるよ？」

「ああ。ドンツと信じる」

「それはちよっと違う気がするんだけど……まあ、いいかな」

そう言つと、秀吉はベッドから降りた。

……さっきの秀吉を携帯に撮って待ち受けにしたかったなあ。俺がそう考えていると、秀吉が俺に近付いて腕を組んできた。

「な、何だあ？」

「今から、写メ撮るんだよ」

「何故？」

「ツーショットを待ち受けにするの」

「ああ、なるほど」

「じゃあ撮るよ？ ハイ、チーズ」

秀吉がそう言うと、秀吉の携帯が光って写メを撮った。

「じゃあ送っとくね」

「あ、ああ」

「じゃあ、おやすみ。蒼太」

「おやすみ、秀吉」

そして、秀吉はちゃんと玄関から家に帰った。

……結局、どうやって俺の部屋に入ったんだ？

「あ、ああ」

「じゃあ、おやすみ。蒼太」

「おやすみ、秀吉」

そして、秀吉はちゃんと玄関から家に帰った。

……結局、どうやって俺の部屋に入ったんだ？

「さてっと、じゃあ寝るか！」

俺はようやくベッドに入った。……窓が近くにあるから、風が…

…秀吉iiiiiiiiイッ！

俺は心の中で、今年で一番叫んだ。

……ちなみに、今の待ち受けは勿論、さっきのツーショットだ。

第十八話（後書き）

感想、待ってます。

……それと、更新遅くなってごめんなさい m ((m

第十九話

「のう、蒼太？」

「ねえ、蒼太？」

「どうしたんだ、秀吉に優子？」

「『如月ハイランド』ってしってるかのお？」

「ああ、もう直ぐプレオープンするって言う、巨大テーマパークだろ？」

「とても怖い幽霊屋敷があるらしいの」

「ほお、面白そうだな」

「日本一の観覧車もあるらしいぞ」

「アレは、相当デカイらしいな」

「世界に3番目に速いジェットコースターもあるらしいわよ」

「速い上に、色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするんだろ？ 楽しそうだよな」

「他にも楽しいものが沢山あるらしいぞ」

「そりゃスゲーな」

「それでじゃ。今度そこがオープンしたら、私達と」

「ああ、そこまで行きたいんなら」

「うん」

「今度、友達と一緒に行ってこいよ」

「私達、閉め技には自信があるわよ」のじゃ」「

「待て待て待てっ！ いや、マジで！」

「私達は、蒼太と行くのじゃ！」

「そうよ！」

「オープン直後は込み合うから両腕がもげるううううっ！」

「それなら、プレオープンのチケットがあったら行ってくれるかのお？」

「はあはあ……。あ、アレは相当入手が難しいらしいぜ？」

「行ってくれる？」

「そうだな……ああ、手に入ったらいいぜ？」

「本当かのお？」

「ああ、本当だ」

「もし、約束を破ったら」

「大丈夫だつて。この俺が約束を破るようなやつに見えるか？」

「一生、体の自由が無くなる」

「命に代えても約束は守る！」

「んー？……はあはあ、今何時だ？」

そう言つて、俺は汗ぐっしょりで起きると直ぐに携帯の時間を見た。

携帯は、7時30分を指していた。……まさか、あの約束を夢で見るとは……。

「……と、とりあえず飯食つてさっさと学校に行きますか……」

そう言つと、俺はとりあえずトーストを焼いて食べると用意をして文月学園へ向かった。

「さてつと、今日も行きますか」

……流石にこの登校時は暇だな。何かする事はねえかな……。
そう思っていると、目の前に死た……。もとい、明久が倒れていた。

「あ、明久！？ 何で倒れてるんだ！？」

「そ……蒼……太？」

「大丈夫なのか！？」

「……お……」

「お？」

「お腹……」

「じゃ、学校でな」

「話は最後まで聞こうよっ！」

「はいはい、さっさと学校に行くぞ」

「………うん」

そう言うと、明久はよろよろした足つきで立つと、俺達はどうでもいい話をしながら学校に向かった。

………まあ、流石に可愛そうになって途中のコンビニでおにぎりぐらいは買ってやった。

そして、俺達は学校に着いたが………皆、『清涼際』の向けての準備が始まってるなあ。

お化け屋敷のために教室を改造してるクラス。他のクラスもいろいろと準備をしている。

そして、我等がFクラスのメンバーは………。

「吉井、こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんて、外野まで飛ばしてやる！」

……はああ。

「何で、野球やってんだよ……」

そう、俺達はいまだに何をするか決まっていな。なのに……俺を除いたFクラスの男子（秀吉の性別は秀吉です！）は野球をしてやがる。

鉄人に……あつ。鉄人がグラウンドに……明久たちは、鉄人の恫喝が響き、明久たちはFクラスに帰ってきた。

……鉄人、声大きいよ。俺等のクラスまで、聞こえたよ……。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼際』の出し物を決めなくちゃならないんだが」

野球を中断された後、Fクラス代表の雄二は、床にござを敷いて座る俺達を見下ろしながらそんな宣言をしてきた。

「とりあえず、議事進行並び実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな雄二の態度。さてはあの野郎、『清涼際』には全く興味がねえな。

……まあ、俺もあんまり興味ねえけど。

……姫路が明久になんか言ってるけど、まあ、どうでもいいか。
……寝るか？

「のう、蒼太？」

「ん？ なんだ、秀吉？」

「そ、そのおじゃな……」

「????？」

「い、一緒に……」

「一緒に？」

「一緒に、ま、周らんか!？」

「っ!？」

やばい！ 今の恥ずかしそうな秀吉の顔……凄く可愛い!! :
… ってか、殺気がやばいんですけど!?

「だ、ダメかのお？」

「へっ? いや、俺は別にいいけど……」

「本当か!? ありがとうなのじゃ!」

秀吉は大声でそう言うと、俺の手を握った。

勿論、秀吉の大声のせいでクラス中が俺達を見た……。勿論、殺気立った目で。

すると、いきなりクラスのドアが開いた。

「ちょっと、秀吉！ 抜け駆けは許さないわよ！」

「あ、姉上!? なぜ個々に!？」

なぜか、優子がFクラスへ入ってきた。

「こっちの方に用事があつて、Fクラスの前を通つたら、あんた達の会話が聞こえたのよ！」

「何で聞こえるの!? 確かに俺達は窓際だけだよ！」

「蒼太は黙ってて!」

「はいっ!」

そんな目で俺を睨まないで！ お願いだからっ！！

「で、どうしてくれようかしら、このバカ弟は！」

「べ、別にいいじゃろ!？」

「いいわけないでしょ!！」

「何でじゃ!？」

「わ、私も一緒に周りたいのよ」

「へっ?」

「アンタは黙ってなさい!」

「は、はいっ！ すいません!」

俺は深々と頭を下げた。……ってか、殺気のような視線が……優子と秀吉に比べたらましただけだな！

「蒼太、今、私達（ワシ達）に対して、とっても酷い事を考えたでしょ（じゃろ）!」「」

「な、なんでそれを! ……あっ」

し、しまった!！ 今、俺は余計なことを言ったんじゃないか!？

「蒼太、ちょおつと廊下行こうか?」

「そうじゃのお。ほら、一緒にいこうなのじゃ?」

二人とも、顔は笑ってるけど目が怖いよ……。みんなも、ちょつと引いてるし。

「い、いやあ……ほ、ほら！ 今から、『清涼際』の出し物を決めないといけないし」

「そんなのはみんなが決めてくれるじゃろ?」

「そうね。みんなが決めてくれるわ」

「い、いや！俺もこのクラスの一員だ！だから……」

「だから？」

「せめて痛みは意識が保つぐらいでお願いします」

勿論、D O G E Z Aで俺は言った。

「無理ね（じゃな）」

「ですよね」

その後、俺と秀吉と優子は廊下に出た。

数秒後、俺は断末魔か！？　ってぐらいの叫び声を出して、気を失った。

第十九話（後書き）

やっと、更新しました！^-^

って言うか、最近主人公の扱いが……ま、まあ、気にしないで下さい！（汗）

それでは、感想、待ってます！

第二十話（前書き）

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

「家庭用の可愛いエプロン」

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

「スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを・・・」

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え
「ブラジャー」

教師のコメント
ブレザーの間違いだと思っています

第二十話

「……こ、ここは？」

俺が目覚めると、辺りには目を疑うような綺麗な草原があった。そして、草原を横切るかの様に川があり、川を渡った先には死んだはずのひいおじいちゃんや、ひいおばあちゃん、そしておじいちゃん達がいた。

「蒼太ー、こつちへおいで〜」

「こつちこつちい」

「ほら、早くせんかあ〜」

……これって、よくアニメとかであるよな？ 確か、死んだ人たちが行く世界ってことで合ってるよな！？

さ、最悪だ。俺の人生THE END!？ って、待て待て待て！！ まだ死にたくないわ！！

「俺は死にたくねえええ！」

「うわっ！ びっくりした」

「へっ？」

俺はいつの間にか目を覚ましていた。
目を覚ました俺はとりあえず辺りを見渡した。……ここ、保健室か？

そして、近くにはなぜか明久がいた。

「あ、あれ？ 何で保健室に？」

「覚えてないの？」

「ああ」

「蒼太はね……」

その後、俺は明久から清涼際は何の出し物するかとか、なんで保健室にいるのかとか、姫路の事とか、いろいろ聞いた。

そして、明久は今から雄二と学園長に会いに行くらしいので、俺も付いて行くことにした。

『……賞品……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角にある学園長室の前まで来ると、扉の向こうから誰かが言い争いをしているのが聞こえてきた。

……如月ハイランド……なぜか背筋にゾツとする感じがするんだが……。

「蒼太に明久、どうしたんだ？」

「いや、ちよつとな」

「中から話し声が聞こえるんだけど……」

「そうか。学園長は中にいるってわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

取り込み中かどうかは気にしないのか？　まあ、俺も気にしねえけど。

「……失礼しまーす」

俺たちは学園長の扉をノックすると、返事が来る前に中に入った。
いった。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

ええと、確かこの白髪の人には藤堂カヲルって言う学園長で、もう

一人が教頭の……・

「た、た、た」

「どうしたの、蒼太？」

「太鼓先生！」

「竹原だ！ 誰が太鼓だ！？」

「ああ、そうそう。竹原、竹原」

「呼び捨てにするな！」

「ああ、すんませんねえ」

実はちゃんと名前を知っているのだが、俺はこいつのことがひじよおおおおに嫌いだから少しかかってやった。

「ちっ！ ……しかし、取り込み中だって言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けられませんね。……まさか、貴女の差し金ですか？」

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？ 負い目があると云う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」

「さっきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」

「………そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう。それでは」

そう言つと、竹原の野郎は学園長室から去つて行つた。けつ、どこでいいからさっさと俺の視界から消えやがれ！

「んで、ガキ共。アンタらは何の用だい？」

学園長は会話を中断された事は気にしない様子で、俺たちに会話を振ってきた。

「今日は学園長にお話があつてきました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

「失礼した。俺は2年F組の早山蒼太です」

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二です。そしてこつちが……」

雄二が明久を示して、紹介をする。

「……二年生を代表するバカです」

「ほう……そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井と早山かい？」

「ちょっと待つて学園長！ 僕たちはまだ名前を言つてませんよね！？」

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじゃないか」

「ありがとうございます」

この面子を見て気が変わるってどうなの？

「礼なんか言う暇があつたら、さっさと話しなウスノロ」

「わかりました」

……雄二、なぜ耐えられるんだ？　いつもの雄二なら絶対に切れてると思うんだが……。

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

確かに、教室の設備は酷いからなあ。確か、秀吉もたまに咳き込んでたなあ。

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です」

あ、言動が少し変わってきた。まあ、こうなるって思ってたけど。

「学園長の様に、戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

雄二のやつ、丁寧な口調の中に結構危険な悪口も入ってる。……

こりゃ、相当切れてるなあ。

おお。やっぱり俺の知ってる雄二だったな。

そんな慇懃無礼な雄二の説明が終わると、学園長は何やら思案顔になる。

「あの、学園長……？」

心配になったのか、明久が学園長に話しかけた。ま、普通は腹を立てると思うけど……。

「……ふむ、丁度いいタイミングだね……」

ん？ 何か今、小声で何かを呟いたような……。

「よしよし、お前たちの言いたい事はよくわかった」

「え？ それじゃ、直して貰えるんですね！」

「よかった、よかった」

ふう、これで設備のほうは一安心かな。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「それじゃあ生ぬるい。まずは口に縄をして舌を噛み切れないようにしてから、手足の爪を剥がしてその後は、手足の骨を一本ずつ折ってだな……」

「……明久。もう少し態度には気を使え。そして蒼太は色々怖いわ！」

つ、つい本音が……。皆はこの続きが聞きたいか？ 聞きたいなら、教えてやらんこともないがな。

「蒼太、誰に言ってるの？」

「えっ？ 声に出てた？」

「うん」

「は、ははは……」

し、しまった。……まあいいか。どうせ誰も聞きたくないだろうしな。

「全く、このバカ達が失礼しました。どうか理由を……って、蒼太

！ 殺気を俺に向けるなっ！

「気にするな」

「気にするわっ！」

ふふふ、俺と明久を同じ扱いにしたことを後悔しても遅いからな、
雄二。

「くっ！ ま、まあそれは置いて。……理由をお聞かせお願いしますか、ババア」

「そうですね。教えてください、ババア」

「聞かせる、妖怪クソババア」

「……お前達、本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？
特に最後のやつ！ 誰が妖怪クソババアさね！」

「そりゃ、アンタしかいないだろ？」

「……アンタには少し教育が必要さね」

「へっ？」

そう言つと、なぜか扉から鉄人が現れた。……ま、まさか！

「早山、お前は俺と補習行きだ」

「い、嫌だあああああっ！」

俺はその後、鉄人により補習室へ連行された。

はあ。……泣いてもいいですか？

「た、大変だった……」

俺はあの後、なんと放課後も+2時間増しで補習を行わされた。
あんにやるお、鬼だな。

俺はやつと解放されて、今は下駄箱にいるのだが……何で秀吉と
優子が居るんだ？

「やっと来たわね」

「全く遅いのじゃ」

「……何でいるの？」

「待つてたからに決まってるでしょ（じゃる）」

「おお！」

やばい、何か感激した。

この二人にも優しい所があるなんて！

と、言う訳で俺は二人と一緒に帰る事になった。

「のう、蒼太？」

「何だ？」

どうでもいい話をしながら帰っていると、秀吉が改まって聞いて
きた。

「蒼太は召喚大会って知っておるか？」

「ああ、知ってるけど……それがどうかしたのか？」

確か、姫路と島田が出るって聞いたな。

「一緒に出んか？」

秀吉が、顔を赤らめて言った。うん……そういえば、姫路たち

が出るって言うてたし、おもしろそうだな！

「ああ、別にいいけど」

「良くないわよ！」

俺が秀吉に答えると、優子が即否定して来た。

「別にいいじゃろ？ それに、姉上は霧島と出るのじゃろ？」
「うっ。……そりゃ、そうだけどさあ」

ほほう。優子も出るのか……こりゃ面白そうだな。

「と、言う訳でよろしくなのじゃ、蒼太」

「ああ、分かった」

「ち、ちよっと！」

秀吉はそう言うつと、家に入って行った。

優子も、秀吉を追い掛けて家に入って行った。

……何だかんだで、面白い清涼際になりそうだな。

第二十一話（前書き）

いやあ、夏休みも終わりましたね。
これからもよろしくお願いします。

第二十一話

「そんなこんなで清涼際当日」

「？ 誰に言っておるのじゃ？」

「あれ？ 声に出た？」

「うむ」

うわっ！ めっっちゃ恥ずかしいじゃん！ 俺、馬鹿みたいじゃん！

「それにしても、やはり雄二の統率力は凄いもんじやのお」

「それを言ったら、このテーブルを作ったお前も凄いだろ？」

「いや、わしの場合は演劇部で使っておる小道具のクロスを敷いただけじゃ」

「へえ。でも、やっぱり凄いと俺は思うけどなあ」

「そ、そんなに褒めるでない」

秀吉はそういうと、顔を伏せた。照れてんのか？

その後すぐに、秀吉は明久たちと会話を始めていた。

……はっ！ 殺気!？

俺は周りから浴びせられる「このやろう!」とか「夜道に気をつけな」みたいな視線 + 殺気を無視して、ムツツリー二達と胡麻団子の試食を始めた。

「おお。おいしそうな胡麻団子だな!」

「そうですねえ……おいしそうです。……これじゃあ私の作った胡麻団子なんて……」

俺の言葉の後に姫路が言った。まあ、最後のほうは小声だったの

で、聞き取れなかったが……本能が身の危険を感じた。

「土屋、これウチらが食べちゃってもいい？」

「……………（コクリ）」

「では遠慮なく頂こうかの」

そう言うと、秀吉と姫路と島田はムツツリーニが作った、出来立てほやほやの胡麻団子を頼張った。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところもいいのう」

……………大絶賛だった。やっぱり女の子。甘いものが好きなんだなあ。

「お茶もおいしいです。幸せ……………」

「本当ね……………」

「これならいくらでも食べれそうなのじゃ……………」

秀吉と姫路と島田の目がトロンとしている。トリップ状態だな……………

……………何かムカつく！ 何で秀吉まで！……………こうなったら！

「ちよつと厨房借りるぞ！」

「……………（コクリ）」

「いきなりどうしたんだらうね」

「さあね」

「どうしたんでしょう」

「……………」

「まあいいや、じゃあ僕も貰おうかな」

その後、俺が胡麻団子を作っていると、何故か明久の口から変な音が聞こえたが今はそんなことを気にしてる場合じゃない！

なんとしても、ムツツリー二に負けてたまるか！！

その後、雄二からも変な音が聞こえてきたが、その頃には俺も最後の仕上げだったので、そこまで気にしていなかった。

そして、やっと完成した！！

「みんな！……って、何やってんの？」

俺が厨房を出てみんなのところに行くと、何故か明久が島田の拳を受けていた。

「なんでもない。それにしても、蒼太はどこに行ってたんだ？」

「ちよつと厨房で胡麻団子を作ってたんだよ」

「う、胡麻団子……」

「？」

何故か雄二の顔が少し青くなった。……一体、何があったんだ？

「うわぁ……美味しそうですね！」

「本当、美味しそうだわ！」

「食べてもいいのかのお？」

「ああ、食べてくれ」

「じゃあ、俺も貰うか」

「僕も貰うよ！」

「……俺も」

「おう、みんな食べてくれ！」

そう言つと、みんなが俺の作った胡麻団子を食べ始めた。

「こつちも美味しいです」
「本当、美味しい！」
「凄く美味しいのじゃー！」
「ああ、流石は蒼太だ」
「本当、流石は蒼太だよっ！」
「……………中々の味」
「そうか、良かった。……………ところで、ムツリーニのとどつちが旨かった？」
「……へっ?」「」
「俺たちは食べてないからなあ」
「そうだね」

何故か明久と雄二はどこか遠い目をしていた。……………本当、こいつらに何があつたんだらう。

「っで、どつちが旨かった？」
「そうねえ……………どつちかといえば、私は土屋のほうね」
「私もどつちかと言えば、土屋君のほうです」
「わしは、蒼太の方が美味しかったのじゃ」

俺は秀吉の言葉を聞いて、心から「ヨッシャアアアアア！」と叫んだ後、秀吉に抱きついた。

「なっ!? い、いきなりなんじゃ!?」
「秀吉好みの味付けにして良かった!!」
「!?!?」
「……………へえ、秀吉好みの味付けねえ」
「あつ……………ひ、秀吉！」
「ひゃいー！」
「し、召喚大会に行くぞ！」

「う、うむ」

その後、俺と秀吉は茶化される前に会場に向かった。

第二十二話

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

……あれから、俺と秀吉は召喚大会に向かったのだが、まさか一回戦の相手が……

「お姉さまのために、勝たせていただきます！」

「やるからには負けない！」

「試験召喚！」

Dクラスの平賀と清水だったとはな。ってか、清水は何か色々と怖いわっ！

「行くぞ、蒼太！」

「ああ、流石に一回戦負けはシャレにならねえからな」

「狙うは優勝じゃ！」

「……ええっ!?!」

いやいやいや、三回戦ぐらいで良くね!?! いや、マジで!!--

「優勝するんじゃない! それ以外は認めんぞい!」

「何だよ! 何でそんなに優勝したいんだよ!?!」

「さあ、行くぞい!」

「ええっ!?! 無視!?!」

「「「……」」」

……相手がポカーンとしている……これは、チャンス!

「試獣召喚（サモン）」
「へっ？」

これが俺の召喚獣か、いいじゃねえか！
右手には剣、左手には盾、服装は素早く動けそうな鎧……まあ、
頭は出てるけどな。

でも、結構かつこいいじゃねえかつ！

『Fクラス 早山蒼太 VS Dクラス 清水美春
数学 208点 96点』

「なっ！？」
「くらえっ！」
「きゃっ！」

俺は自分の召喚獣を素早く動かし、清水に一撃を加えた。
すると、清水の点数は0になり、清水の召喚獣は消滅した。

「くっ。卑怯だぞ！」
「おぬしの相手はわしじゃっ！ 試獣召喚！」

『Fクラス 木下秀吉 VS Dクラス 平賀源二
数学 65点 97点』

「行くそいつ！」
「くっ！ でも、この程度なら！」

……ううん。流石に良心が痛むけど、いいか。

「くらえっ！」

「えっ!?!」

俺は平賀の意識が秀吉に向いている間に、平賀の召喚獣に一撃を加えた。

すると、得点差があるせいか、またもや一撃で平賀の召喚獣は消滅した。

「し、勝者、早山&木下ペア！」

そして、俺たちの勝利が高らかに宣言された。

……、二人とも戦場では隙を見せたほうが負けなんだぜ？

「やったのじゃっ！一回戦突破じゃ！」

「ああ、そうだな」

「次もこの調子で行くぞい」

「あ、ああ」

正直、言っちゃあ悪いけど、あんまりやる気がないんだよねえ。次の勝負でギリギリの勝負をして、3回戦で負けるとするかな。

「そろそろ戻ろうぜ」

「うむ、いいぞい」

そう言つと、俺たちは自分のクラスに戻っていった。と、途中で明久と雄二に会った。

「よお、どこに行くんだ？」

「お前には言つてなかったな」

「何を？」

「俺たちも、召喚大会にでるんだ」

「へえ〜。じゃあ、今から試合か？」

「ああ、そうだ」

「ふうん……。秀吉」

「なんじゃ？」

「俺、明久たちの勝負を見てから帰るから、先に帰っててくれ」

「うむ、分かった」

そう言つと、秀吉はFクラスに帰っていった。

「じゃあ行くつか」

「ああ」

「よし、まあ気軽にやれよ」

そんな会話をしつつ、俺は又もや会場に向かった。

つてなわけで、今は明久と雄二たちが大会一回戦をやってんだけど……。

さっきから明久は、相手の女の子の攻撃を軽く避けてるし……おまけに雄二は……

「ふははははは！ 無駄無駄無駄あつ！」

と、叫んでいる……お前は、どっかの悪役か！

「……教育者としては、坂本&吉井ペアにはぜひとも負けてもらいたいものです」

先生、それには俺も同感です。

すると、雄二が一撃を相手に食らわせた。

雄二の点数は、明久と違って179点もの点数があるから、まあ簡単に勝てるだろう。

そして、明久の方は点数が低いので、手数で勝負をしているのだが……改造制服を着て、木刀で女の人を滅多打ちって、どう考えても明久が悪役だよな？

「とどめっ！」

雄二がそう言うと、雄二の召喚獣が相手の召喚獣の腹にぶち込んだ。

そして、雄二の相手の召喚獣は消滅した。

「それじゃ、僕も」

そう言うと、明久の方もとどめの一撃を食らわせて、相手の召喚獣を消滅させた。

「……勝者、坂本&吉井ペア」

木内先生は、凄く不服そうに勝者の名前を告げた。

まあ、教育者的な立場から言うと、そうなるよな。

「それじゃあ、改めて……」

「うん」

ん？ 何だか二人の様子が……。

「さっきの決着をつけるぞクソ野郎！」

「それはこっちの台詞」だよバカ野郎！」

もう、勝手にやっつけ。

第二十三話（前書き）

今回から、まさかの仮面ライダー要素が入ります！
嫌な人は、速攻で戻ってくださいね^-^:

第二十三話

「……そろそろやめたらどうなんだ？」

一回戦が終わって、結構経ったが、明久と雄二はいまだに殴り合いを続けていた。

しかし、よくやるもんだよなあ……。ん？ あれって……。秀吉？
秀吉が、走って俺達のところに来た……。あせった様子で。

「明久に雄二。殴り合いなんぞしておらんで、急いで教室に来てくれんかの？」

俺が呼ばれてないぞ？

「あれ？ 喫茶店でなにかあったの？」

「営業妨害じゃ」

「え、ええ!？」

「そうか。で、相手は誰だ？」

「うちの学校の三年じゃ」

「よりによつて、三年生か……。まっ、そういうトラブルなら、雄二の出番だね」

「よし、行くぞ」

そう言つと、秀吉と明久と雄二は喫茶店（Fクラス）に向かった。

……で、俺は？

……まあ、木の上のほうにいたら、流石の秀吉も分からないか……

…。

「さてつと、営業妨害なら雄二一人で大丈夫だろ」

ってなわけで、俺は木から降りて学園祭を楽しむことにした。

「さてつと、どこに行こうか……ん？」
「何をしている」

俺が学園長室の前を通ろうとすると、何故か目の前に鉄人が現れた。

「えっ？ いや、別に……」

「そうか……今、ここは立ち入り禁止だ」

「はっ？」

「だから、さつさとあっちの道を行け」

正直の所、別にあっちの道に言ってもいいのだが……立ち入り禁止といわれると、なぜだか入りたくなる！

「へえ〜。それじゃあ……」

「ああ、さつさとあっちの道に」

「失礼します〜」

「あ、コラッ！〜」

俺は鉄人の横をスツと通り過ぎると、学園長室に侵入した。

そして、そこにいたのは……仮ライダーWの変身ベルトを付けた、学園長こと妖怪クソババアがいた。

「なっ!? い、いきなり入るとは何さねっ!」

「ええっと……失礼しました」

「ま、待ちな!」

俺は、見てはいけないものを見た感じなので、さっさと学園長室を出ようとしたら……

「どこへ行くんだ、早山?」

鬼の形相で俺を睨んでいる、鬼こと鉄人…もとい西村教諭がいた。

「ええっと……い、今見たことは口外しませんよ!」

「当たり前さね!」

「じ、じゃあそう言う事で!」

「逃がさんぞ?」

「……俺は一体どうすれば?」

「ここで記憶を消す」

「先生が言う台詞じゃないですよね!」

「……西村教諭、ちよっと」

そう言うつと、クソババアは鉄人を呼んだ。……ち、チャンス!

「逃げたら、アンタは退学だよ!」

「んなっ、アホなことがあってたまるか!」

クソババアは、そのまま鉄人と話を始めた。

クソツッ! 何が楽しくてこんな空間にいないかならなんだよ

っ！

「……ってのはどうさね？」

「しかしそれでは……なるほど、それで行きましょう」

ん？ 何を話してるんだ？ ……な、何か嫌な予感が……。

「早山、ちょっと来い」

「は、はい……」

俺は鉄人に呼ばれたので、鉄人たちの方に寄った。
そして……何故か、ドライバーを付けられた。

「い、いきなりなんですか！？」

「アンタ、どうせこれの元の特撮をしってるだろ？」

「ま、まあ見てたしな」

「見てたのかい！？」

「ええ！？ まさかこれを持っている人に、言われるとは思わなかった！」

「し、失礼さね！ これは孫のやつを借りただけさね！」

「そ、そうなんですか」

「コホン。じゃあ、変身してみてくださいさね」

「嫌ですよ！」

「早山？」

「西村先生、俺の名前を呼びながら頭を持たないでください！ 骨が、骨があああああ！」

そう言つと、鉄人は頭を離した。……頭、割れるかと思った。

「さあ、早くやるんだ」

「先生がやればいいで……」

「右手が疼いて来たな」

「精一杯やらせていただきます！」

はぁ……。これは流石に恥ずかしいけど……命のためだ！ 仕方ない！

「じゃあ、行きますよー！」

「ああ」

「変身！」

《JOKER》

そう言つと俺は、元々挿されてあつた、CYCLONEメモリを完全にWドラバーに差し込んだ。

その後、JOKERメモリをドライバーに差し込んだ。

そして、手をクロスするように、ドライバーを開いた。すると

《CYCLONE》

《JOKER》

と言う電子音が鳴り、その跡に効果音が鳴った。

もう、ここまで来たら、決め台詞まで言つてやる！

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「……………」

「……………」

べ、別に二人の視線なんて、痛くなんてないんだからね！

「なるほど……これは、早山がいちばんですかね、学園長？」
「そうさね。早山！」
「は、はい？」
「アンタの召喚獣にプレゼントだよ」
「はっ？」
「受け取るんだね」
「??？」

俺は意味が分からないけど、とりあえずベルトを外した。

「早山、召喚獣を出しな」
「は、はあ」
「召喚獣の召喚を許可する」

ま、まあ、よく分からん事になってきたが……まあいいか。

「試獣召喚！」

俺が召喚獣を召喚すると、何故か鎧の上にWド イバーが装着されてるって言う、凄くシュールな絵があった。

「……………へっ？」
「これで、お前は召喚獣で仮面 イダーWになれるってわけさね！」
「な、なんですかこれは!？」
「Wドライーさね」
「そういうんじゃないかって！ なぜ、俺は仮面ライダーになるんですか!？ それに、これは二人いないと変身出来ないですよっ!？」
「知ってるよ」
「じゃあ!」
「もう一人、見つければいいさね」

「結構簡単に言いますね！」

「で、変身した時の効果だがね……」

俺は結局、変身した時の効果などを教えてくれた。

まず、変身するともう一人と意思が通じ合い、点数は二人の合計点らしい。

そして、メモリを変えると、そっち側の点数が-10される。

そして、必殺技のMAXIMUM DRIVEは放つ時に点数が二人とも1（二人合わせると2）になるが、攻撃力はその時減らした点数×2の威力らしい。

ちなみに、このとき減らした点数は、1分につき1点回復する、しかし、回復するのはあくまでこのとき減らした点数らしい。

……結構面白そうな設定だな！

「よっしゃ！ 探してやるぜ、俺の相棒！！」

「そのいきさね」

「それじゃあ、俺、相棒探しに行ってきます！」

「ああ、頑張るんだよ」

「はいっ！」

「意気込んでいるところ、悪いんだが……」

「なんですか？ 俺は急いで相棒探しに出かけたいんですが？」

「召喚大会の二回戦が始まるぞ？」

「んなっ!？」

俺は、学園長室の時計を見た。…た、確かに時間だ！

「くそっ！ 速攻で勝ってる！」

そう言うと、俺は全速力で大会会場に向かった。

「秀吉」

「おお、ようやく来たか」

俺は、約三分で大会会場に着いた。

し、しかし結構疲れたな。……そういえば、営業妨害のほうはどうなったんだろうか？

「なあ、秀吉？」

「ほら、さっさと行くぞい！」

「え？ ちよつ、待って！」

俺はそのまま、舞台へと連れて行かれた。

「すみません、ようやく相方が来たのじゃ」

ん？ 相方？

「分かりました。では、試験召喚大会二回戦、始めて下さい」

「「試験召喚！」」

相手の女と男が、召喚獣を召喚してきた。

「Bクラス

佐々木早美

&

Bクラス

宮村良助

英語W

186点

179点

」

おお、結構な点数だな！ でも、俺も負けてないぜ！

「試獣召喚！」

『Fクラス	早山蒼太	&	Fクラス	木下秀吉
英語W	209点		62点	

』

「よし、行くぞい！」

「お前、少しは勉強しろよ」

「な、いきなりなんじゃ！？」

「点数、差があり過ぎ……ん？」

「どうしたのじゃ？」

確か、変身すれば点数は合計されるんだっただよな？

……なら！

「秀吉、悪魔と相乗りする気はあるか！？」

「い、いきなりなんじゃ！？ 今は関係ないじゃろ！」

「大有りだ！」

「へっ？」

「で、どうなんだ！？」

「……悪魔というのは、蒼太の事かのか？」

「ああ、そうだ」

「わしは、蒼太とならどこでも付いて行くぞい！」

「よく言った！ お前が俺の相棒だ！」

「へっ？」

「行くぜ！」

そう言つと、俺は自分の召喚獣にベルトを装着させた。
すると、秀吉の召喚獣にもベルトが装着された。
……たしか、秀吉も仮面 イダーWは見ていた気がする。

「こ、これって……」

「よっしやー!」

「い、一体何が起こるんだ?」

「さ、さあ……」

そして、俺の召喚獣は黒いのが特徴のJOKERメモリを持った。
それにつられて、秀吉の召喚獣は緑が特徴のCYCLONメモリ
を取り出した。

《CYCLON》

《JOKER》

「「変身!」」

そう言つて、秀吉はベルトの右側にCYCLONメモリを差し込
んだ。

すると、メモリは俺のベルトに移動し、秀吉の召喚獣が消えた。

そして俺の召喚獣は、そのメモリをちゃんと差し込んで、からJ
OKERのメモリを差し込んで、手をクロスするようにベルトを開
いた。

《CYCLONE》

《JOKER》

そして、電子音と共に、俺達の召喚獣は二人で一人の仮面ライダ
ーWへと変身した。……まあ、召喚獣が変身したから背丈は小さい

んだけどね。

「「さあ、お前の罪を数えろ（るんじゃ）」「

第二十三話（後書き）

……なんか、えらいことになったような気がしてきました……。

感想、待ってます。

第二十四話

「さあて、行くぜ！」

「そ、蒼太！ これは一体なんじゃ！？」

俺がしゃべると、召喚獣の左側（黒色）の方の目が点滅し、秀吉がしゃべると、右側（緑色）の方の目が点滅した。

おお！ 本格的だな！！

「行くぜ！」

「わしの質問は無視か！？」

「せ、先生！ こんなのですか！？」

「え、ええっと、これは流石に……」

「ありさね」

「「「！？」「」」

先生が何かを言おうとすると、後ろから妖怪クソバアの声が聞こえてきた。

「が、学園長！？」

「こいつの変身能力は、私が与えたものさ」

「が、学園長が！？」

妖怪クソバアが、俺にこの能力を与えたのが不服なのか、相手の生徒が講義を始めた。

「で、でも、こんなの反則です」

「反則？ 何でさ？」

「こんな能力、強すぎます！」

『Fクラス 仮面ライダーW（早山蒼太&木下秀吉）
英語W 271点 （209点+62点）』

「でも、2対1だろ？」

「うぐっ……確かに、そうですね」

「だろ？ アンタ達はBクラスなんだから、それぐらいのハンデはあげたらどうさね？」

「……分かりました」

おお、相手もしぶしぶ了解したようだ。これで、いちいちいちゃもんを付けられなくて済んだな。

「蒼太、これって仮面ライダーWじゃよな？」

「ああ、そうだけど？」

「じゃあ、メモリチェンジも出来るのかのお？」

「ああ、出来るぜ？」

その後、俺は秀吉にWへ変身した時の効果などを教えた。

「なるほどのお。それは便利じゃな」

「ああ、そうだろ？」

「……そろそろ、勝負を始めてもらっても良いですか？」

先生が、少しあきれたような口調でそう言った。

まあ、そりゃそうだよな。もう10分も経ってるのに、まだ勝負して無いんだからな。

「さてっと……それじゃあ、行くぜ！」

「うむー！」

「勝たせてもらっわよ!」
「絶対優勝だ!」

そう言つと、俺達の召喚獣は戦いを始めた。

「秀吉! 先に、佐々木つて言っやつを倒すぞ!」

「うむ!」

「わ、私!?!」

「大丈夫、僕が守るよ!」

「(と言つといて、狙うのは宮村つてやつだ! 秀吉!)」

「(うん、分かったわ)」

俺達は、意思を共通してるから、声に出さなくてもやりたい事が
言えるから、便利だよな!

……つて、今秀吉の口調が女口調だったよな?

「まずは、こいつだ!」

《TRIGGER》

そう、電子音を鳴らすと、俺はWドライバーを閉じて、JOKER
メモリからTRIGGERメモリに入れ替えて、また開いた。

《CYCLONE》

《TRIGGER》

蒼音が鳴ると、召喚獣の左側が青色になり、右手には青色の銃、
トリガーマグナムが握られていた。

「食らえ!」

そう言うと、俺はトリガーマグナムから弾を連射した。……もちろん、狙いは宮村だ！

「なっ！ ぼ、僕！？」

「しまっ……」

「ぐはっ！」

『Bクラス

宮村良助

英語W

63点

』

「ぐっ」

「だ、大丈夫？」

「う、うん」

そう言いながら、佐々木の召喚獣は宮村の召喚獣に近寄った。

「まだまだ！ 秀吉！」

「分かっておるぞい！」

《LUNA》

そう言うと、秀吉はLUNAメモリを押して、電子音を鳴らした。そして、俺がやった様にドライバーを閉じてCYCLONEMEMOリからLUNAMEMOリへと差し替えると、またドライバーを開いた。

《LUNA》

《TRIGGER》

また電子音が鳴り、召喚獣の右側は金色に変化した。

「一気に決めるぜ！」
「そうじゃな！」

そう言うつと、おれはTRIGGERメモリを取り出して、トリガーマグナムに差し込んだ。

《TRIGGER》
《MAXIMUM DRIVE》

そう電子音が鳴ると、その後も何だか変な音が流れ始めた。

「トリガーフルバースト！」

そういつて、引き金を押すと、トリガーマグナムから無数の弾が発射され、宮村たちに直撃した。

『Bクラス 佐々木早美 & 宮村良助
英語W 0点 0点
『Fクラス 仮面ライダーW（早山蒼太&木下秀吉）
英語W 2点 （1点 +1点）

「勝者、早山&木下ペア！」
「よっしゃー！」
「やったぞい！」

俺達は、2回戦を突破して、3回戦へと駒を進めた。
……Wって、本当に強いね。

「戦死者は、補習だ！」

「はい……」
「分かってます……」

そして点数が0になつた、二人は補習室へと向かつていった。
……何かごめんな、二人とも。

「しかし、蒼太」
「ん？」

「よく、こんな力を手に入れたもんじゃな」

「ああ、そうだな。あのクソババアにも一応感謝しとくか……表面
上だけだけどな」

「お主つてやつは……」

何故か隣で秀吉が呆れているが、そこはスルーしておこう。

「て、帰るとするか」

「そうじゃのお」

「待ちな」

俺達が帰ろうとすると、なぜか俺はクソババアに引き止められた。

「何ですか、クソバ……学園長？」

「アンタは、素直に学園長って言えないのかい！？ ……まあいい

さな。アンタ、ちよつと顔貸しな」

「嫌です。それじゃあ」

「さっさと来な！」

クソババアはそう言って、俺の首を掴んで俺を学園長室まで連行
した。

クソツッ！ さっさと離しやがれ！

「さてっと、単刀直入に聞くが、変身システムはどうだったさね？」

「どつって言われても……楽しかったですけど」

「不具合とか無かったかい？」

「ああ、それは無かった」

「それならいいさね。もう帰って良いよ」

「あっそ。じゃあ、帰らせてもらっわ」

そう言つて、俺は学園長室から出た。すると、何故か教頭が聞き耳を立てていた。

「……何してんすか？」

「っ！？ いや、別に何もしていないが？」

「あ、そいですか。それじゃあ、俺は帰るんで」

俺は、あまり教頭の顔を見たくないの、さっさと教室に帰った。

クソッ！ 胸糞悪いぜ！ まさかあんなやつ顔を見るなんて……

…クソッ！

「さっさと帰るか」

俺は早足で教室へ向かった。

そういえば、俺って今日仕事してないなあ……まあ、いいか。

俺が教室に戻ろうとすると、そこに何故か明久と雄二が走ってどこかに行く様子が見えた。

そんなに急いでどこに行くんだらうか？

そう考えていると、姫路が俺の前を通ったので、俺は姫路に呼びかけた。

「姫路」

「？ ああ、早山君ですか。何ですか？」

「今、明久たちが走ってどこかに行ったんだが、どこに向かったか知ってるか？」

「ええ、知ってますよ」

「じゃあ、教えてくれ」

「良いですけど、どうせなら一緒に行きませんか？」

「ああ、別に良いぞ」

そして、俺は後から追いついてきた、島田と島田の妹と一緒に明久たちが向かった場所へ歩き始めた。

第二十五話

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！ 早く中に入るよ！」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

俺達が明久達に追いつくと、雄二と明久は口論をしていた。

まあ、大体予想は付くけどな。だって、目的地が…… Aクラスのメイド喫茶だからな。

そりゃ、雄二にとってはここは桃源郷じゃなくて、地獄だろうな……。

「そういえば、Aクラスつて、お前の、大好き、な霧島さんがいるもんな（笑）」

「そういえば、そうだったわね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「べ、別に逃げ回ってるわけじゃない！ ってか、蒼太！ 誰が俺の大好きなだつて！？ 別に俺は翔子なんて……」

「……お帰りなさいませ、ご主人様」

「し、翔子！？」

「……それではお席へご案内させていただきます」

「おい！ 俺達はまだ教室へ入っていないぞ！？ それに俺達はこ

こに入るなんて一言も……」

「それじゃあ、お願いします！」

「ああ、願いますぜ」

「そうね、面白そうだし」

「お姉ちゃん、綺麗ですう」

「本当、綺麗です」

「お前らあああああ！」

「お前も、腹を決めるよ？」

その後、雄二は霧島さんにアイアンクローを決められながら、メイド喫茶に入って行った。

さてつと、俺達も入ろうかな……。

「……………！（パシャパシャパシャパシャ！）」

……おい。何してんだ、ムツツリーニ？

「……………ムツツリーニ？」

「……………人違い」

「いやいや、どう見てもムツツリーニだろ！ 厨房責任者が何してんだよっ！？」

「……………敵情視察」

ローアングルの写真撮影をしているやつが、言う台詞じゃないと思うんだが。

そもそも、お前がこの桃源郷の前にして、敵情視察で済むはずがない！

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られてる女の子が可哀想だと……。」

「……………一枚100円」

「2ダース買おう……可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

……明久、今のは流石にどうかと思うぞ？

「……………そろそろ当番だから戻る」
「全く、ムツツリー二にも困ったもんだね」

ムツツリー二は明久に写真を渡し、教室の方へ歩いていった。
それを見つつ、明久は呆れたようにそう言った後に、写真をポケ
ットにしまった。

お前、この状況でそんな写真を買うとは……………お前って、命が惜し
くないのか？

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより
そろそろお店に入ろうよ？ もう凄くおなかが減っちゃったし早く
敵情視察も済ませないと……写ってるの、男の足ばかりじゃない
か畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですか！」

「ご、ごめんなひゃい！ くひをひっぱらないで！」

明久は姫路に頬を抓らた後、なぜか葉月に腿をつねられていた。
うわあ、痛そうだな。……………まあ、優子や秀吉の関節技に比べれば、
全然だけどな！

「蒼太、何を誇ってるの？」

「えっ！？ い、いや、何でもない」

「そう？ じゃあそろそろ入ろうよ」

「ああ、そうだな」

「それじゃ入るわよ。お邪魔します」

こうして、俺達（雄二を除く）はメイド喫茶へと足を踏み入れた。
……………そういえば、優子に俺と秀吉の変身の事、知られてないよな？
そんなこんなで、俺達はメイド喫茶に入ると、雄二が座っていた

(座らされていた)席に移動した。

その後、霧島さんが注文を取りに来て、俺達は注文を言った。

まあ、雄二は……なぜか『メイドとの婚姻届』を注文したことになるのだが、それはあえて放っておこう。

「……明久、俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……」

「あ、うん、それはそうだけど……召喚大会といえば、蒼太？」

「ん？ 何だ？」

「どうやって変身なんていう能力を手に入れたの？」

「 * & % # \$ (どうしてそれを) ! ? 」

「ちよっ、落ち着いて！」

「あ、ああ」

「で、どうやって手に入れた……」

「何でそれを知ってるんだ!？」

「なんでって、もう学園中で噂になってるよ？」

「が、学園中に!？」

「うん。『早山蒼太が木下秀吉と一緒に変身した!』っていう噂」

「……んな!？」

「もしかして、知らなかったの？」

「あ、ああ。知らなかった。……それ、学園中で知らないやつはいないよな？」

「多分ね」

「って事は、もちろん優子も……」

「お待たせいたしました」

「知って……優子!？」

「ご主人様、ちよっとこちらへお越ししてもらってもよろしいですか？」

と、優子が注文した料理をテーブルに置くと、俺に話しかけた。

……凄くいい笑顔だな、優子。

「あえて、断る！」

「問答無用です」

「た、助けてくれええええええええええつ！」

俺は、優子に手を握られ、凄い力で厨房まで連れ去られた。

「で、アンタと秀吉が一緒に変身したって、どういうこと？」

「ええつと…優子つて、仮面ライダーWつて知ってるか？」

「？ それつて、秀吉が見てた特撮の事？」

「そうそう。俺達はそれに変身したんだよ」

「……たしか、あのドラマのキャッチコピーつて『二人で一人の仮面ライダー』だったわよね？」

「確か、そうだったと思うけど？」

「……それつて、私とアンタでも変身できるの？」

「さあ？ クソババアに聞いてみないと分からないな」

「そう。じゃあ、後で聞いてきてね？」

「はっ！？ 何で俺が！？」

「蒼太？」

優子があり得ないほどの殺気を出して、笑顔で俺の名前を呼んだ。

「今すぐにも、聞きに行つてまいります！」

「よろしい」

俺は、今すぐにも逃げ出したかったので、優子のお願いを聴くことにした。

つて事で、俺は又もや妖怪クソババアの所に行くハメになってしまった。

「今のところは、無理さね」
「そっすか、分かりました。それじゃあ」

俺は、クソババアが廊下を歩いている所を見つけたので、優子の質問を聞いてみた。

まあ、答えは無理って事だったけどな。

そして、俺は質問を終えると、ちょうど時間的には、召喚大会に行く時間だったので、優子にメールをしてから会場に向かった。

「で、何で相手がいないんだ!？」

「危険かのお？」

「……時間になっても現れないので、相手の方は棄権とみなします」
「って事は？」

「そういうことじゃのお」

「よって、勝者、早山&木下ペア」

相手が時間になってもこないの、棄権扱いとなり、俺達の勝利が確定してしまった。

まさか、4回戦にまで進むとは思ってもなかったなあ。

まあ、次で負けるか。そこまでやる気もないしな。

「蒼太、このまま優勝を狙うぞい!」

「……ああ」

と思っていたが、ここまで真剣に優勝を狙っている秀吉に悪い気がするな。

……まあ、たまにはめんどくさいのもいいかな。

第二十六話（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ　？統率力　？行動力　？その他（）」

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『「？かわいらしさ」　候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『「？可愛らしさ」　候補……姫路瑞希……木下秀吉……島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるどころです。

坂本雄二の答え

『「その他（結婚相手）」　候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

第二十六話

「にしても、客があんまりこねえな」

「そうじゃのお。一度失ったお客を取り戻すのは、大変じゃな」

俺と秀吉は、大会が終つて喫茶店に戻ってきたのだが……客が少なすぎる！

大体予想が付いていたけど、多分営業妨害のせいだろうな。

ちなみに、今、ここにいるのは、俺、秀吉、明久、雄二と後は須川とかだ。

「それでもないぞ」

「えっ？ 何か策でもあるの、雄二？」

「ああ」

流石は雄二。こつこついう事を考えさせたら、ほんと右を出るものはいないな。

「ああ。中華でコレは安直だが、効果は絶大な筈だ」

そう言うと、雄二は刺繍の水色と白のチャイナドレスを取り出した。確かにこれは効果絶大だろう！

「なるほどのお。若干丈が短いような気がするが、これなら効果は絶大じゃろう。これを宣伝に……」

たしかに、これは秀吉や瑞樹、島田辺りが着ると、効果は絶大だろうな。

「ああ、これを……明久と蒼太が着る」

ぶっ殺そうかと思った。

「ちよ……。お願い、許して！メイド服の次にチャイナドレスまで着ると、きつと僕は本物だと認識されちゃう！」

「雄二……。お前に明日は無いと思え」

「冗談だ。……って、冗談といったのに、なぜそんなに殺気を出しながら指の骨を鳴らすんだ、蒼太！？」

「お前に明日は無い……」

「蒼太！」

「はっ！？ お、俺は一体？」

「全く、もう大丈夫じゃ雄二」

「ああ。助かった」

俺は一体何をしようとしてたんだっけ？ ……確か、雄二が……。

「お前に明日は……」

「もう良いわ！」

「はあ……。全く、話が前に進まん」

「……悪いかつた」

「っで、これを秀吉と姫路と島田に着てもらおう」

「あ、なんだ。良かった」

「ワシが着るのは冗談では無いのかのお……」

そういって、秀吉はチャイナドレスを持ってため息をついた。

でも、確かに秀吉が着ると絶対に似合うだろうな。……秀吉が似合うなら、優子も似合うんだろうな。

そう思っていると、姫路と島田と島田妹が帰ってきたらしい。

「たつだいまゝ。って、なんだ、アキつてばメイド服、もう脱いじやったんだ」

「あ……残念です。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな」

「残念だけど、人のコスプレをタダで見れるほど、世の中は甘くは無いんだよ？」

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げのために、協力してもらおうぞ」

そう言つと、雄二はチャイナドレスを片手に二人の退路を断つた。俺と秀吉は、ため息をつきながら、その様子を見ていた。

「やれ、明久！」

「オーケー！ へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あつ！ マジすんませんでした！ 自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前（明久）」

はっ！ 見ているだけのつもりが、つい発言してしまった。

まあ、明久が弱いことは今に始まつたわけじゃないんだけどな。

「だいたい、何でウチ達がこれを着なくちゃ何ないの？」

「店の宣伝のためと……」

そう言っている島田のの顔は、いかにも着たくないって言うてるような顔だった。

でも、これを着てくれたら店の売り上げは上がるし、みんなのチャイナ服姿を見れるし……一石二兆だな！

「……明久と蒼太の趣味だ」

って、俺と明久かよっ！ でも、確かに好きだからなあ。
しかし、流石にこの事はあんまり知られたくないし……上手く誤
魔化すか。

「「大好……愛してる」」

「……明久はそう言うと言いが付いていたが、まさか蒼太まで引つ
かかるとはな」

し、しまった！ 台詞を間違えた！！

こ、これじゃあ、明日からどう過ごして行けばいいんだ！？

「し、仕方ないわね！ 店の売り上げのために仕方なく着てあげる
わ」

「そ、そうですね！ お店のためですしね！」

「そ、そうじゃ！ 店のためじゃから、仕方なく着るのじゃ！」

そう言っつて、島田と姫路はそれぞれの服を手にとって、秀吉とそ
んな話をしていた。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にも頂戴
！」

島田妹が明久と会話していた……。

おいおい、島田妹よ。流石にこの年でそれは少しやり過ぎじゃな
いか？

そう思った俺は、島田妹に声をかけた。

「おいおい、島田妹。お前はそのままでも可愛いんだから、チャ

イナ服なんて着なくてもいい……」

「……………！！（チクチク）」

「ってコラッ、ムツツリーニ！ 何でそんなに凄い勢いで裁縫を始めてんだ！？ ってか、さっきまでいなかったよなっ！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

「可愛いですかあ……………」

「（キッ！）」

「（ブルッ！）な、何だ、今の殺気は！？」

「蒼太？ ちよつといいかのお？」

「ひ、秀吉ッ！？ その間接はそっちには曲がらな痛いイイイイイイイイッ！」

その後、俺は意識を手放した。

「ううん……………ここは？」

俺は意識を取り戻すと、白いベッドに眠っていた。

……………多分、保健室だな。……………いや絶対保健室だ。

「とりあえず、外にで出るか」

俺はベッドから起き上がると、保健室から廊下へと出た。そして、そのまま喫茶店に戻ろうと教室に足を向けた。

「ねえ、聞いた？」

「何を？」

「二・Fの喫茶店の料理がおいしいんだって！」

「そうなの？　じゃあ行って見ようよ」

「そうだね！」

……廊下を歩いていたら、こういう会話が聞こえてきた。

いやあ、こういうのを聞くとなんだかうれしい気持ちになるなあ。

……まあ、俺は何もしてないけどな！

「……流石に何もしてないのはまずいよな……早く行くか」

俺は、早足で喫茶店に向かった。

そして、ある空き部屋の前を通ろうとしたとき、部屋の中から明久の声が聞こえてきた。

あいつ、何やってんだ？　とりあえず中に入るか。

俺はとりあえず、教室の中に入った。

「おい、明久、何やってん……」

「蒼太！　ちようど良かった！」

「……ん？　何だ、こいつら？」

「蒼太と喧嘩したいんだってさ！」

「俺と？　この貧弱そうな三人がか？」

「そうだよ！」

「誰が貧弱だ、コラアツ！！」

俺と明久が話をしていると、貧弱その一が俺に殴りかかってきた。まあ、俺は殴られる前に殴り返して、蹴りを加えた。

「ゲホッ！」

「じ、じゃあ後は頼んだよっ！」

「ああ」

そう言うと、明久は廊下へと出て行った。

と、言うわけで俺はこの貧弱どもの相手をする羽目になったんだが……とりあえず、これを言っとくか。

「さあ、お前の罪を数えろっ！」

「はあ！？ お前、頭やばいんじゃないの？」

「ははは、マジ笑えるんだけど！」

「ゲホッ、ゲホッ……助けて」

……とりあえず、こいつらに死よりも恐ろしい苦痛を与えてやるか。

「お前は家に帰って、アニメや特撮でも見ときな！」

そう言いながら、貧弱その二が俺に又もや殴りかかってきた。

さて、それじゃあ、始めるぜ？ 俺主催の……苦痛パーティーだ。

〈5分後〉

「」「この度は、まことに申し訳ありませんでした」「」

そう言いながら、貧弱どもは俺にひれ伏せていた。

……もちろん、この五分で貧弱どもに五回以上「もう、死なせてください！」って言わせただけだな。

「そう思っているなら、二度と俺達の前に現れるな」

「「「分かりました。すいませんでした」」」

「なら、行け」

「「「はい。本当にすいませんでした」」」

貧弱どもはそう言って、教室から出て行った。

ふう、これにて一件落着だな。久々に暴れたから、無駄に疲れたぜ。

俺は貧弱どもの後に廊下に出た。すると、そこには明久と雄二がいた。

「よお、何してんだ？」

「「蒼太（お前）がなにをしたの（んだ）！？」」

「何をしたか、聞きたいのか？」

俺は少し殺気を出した笑顔で問いかけた。

「「「やっぱり、いいです」」」

「それでいい。それじゃあ、喫茶店に行こうぜ」

そう言って、俺達は喫茶店に向かった。

第二十七話

「……繁盛しすぎじゃねっ!?!」

俺は喫茶店に入っつて、凄く驚いた。

だって、さっきは全く客がいなかったのに、今は席が満席じゃねえか!

「ち、チャイナ効果スゲーな」

「うん、そうだね」

「まあ、安直の案だったけど、やっぱり効果は絶大だったな」

「って事はもしかして、厨房って凄く大変なんじゃないのか?」

「うん、死に物狂いだよ……」

「それに、俺達は厨房とウェイターを兼用してるからな……今日で寿命が三年は縮まったな」

そ、そんなに大変なのか? ……ま、まあ、俺は厨房だけだろうから、そこまでしんどくはないと思うけど……。

「ちなみに、お前は厨房とウェイターの兼用だからな」

「さらばだ!」

「逃がすか! 明久、取り押さえろ!」

「OK! この、逃げ……」

「ぶっ飛ばすぞ」

「……ないでください、お願いします!」

明久が、俺の言葉を聞いたら、取り押さえようとするのをやめて、全力で土下座を始めた。

さ、流石にこれを見たら逃げられないよなあ。

「はあ、分かったよ」

「よし、よくやった明久」

「こ、殺されるかと思った」

「……本当に、よくがんばった」

その後、俺は厨房で2時間みっちり働いた。

正直、今日で死ねるかと思った。

↳ 2時間後↳

「そろそろ、召喚大会じゃな」

「おっ！ やつとか！」

正直、この2時間中は、早く召喚大会に行きたいと思ってた。だって、厨房とウェイターの兼用って……マジ死ねるぜ？

「じゃあ、行くか」

「うむ。絶対に優勝じゃ！」

「はいはい」

正直、今回の勝負で負けてさっさと大会を止めたい所だけど……

一生懸命に優勝を狙ってる秀吉も……まあ、アレだからな！

今回の大会は、すこしばかり本気を出すぜ！

ちなみに、今回明久たちの相手は、姫路&島田らしい。

普通に考えると、勝つのは姫路達だろうが……明久と雄二のことだ、多分、何か作戦でもあるんだろうな。

俺はそんなことを考えながら、会場に向かった。

「やあ、君達が相手なんだね」

「よ、よろしく願います」

会場に着くと、俺達を出迎えたのは、前に優子と一緒にいた工藤愛子って人と、見た目的に凄く気弱そうな子がいた。

……何か、守ってあげたうなるような感じの子だなあああああああ
ああっ!?

「痛えよっ! 秀吉ッ!」

「フン、じゃ」

「ギアアアアアッ!」

「……相変わらず、凄い事になってるね」

「だ、大丈夫なんでしょうか?」

「大丈夫だと思うよ……多分だけど」

もちろん、この後五分ぐらい開始時間が遅れたのは言うまでもないよな?

「……………」

「じゃあ、始めるのじゃ」

「早山君、無言だけど大丈夫なの?」

「大丈夫じゃ……多分」
「多分ねえ……ねえ、早山君大丈夫なの？」
「だ、大丈夫……夫……」
「本当に大丈夫なの!？」
「そろそろ、四回戦を始めたのですが、よろしいですか？」
「うむ、全然良いぞい」
「だ、大丈夫……夫……」
「そっちが良いなら、こっちもいいんだけどね……」
「そ、そうですね」
「それでは、四回戦始め!」
「……試獣召喚!」

『Aクラス 工藤愛子 & Aクラス 佐藤昇華
古典 289点 250点』

『Fクラス 早山蒼太 & Fクラス 木下秀吉
古典 330点 109点』

ふむふむ。工藤の召喚獣はセーラー服で斧を持っていて、佐藤つて言うやつは召喚獣はセーラー服で機関銃……どこのヤクザなんだよっ!?

ってか、昔、セーラー服と機関銃っていうドラマあったよなあ! ? これ、絶対それを意識しただろ! 作者っ!

「早山君は本当にFクラスなんですか!？」
「そうなんだよねえ。何でFクラスにいるの?」
「そ、それはだなあ……ま、まあ色々あるんだよ!」
「色々ねえ。まっ、いつか。じゃあ行くよ!」

「いいんですか!？」

「行くぞい!」

「ああ! 変身だ!」

「そ、そうじゃった。確か、これじゃな」

そう言いながら、秀吉はドライバーを召喚獣に装着させて、緑色のガイアメモリを取り出して、ボタン押した。

《CYCLONE》

「ああ、それだ!」

そして、俺も自分の召喚獣にドライバーを装着させて、黒色のガイアメモリを取り出して、ボタンを押した。

《JOKER》

「「変身!」」

そう言うと、秀吉はメモリをベルトに差し込んだ。
すると、秀吉の召喚獣は消えて、俺のベルトにCYCLONEM
メモリが出現した。

「な、何が始まるんでしょうか?」

「多分、噂になってる変身じゃないかな」

「ああ、なるほど」

そして、俺の召喚獣は自分のメモリをドライバーの左側に差し込んだ。

そして、手をクロスするようにして、ドライバーを開かせた。

《CYCLONE》
《JOKER》

そう、電子音が鳴ると、俺の召喚獣を中心に竜巻が起きた。

「か、風？」

「す、凄い強風だね」

そして、竜巻が収まるとそこには変身が完了した俺の召喚獣がいた。

「「さあ、お前の罪を数えろ（るんじゃ）」「！」「」

「これが、噂のWねえ」

「ち、小さくてなんか可愛いんです」

『Fクラス 仮面ライダーW（早山蒼太&木下秀吉）

古典 439点

（330点+109点）

』

「つて、点数高くないですか!？」

「二対一だから大丈夫でしょ」

「それはどうじゃろな!」

「ああ、あんまりなめないでくれるか?」

俺達はそう言いながら、W（召喚獣）を相手の召喚獣に向かって突っ込ませた。

狙いは……工藤だ!

さらに、俺は移動させている間に、メモリをJOKERから、METALに変えた。

《CYCLONE》
《METAL》

すると、右側は銀色になり、背中にはメタル専用のメタルシャフトが装着されていた。

俺は、メタルシャフトをWに持たせた。

「はあっ!」

「くっ!」

Wが工藤の召喚獣に対してメタルシャフトを振りかぶると、工藤の召喚獣は斧でそれを防いだ。

メタルシャフトを防ぐと、工藤の召喚獣は後ろに飛んで俺の射程距離から離れた。

しかし、点数的には俺達が勝っているので、相手には少しダメージを与えられた。

『Fクラス 仮面ライダーW VS Aクラス 工藤愛子
古典 429点 250点

』

「だ、大丈夫ですか!？」

「うん。まあなんとかね」

「ど、どうやって攻めましょうか？」

「そうだねえ………やっぱり、二人で一気に攻めようか」

「は、はい。分かりました」

そう言うと、二人ともWに向かって走り出した。

……ちなみに、佐藤の召喚獣は機関銃を連射しながら。

「うわっ！ ちょっと、やばっ！」

「メモリチェンジじゃ！」

「いや！ まだだ！」

「え？」

「余裕だ、ねっ！」

俺達が会話をしながら、機関銃を避けていると、工藤の召喚獣が飛び掛ってきた。

「今だ！」

「えっ！？」

俺はその瞬間に、メタルシャフトを下に思いっきり付いて、その勢いでジャンプさせた。

そして、元々Wがいた場所には……工藤の召喚獣がいる。そして、その場所には機関銃の弾が飛んでくる！

「しまっ……」

「う、撃つのを止めないと！」

「いまさら止めても遅い！」

「きあああっ！」

『Fクラス 仮面ライダーW VS Aクラス 工藤愛子

古典 429点 130点

』

「そのまま食らえ！」

「嘘でしょ！？」

「はあああああっ！」

俺はそのまま工藤の召喚獣を踏みつけさせた。
踏みつけると、工藤の召喚獣は消滅した。

『Fクラス 仮面ライダー VS Aクラス 工藤愛子
古典 429点 DEAD』

「くう。悔しいい！」

「ま、まだ私があります！」

「これで決まりだ！」

「へっ？」

佐藤が工藤の召喚獣に気を取られている間に、俺はWを佐藤の召喚獣の近くまで移動させた。

「これで決めるぞ、秀吉！」

「うむ。了解じゃ！」

俺達はメタルシャフトにMETALメモリを差込んだ。
すると、電子音が鳴り、メタルシャフトは風を纏った。

《METAL》

《MAXIMUM DRIVE》

「メタルツイスター！」

Wは、メタルシャフトの先端から緑色の旋風を発生させ、Wを中心として緑色の竜巻を発生させるように回転しながら、佐藤の召喚獣をメタルシャフトで連打した。

『Fクラス 仮面ライダー VS Aクラス 佐藤

昇華

古典 2点

DEAD

』

「勝者、早山&木下ペア！」

「よっしゃ！」

「やったのじゃ！」

俺達は準決勝に進出した。

第二十八話

「やったぜ、秀吉!」

「うむ! やったのじゃ!」

俺が秀吉にそう言うと、秀吉は笑顔でその場を飛び跳ねていた。

……可愛いなあ……。はっ!? 殺気!?

「蒼太、どうしたのじゃ?」

「な、なんでもないぜ!」

「? ならいいのじゃが」

言えない。優子が俺を殺すような目つきで見ているなんて、絶対言えない。

えっ? なぜ言えないかって? それはだなあ……。

秀吉に言う 秀吉は、優子に見せ付けるために、俺に抱き付く優子に殺される!

ってなわけだ。……命は大切にな。

「ううん、ちょっと悔しいなあ」

「はい、私もちょっと悔しいです」

「早山君、今度は負けないよ!」

「私も負けません!」

そう言いながら、なぜか佐藤は俺に近づいてきた。

? なぜ近づいて来るんだ?

「でも、戦っているときの顔は凄くかっこ良かったです」

「っ!」

そう言つと、佐藤は俺の頬にキスをした。

「ふぁ、ファーストキスですからねっ！」

「は、はいいいい!？」

そう言つと、佐藤はタツタツタツってな感じで、工藤の方に帰ると、そのまま二人は帰っていった。

さて、状況を整理しようか。

今俺は、優子と秀吉がいる前で、頬にキスをされて、その上「ファーストキス」と言われてしまった。

……ふむ。ここは、これしかないだろう。

「「蒼太?」」

「俺は知らねえ! じゃあ!」

「あっ!?! 逃げるなっ!」

「待つのじゃ、蒼太!」

なぜか優子も、秀吉と一緒にいたが、そんなものは関係ない!俺は全力ダッシュでその場を離れた。

「「すみませんでした」」

「「許すと思っているの?」」

「マジですんませんでした！」
「許さないわよっ！」

俺はあの後、なぜか鉄人にまで追いかけて、すぐに鉄人に捕まり補習室に行かされた。（理由は後から聞いたが、俺が廊下を走っていたかららしい）

ここまでなら、まだ良かった、良かったんだ。重要なので、二回言っただけだから！

まあ、鉄人に事情を説明して、鉄人からは解放された。

しかし、しかしだ！ 開放された俺は、補習室を出ると、目の前にはメイド姿の優子とチャイナ姿の秀吉が、仁王立ちをしながら「いらっしやいませ」と、万遍の笑みで言った。

そして、今はまたまた補習室で説教を正座で受けているってなわけだ。

……誰か助けて！！

「聞いてるの！？」「」

「は、はい！ちゃんと聞いています！」

そして、なぜか秀吉が女口調になってます。

「じゃあ、今私達が言ったことを繰り返して言うてみて？」

「すみません、聞いてませんでした」

「朽ち果てる！」

「痛っ！？ ちょ、お前ら！ 頭を思いっきり叩くな！」

「うっさい！」

「ゲホッ！？ 今度は腹を蹴るな！」

「じゃあ、どうしろって言うのよ！？」「」

「俺を叩くな！」

「無理よ！」「」

「即答っ!?!」

とまあ、俺は説教と言うより、体罰を受けていた。
……こいつ等って、俺のことが好きなんだよな?

「木下兄弟と、早山。そこら辺で止めとけ。こいつらが勉強が出来ていない」

鉄人がそう言うと、俺は周りのやつらを見た。

……簡単に言うと、俺達を凄い形相で睨んでいた。

正確に言うと、俺だけなんだけどな。

「蒼太、行くわよ!」

「どこに!?!」

「蒼太しだいよ!」

「それって、どういう意味!?!」

「ほら、行くわよ!」

「た、助けてくれええええええええっ!」

俺は秀吉と優子に引きずられながら、補習室を去った。

「で、なんで保健室!?!」

「ここなら、ほかの人に迷惑がかららないでしょ！」
「いや、休んでる人とかに迷惑だろっ！」
「いないからいいのよっ！」
「よくねーよっ!!」

確かに、今は休んでる人はいないが、いつかは来るだろ！
考えたら、分かることだと思っけど……。

「ねえ、蒼太？」
「なに？」
「アンタ、あの佐藤さんに何かしたの？」
「いや、何にも……」
「何かしてなきゃ、キスなんてされないでしょ！」
「……してつて、俺に答える権利はないのっ!？」
「アンタにそんなものは無いっ!」
「んな、アホなっ!？ 少しは言い訳を言わせろ！」
「言い訳って事は、何かしたのね!？」
「はあっ!？ 今のは、言葉の綾ってやつだよっ!」
「私達をおいて、浮気をするなんて最低ね!」
「だから、してないって!」
「嘘付かないで!」
「付いてねーよっ! お前ら、疑いすぎだろ!」
「本当に!？」
「本当に!」
「じゃあ、なんでキスされたの!？」
「知らねーよっ!」
「本当に？」
「本当に!」
「本当に!？」
「本当に!」
「本当の本当にだ! 俺の目を見てくれば分かるだろっ!」

「「……………(ジーー)」「
「……………そんなに凝視しなくても」

俺がそう言うと、二人は安堵の息をついた。
ふう、これで俺の疑いは晴れたかな？

「「やっぱり信じられない」「」
「晴れないのかよっ!?!」
「あたりまえでしょ!?!」
「なんでキスをされたの!?!」

……区別が付かないのは俺だけじゃないよな？
みんなも、どっちが言っているのか分からないよな!?!
ちなみに、今は優子 秀吉の順番だ。

「「聞いている!?!」」
「きき、聞いているぞ!?! お、俺にも分かんねーんだよ!」
「「どうせ、何かしたんでしょ!?!」」
「なにもしてねえよっ!」
「「本当に!?!」」
「本当に……アレ? これって、永遠ループ入った?」
「「本当の本当に!?!」」
「ループ来ちゃったよっ!?! 作者アアアアアアアアア!?!」
「「うるさい!」」
「ゲホッ! み、溝打ちにダブル蹴りはマジ、死ねる……ガクッ」
「ええ!?! ちょ、ちよつと、蒼太!?!」
「し、死んじゃあ駄目だ……」

ここで、俺の意識は途切れた。

「あれ？　ここは、どこだ？」

「蒼太？」

「え、おじいちゃん？」

「やっぱり、蒼太かのお。大きくなったのお」

「まあね。おじいちゃんが死んでから、もう十年は経ってるからね」

「おお、そうじゃったのお。ここで会ったのも縁じゃし、少し話でもするかのお？」

「ああ、全然いいぜ」

この後、俺は死んだはずのおじいちゃんと再会を果たして、おじいちゃんが死んでからのことを、色々と話した。

「ふむ。中々ハードは生活なんじゃな」

「でも、退屈はしないから、全然良いよ」

「ふおおおお、そうじゃのお。……蒼太」

「何？」

「人生で、一度は他の人らが出来ないことをするんじゃぞ？」

「ああ、そうだね」

今の俺の状況は、なんか明久の状況と少しに似てるからな。

……よし！　他のやつらが絶対に出来ないことでも探すかな！

俺がそう思っていると、おじいちゃんが薄れ始めた。

「おお、もう時間かのお」

「時間って？」

「蒼太は、これから元の世界に戻るんじゃ」

「……ああ、なるほどー！」

「じゃあの」

「うん、じゃあー！」

こうして、俺の意識は元の世界に戻っていった。

……あれ？ これって、臨死体験じゃね？

第二十九話

「はっ!？」

「蒼太!」

「な、何だ!？」

俺が目を覚ますと、そこは保健室のベッドでなぜか秀吉と優子に抱きつかれた。

しかも、二人は泣いていた。

「何で二人は泣いて……」

「し、心配したんだよ!？」

「死んじゃったかと思っただから!」

「……ん? ご、ごめ……って、お前らのせいだろっ!？」

「ギクツ!」

「分かりやすいな、お前等!」

「で、でも、生きてて本当に良かった!」

「うん!」

「二人とも……ありが……」

「だって、これでちゃんと理由を聞けるんだもん!」

「まだ諦めていらっしやらなかった!？」

「さあ、ちゃんと吐きなさい!」

……何だか、マジでめんどくさくなって来たんですけど、みんなならどうする?

俺は……無視する!!

「はあ」

「「やっと言う気になった?」」

「もう、帰るわ」

「へっ?」

「じゃあな」

「ちょ、ちょっと!」

「何で帰ろうとしてるのよ!」

「お前達の相手をするのが、めんどくさくなったから」

「っ!?!」

「じゃあな」

そう言いながら、俺は保健室を出た。

普通に出たら、また直ぐに追いかけてくるだろうと思って、俺は保健室のドアを思いっきり強く閉めた。

さてっと、木陰で一眠りで行くかな。

俺は、とりあえず外に向かった。

「さてっと、流石に帰るのはみんなに迷惑だし、どうすっかなあ……」

二人にああ言った手前、普通に店に戻るわけにはいかないし……。どうしよう?」

ってか、もう直ぐ準決勝だしなあ……。流石に言い過ぎたか?

……いや、俺は悪くないはずだ! ……多分。

「こんな所にいたのね。早山、早くお店を手伝いなさい！」
「し、島田！？ 何でここに俺がいるって分かったんだ！？」
「ん？ いやあね、外を見たらアンタがいたのよ」
「ああ、さいですか……」
「ほら、行くわよっ！」
「わ、分かったから、関節技だけは止めてくれ！」
「はあ？ 何言ってるの？」
「えっ？ いや、だって……」

……あんまり聞かないでおこう。
……自分の命は大切にしないとね。

「ほら、行くわよ！ お店、忙しいんだから！」
「ああ、だからチャイナ服のまま出てきて腕の関節が曲がってはいけない方向にいいいいいいっ！」
「恥ずかしいんだから、思い出させないで……！」
「す、すみませんでしたあああああああ！」

……俺はその後、腕の痛みを耐えながら店の手伝いを始めた。

「ど、どうしようっ？」
「わ、私に聞かれても……」

「どうしよう！ 蒼太を怒らせちゃった！」

あれから、お姉ちゃんと一緒にどうしようか考えてるんだけど、何にも思いつかない！」

これは本当にやばいのじゃ！」

「姉上！ どうするのじゃ!?!」

「私に聞かれても困るわよ! ……って言うか、口調が戻ったわね」「今はそんな事、どうでもいいのじゃ!」

「た、確かにそうね……。で、でも、悪いのは蒼太じゃない!」

「確かにそうじゃが……。しつこく聞きすぎたかのお……」

「……それは、私も思うわ……。こんな事なら、蒼太の事信じてあげたら良かった」

「……そうじゃな」

……何か、保健室の空気が無駄に重くなったのじゃ。

しかしじゃ、姉上には悪いのじゃが、ワシは準決勝があるから、それを口実にして会えばいいのじゃ!

そのときに、誤るのじゃ!

「アンタ、何か企んでない?」

「っ!? な、何にも企んでないのじゃ!」

「ふうん。……まあ、いいけどね」

「……ふう」

「って、もうこんな時間なの!?!」

「えっ!?!」

時間を見ると、もうお昼時で、姉上のお店やワシのお店も一番大変な時間じゃった。

「流石に、この時間帯を代表達に任せておくわけには行かないから、私は戻るわね」

「そうじゃな。ワシも、そろそろ戻るつもりでしょうかのお」

「この件は、また後で考えましようね」

「うむ」

そう言って、ワシと姉上は保健室を出た。

……さて、蒼太に何て言って誤ろうかのお……。

「死ぬる、マジ死ぬる……」

「そ、蒼太？ 大丈夫なの？」

「明久か……後は、頼んだ……ガクツ」

「蒼太？ 蒼太あああああつ！」

「バカやってないで、ちゃんと仕事しなさい！」

「「はあい……」」

俺と明久は、仕事で疲れきっていたのでコントをして遊んでいたら、島田に起こられてしまった。

……いや、本当にここの手伝いってしんどいんだよ？ フルマラソンを連続で二回走ったぐらいしんどいんだよ！？

……実際に、走ったことは無いけど。

「それにしても、蒼太と秀吉たちが喧嘩してるなんて、珍しいね」

「お前つて、痛いところをサリリと告げるよな」

「え？ そんなに褒めなくてもいいよ」

「褒めてねえよっ！」

「あれ？ そうなの？」

「頼むから、それぐらいは分かってくれ……」

今、店の手伝いをしてるのは、いつものメンバーなので、秀吉もいる。

しかし、俺と秀吉は喧嘩？中なので、気まずいったら、ありゃしない。

「早く仲直りしなくていいの？ 準決勝も、もう直ぐでしょ？」

「ああ、そうなんだけどな。何せ、怒ったのが俺だから、何か話しかけづらいんだよなあ……」

「何か、分かる気がするよ。でも、早く仲直りしときなよ？」

「ああ、分かってるよ」

俺達がこう話している間に、時間は刻々と迫っていた。

……後一時間で、召喚大会の準決勝が始まる。

……あと一時間で、仲直りできるかなあ。

第三十話

「さてっと、どうすっかなあ」

あれから、30分が経ち準決勝まで後30分となった。
しかし、俺と秀吉はいまだに会話をしていなかった。

「流石にマズイよな？ もうちょっとで準決勝だって言うのに……」
「蒼太、働け！」

「うっさい、バカ雄二！ 俺は今それどころじゃねえんだよっ！」
「誰が馬鹿だ！ アホな事を言っただけで、さっさと手伝え！ 人手が足りねえねえんだよっ！」

「俺には関係ないっ！」
「お前はFクラスだろうが！」
「実は俺……Eクラスなんだ」
「お前は明久かっ！」

「明久と俺と一緒にするなっ！ 俺は明久の数十倍賢いわっ！」
「二人とも、口喧嘩をしながら僕を罵倒しないで！」
「黙れバカ！」
「単刀直入に言われるとは、思わなかったよ！」

まあ、雄二がそういうのは分かる気がする。
だって……何か知らないけど、客の人数が半端無いぐらい多い！
流石、チャイナ効果。まあ、元々のレベルが高いつて言うのもあると思うけどな。

「さてっと、じゃあそろそろ働くか」

「さっさと働け」

「ああ、そうするよ」

「僕、罵倒されただけ!？」

「まあ、そうだな」

「最悪だよ、チクショウ！」

さてつと、明久いじりもこの辺にしておいて、本気で考えないと
な。

流星に時間も無くなってきたし、どうすっかなあ……。

「蒼太、5番テーブルにこの料理頼む！」

「ああ、任せろ」

「……………ついでに、これを6番テーブルに」

「ああ、分かった！」

しかし、俺は考え事をする間も無いまま、手伝いをやらされた。

「そろそろ、準決勝だね」

「あ……………そ、そうだな……………」

「蒼太、露骨に嫌な顔をしないでよ……………」

「そんな顔してるか？」

「うん、凄く嫌そうな顔」

「……………はあ」

「だから、早めに仲直りしたら良かったのに」

「し、仕方ないだろ！それに、話をする時間も無かったし……………」

「まあ、そうだけどね」

そんなこんなで、準決勝まで約5分となった今でも、俺は秀吉と仲直りしていなかった。(勿論、優子とも)

どうしようかなあ……とりあえず、秀吉になんて話しかけよう……。

「うーんどうしようかねえ……」

「発言がおじさんだよ」

「うっせえー!」

とは言ったものの、本当にどうしようかな……。

とりあえず、秀吉を誘うか。

俺は秀吉に近づいて、とりあえず肩に手を置いた。

「きゃっ!?!」

「っ!?! なんっー声を出してんだよ」

「なっ!?! 蒼太のせいじゃろっ!?!」

「何でだよ! 肩に手を置いただけじゃねえか!」

「無言で置くでない!」

「そ、それは悪かった」

「……誤るのはそれだけ?」

「はあ!?! アレはお前らが悪いんだろっ!?!」

「何だよ! アレは蒼太が佐藤さんとキスをするから!」

「俺はしてねえ! あっちが勝手にしてきたんだ!」

「嘘つかないで!」

「お前は隣にいたよな!?!」

俺達が口論をしていると、雄二が呆れ顔で近づいてきた。

「お前等なあ、そろそろ時間じゃねえのか?」

「っ!?!」

「とりあえず、早く言って来い」

俺達はそれを聞いて、俺と秀吉は顔を見合わせると思いつきり顔をそらして会場に向かった。

「……あの二人、あんな調子で勝てるかな？」

「多分、無理だろうな。次の相手は常夏コンビだしな」

「あの二人って頭いいの？」

「さあな。だが、腐ってもAクラスだからな。そこそこの学力はあるだろうな」

「ふうん。……本当にあの二人大丈夫かなあ」

「あいつら次第だな」

「それでは、準決勝を始めてください」

「「試獣召喚！」」

俺達は、ギリギリで会場に着いたので、休む暇も無く大会が始まった。

にしても、相手は男の二人組みで、一人は何だか秀吉を凄く見つめている……ホモなのか？

『Fクラス

早山蒼太

&

Fクラス

木下秀吉

保健体育 286点

88点

□ Aクラス

常村勇作

&

Aクラス

夏川俊平

保健体育 208点

199点

□

「お前は本当にFクラスなのか!?!」

「ああ、まあな」

良かったあ……。

今回のテストは程々に集中できたからな……日本史以外。

「まあ、しかしもう一人はカスみたいな点数だな」

「ま、まあ、Fクラスだしな」

「な、なんじゃ……」

「もう一回言ってみろ、このクソ野郎共が!」

「なつ!?!」

「その口を開かなくしてやる!」

「蒼太?」

「行くぞ、秀吉!」

《JOKER》

俺が秀吉にそう言うと、メモリーのボタンを召喚獣に押させた。

何だか分からないけど、秀吉が馬鹿にされたのがスゲー頭にきた!

「う、うむ」

《CYCLONE》

「変身！」

俺達の召喚獣は、竜巻を起こしながらそのままWへと変身した。

「さあ、お前の罪を数えろ（るんじゃ）！」

「これが噂の変身か。中々面白そうじゃねえか！」

「噂は本当だったのか……」（しくしく）

「なっ！？ 何泣いてやがる、勇作！」

「な、何でもない」

「ならいいが……」

「行くぞ、秀吉！」

「う、うむ（何でこんなに怒っているんじゃ？）」

「来るぞ、勇作！」

「あ、ああ」

こうして、俺達の準決勝が始まった。

こいつ等、ぶっ潰してやる！！

第三十一話（前書き）

ふう、やっと更新できました。

これから先、よろしくお願いします。

第三十一話

「一気に決めてやるぞ、このクソ野郎共ッ!!」

「誰がクソ野郎共だっつて!?!」

「蒼太!?!」

三人が何かを言っているが、俺には関係ねえ!

このコンビをブツ飛ばすッ!

俺の召喚獣は、METALメモリをドライバーに差し込んだ。

《CYCLONE》

《METAL》

そして、Wはサイクロンメタルに変身した。

実は、俺この姿気に入っていたりするわけで。

「はあああああッ!」

「くっ!?! 行くぞ勇作!」

「あ、ああ」

「蒼太! 何をそんなに怒っておるのじゃ!?!」

俺は、秀吉を無視してメタルシャフトを振り回し続けた。

チッ! こいつ等、チャラチャラ動きやがって……なら!

「秀吉、LUNAMEMORIだ!」

「じゃ、じゃから、人の話を……」

「早く!」

「……後で教えてもらっぞい?」

そう呟くと、秀吉はLUNAメモリをドライバーに差し込んだ。

《LUNA》

《METAL》

そう音声が鳴ると、Wはルナメタルへと姿を変えた。

これで、動きは関係ねえぜ！

「オラオラオラオラオラアッ！」

「なっ!？」

「棒が、鞭みたいになっただと!？」

「喰らいやがれ！」

俺はそのまま鞭であいつ等の召喚獣を一箇所に固めると、メタルシャフトを鞭の様に使って痛めつけた。

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平

保健体育 123点 97点

』

『Fクラス 仮面ライダーW（早山蒼太&木下秀吉）

保健体育 374点 (286点+88点)

』

「これで最後にしてやるッ！」

俺はそう言って、ドライバーに刺さってあるMETALメモリをメタルシャフトに差し込ませた。

《METAL》

《MAXIMUM DRIVE》

「メタルリリジョン！」

そう言いながらWは、鞭状となったメタルシャフトを円を描くように振り回して、黄色い円盤状のエネルギーを複数生成させ、自在に弾き飛ばして標的を攻撃。

そして、止めに全ての光輪を全方位からぶつけさせた。

「ぐわああああッ!?!」

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
保健体育 DEAD DEAD』

『Fクラス 仮面ライダーW（早山蒼太&木下秀吉）
保健体育 2点 （1点 +1点）』

「勝者、Fクラス、早山&木下ペア！」

先生によって、俺達の価値が高らかに宣伝された。
でも、俺にはそんなことどうでもいい。

こいつ等に、天誅を下す！

俺は、負け組みコンビに近づいた。

「おい、負け組みコンビ」

「誰が負け組みだ!?!」

「実質、負けたじゃねえか……カスみたいな点数のやつにな」

「いやいや、合体とか卑怯じゃねえか！」

「そつだそつだ！」

「はあ？ 何言っちゃってんの、あんたら？ 何？ 馬鹿なの？
死ぬの？」

「死ぬまで言っちゃったよ、こいつ！？」

「そりゃ、変身したら点数は高くなるけど……」

ここで、俺は少し間を空けて言い放った。

「……2対1だぜ？」

「くっ！？」

「考えてみるよ？ 戦場にとって、2対1なら普通は勝てるぜ？」

「そ、それとこれとは……」

「違わねえよ」

「っ！？」

「……いい加減、認めやがれ。お前らは、自分が馬鹿にしたやつに
負けたんだ」

「……」

「じゃあな、負け組み」

「コンビすらも省略された！？」

俺は言いたいことだけ言うと、その場を後にして秀吉に近づいた。

「秀吉」

「な、何じゃ？」

「行くぞ」

「う、うむ」

そう言うと、俺は秀吉の手を掴んでその場を後にした。

「蒼太、蒼太！ 聞いておるのか、蒼太！」

俺は、あれから秀吉の手を握ったまま喫茶店へと向かっていた。

「なんだよ、うつせーな」

「じゃから、何で試合のときにあんなに怒っておったのじゃと聞いておるうに」

「だから、あいつらがムカついたからだって言っただろ？」

「それは嘘じゃろ！」

「……さあ、さっさと喫茶店に戻ろうぜ」

「あ、コラッ！ 逃げるでない！」

俺は、秀吉の手を離すと走って喫茶店に向かった。

………秀吉が馬鹿にされた事に、スゲーム力ついた！ なんて、言えるかよ………恥ずかしいしな。

「あ、蒼太！」

「ん？ ああ、明久（バカ）か」

「会って早々それは無いよね！？」

「で、勝ったのか？」

「僕の突っ込みは無視！？」

「じゃあな」

「返答も聞かないのかよ、チクショー！」

「……ったく、うつせーなあ」

「誰のせいだよ！？ 蒼太、何かあった？」

「何にもねーよ」

「ふうん、ならいけど……で、どうだったの？」

「勝ったよ、余裕でな」

「へえー、僕らも勝ったよ」

「……勝ったチームに、何であんなにテンションが低いやつがいるんだ？」

そう言つと、俺は明久の後ろにいる顔が青ざめている雄二を見た。

「ああ、これはね……霧島さんに、やっと告白したんだ」

「へえー、やっと決心がついたのか」

「違っツ！ あれは明久が勝手に！」

「……どういうこと？」

「だから、明久が考えた台詞を秀吉が俺の声真似で言いやがったんだ！」

「でも、秀吉は俺と一緒にいたぞ？」

「携帯の録音機能だ！」

「ああ、なるほどね」

……でも、携帯の録音機能つて、音が悪くなかったけ？

「まあまあ、そう大声を出さずに。全く、これだから雄二は」

「お前のせいだろうが！？」

「……雄二」

「しよ、翔子！？」

「……嬉しかった」

「ち、違う！ あれは明久が勝手クペ！？」

俺は、雄二の首を押さえると秀吉に目線で、ある事を頼んだ。

秀吉は、俺に対して一回軽く頷くと、軽く咳をしてから声真似を始めた。……勿論、雄二の声で。

「翔子、俺もやっと決心がついたぞ」

「（ブンブン！）」

「……雄二（ポッ）」

「でも、翔子」

「……でも？」

「この大会が終わるまでは、少し待ってくれないか？」

「……うん、分かった」

「ありがとう。愛してるぞ、翔子」

「……雄二、私も愛してる」

そう言って、霧島さんは多分、店に戻った。

それを確認すると、俺は雄二の首から手を離れた。

「なんて事をしてくれたんだ！？」

「まあまあ、大丈夫だって。明日の大会に負けてたらいいんだから」

「……それは出来ないな。なあ、明久？」

「うん、そうだね。この大会だけは、優勝しないとね」

「なんだなんだあ！？ お前らつて、そんなに熱血だったか！？」

「今回は、ある事情があるからな」

「そうだね」

「……そうかよ、分かったぜ」

まあ、こいつらにも事情があるんだろうな。

……でも、俺達も負けないぜ？

「お前らが俺達に勝てるって思ってるんなら……まずはその幻想を
ブチ殺す！」
「原作違うから！」

第三十二話

「蒼太、わしは先に帰っておるぞ？」

「ああ、分かった。俺は少しババアアの所に行くわ」

「うむ、了解したぞい」

そう言うのと、俺と秀吉は別々になった。

ちなみに、明久と雄二はすでに教室に帰って行った……多分。さてっと、それじゃあ俺もさっさと行きますか！

「おい、ババアア」

「入ってきて、いきなりそれかい！？」

「まあまあ、そう言うなって」

「立場が逆さね！？」

「つで、Wの事なんだが」

「私の話は無視かい……」

「……FANGのメモリはどうしたんだ？ それにEXTREMEメモリもどこにあるんだ？」

「……そうかい、お前さんは知ってたんだったださねえ」

「ああ、早く教える」

このままじゃあ、雄二たちに負けるかもしれない。

だから、俺はこの妖怪クソババアアに聞きに来たって訳だ。

まあ、ここまで来たら俺も勝ちたいしな。

「……残念だけど、EXTREMEメモリって言うのは私は知らないよ」

「……はっ!？」

「でもねえ、FANGメモリは知ってるよ」

「どこにあるんだ?」

「さあね、アイツは自分勝手だからねえ。私には全然分からないさね」

「……はああ。分かった」

そう言うと、俺は学園長室を出て行った。

しかし、どうすっかなあ……何か雄二には何か作戦みたいなものがありそうだしなあ……。

……考えても仕方ないか。

……同時刻・校庭……

「ギャオギャオ!」

「何だこれ? 超おもしろーんだけど!」

「なあなあ、これって売ったら結構な金になんじゃねえか!？」

「かもな!」

「……ははははははははっ!」「」「」

「ギャオギャオ!」

？ 何なの、あれ？ うるさいっいたらありやしないわね……。ちよつと注意しときましようか。……Aクラスとしてね。

「ちよつと、あんた達？」

「ああん、何だよ？」

「何か用かい、お嬢ちゃ……ゲツ!？」

「何だ、どうし……っ!？」

「お、お前等一体どうしたんだ？」

「おまつ!？ 忘れたのか!？」

「忘れたって何を？」

「さっきのやつが大会に出てた時、コイツと一緒にだったじゃねえか!？」

「さっきのやつって？」

「お前はアルツハイマーか!! (ボコッ!)」

「痛ええええええ!？ 何すんだよ!」

「お前が思いだせええええええッ!」

「ちよ、ちよつと?」

「何だ……」

「すんませんでしたあああああああッ!」

そう言うと、二人は真ん中にいた一人を担いで走り去ってしまった。

…… 一体、何だったのかしら?

…… まあ、いいわ。それより、この籠に入っているのは……。

「犬?」

「ギヤオギヤオ!」

「それとも猫?」

「ギヤオギヤオ!」

「……恐竜?」

「ギャオギャオギャオギャオツ!!」

「……恐竜っぽいわね。……っと、早く出してあげないとね」

そう言うのと、私は籠の出口を空けてあげた。

それにしても、何でこんな分厚そうで高そうな籠をあんなゴロツキみたいなのやつらが持っていたのかしら？

……うーん、分からないわね。

「ギャオギャオ!」

「きゃ! ちよ、ちよっと! いきなり舐めないでよね! くすぐつたいじゃない」

「ギャオギャオ!」

「あははははは。分かったわ、分かったわよ! もう……じゃあ行きましようか」

「ギャオギャオ!」

……なんだか、懐かれたみたいね。……にしても、この恐竜……

どこかで見たことがあると思うんだけどなあ……。

まあ、いいわ。早くお店に戻らないとね。

「そこのお嬢ちゃん」

「ん? 私かしら?」

「ちよっと眠っていてくれよ?」

「え……っ!?!」

「ギャオギャオ!」

「さてっと、連れてくか」

ここで、私は意識を失った。……蒼……太……。

「さてつと、どうすっかなあ」

まさか、二つとも無いなんて予想もしてなかったからなあ。
これは次の勝負負けるかもしれないな……。

仕方ねえな。明日の朝は早めに来て、回復試験でも受けるか。

……次は日本史だしな。

そう考えてたら、前の方に明久たちが走っていくのが見えた。

「何かあったのか？ ……まあ、あいつらに聞けば分かるか」

そう呟くと、俺はそこから明久が向かって行った方向に向けて走り出した。

「おーい、明久！」

「蒼太、探したよ！」

「？ なぜ俺を探すんだ？」

「姫路さんと美波と葉月ちゃん霧島さんと……」

ん？ この三人に何かあったのか？ はああ、穏便に済むことを祈るしかないか……。

「秀吉と木下さんが誘拐された！」

「よし、犯人を『殺』そう！」

「穩便？ 何それ、食べれんの？」

「うん！ じゃあ、行こう！」

「ああ、そうだな！」

俺たちは、腕を組合って犯人を殺す事を誓い合った。

番外編 メリークリスマス！ いえいえ、もうお正月です。〈前編〉（前書き）

「おい」

「……はい。」

「とりあえず、言う事があるよな？」

はい、ありますね……。」

「じゃあ、はっきりと言え」

そうするよ。……皆様、スイマセン！

この短編ものは、25日のクリスマスの日に投稿しようと思ったんですが……30日投稿しかも、後編は未だに製作していない状況です。」

「とりあえず、徹夜で書くか」

「……それは無理。体調的に。」

「……」

そ、それでは、どうぞ！

番外編 メリークリスマス！ いえいえ、もうお正月です。〈前編〉

「さてさて、今日はクリスマスってなわけだが」

「ほら、蒼太！ 早く用意をしなさい！」

「何でお前達が俺の家にいるんだ！？」

「クリスマスだから！」

「意味が分からん！ 俺は今日はゆっくり過ごすんだ！」

「それは駄目！」

「まさかの否定！？」

「蒼太は、私達と一緒にクリスマスを過ごすの！」

「まさかの強制！？」

「そうよ！」

「人権まで無視してきたぞ、こいつ等！」

「蒼太の人権は私達が持つてる！」

「気づけ！ それは人権とは言わないはずだ！」

「大丈夫、私達が世界を変えるから！」

「無理に決まつてるだろ！」

こ、こいつらは……皆、聞いてくれ。

今、何時だと思う？

……今は、朝の7時だぞ？

学校も無いんだぞ？

なのに、こんな早くに起こされて……俺の気持ち分かるか？

「ほらほら、学校も無いんだから、さっさと用……」

「……意？ 電話みたいね」

そう言うと、優子は俺ん家の受話器を取った。

……？ つて、まてまてまて！ 俺の家なの！？

「ま、待て優子！」

「はい、早山です」

「「っ！？」」

「はい、はい……分かりました。蒼太には伝えておきます」

その後、それでは、失礼しますっと言って電話を切った。
いやいやいや、今コイツ「早山」って言ったよな！？
何か無茶苦茶恥ずかしかったぞ！？

「姉上！ ななな、何で早山って」

「何でって……はっう！」

……何故か、優子は顔を赤くしてうつむいてしまった。
多分、意識してなかったんだろうな。

「で、電話は誰からだっただんだ？」

「西村先生よ」

「そうか、鉄じ……ん！？」

「そうよ？ 何でも、今日、Fクラスは補習だっつて」

「んなバカな！？」

「知らないわよ。でも、仕方ないんじゃない？」

「何でだよ！？」

「だって、アンタたち学校で最低レベルでしょ？」

「うっ！？ し、しかし、俺は……！！」

「いやいや、アンタのいるクラスを考えたら、当たり前でしょ？」

「……くっ！ 何も言えない！」

「まあ、早く帰ってきなさいよ？ 私たちでクリスマスの準備しとくから」

「……姉上」

「どうしたの、秀吉？」

「ワシはFクラスじゃぞ？　ワシも補習があるのではないかの？」

「……………」

「……蒼太、行くぞい！」

「い、嫌だあああああッ！」

「わ、私も行くから、ちよっと待ってなさい！」

「何で優子も来るんだ!？」

これは嫌な予感しかしないぞ!？

せ、せめて優子だけでも俺の家に来てくれ!

「むう。なぜ姉上が来るのじゃ？」

「べ、別にいいでしょ!？」

「よ、良くないのじゃ!」

「何だよ？　理由を5文字以内で言いなさい」

「なっ!？　そ、そんなの無理じゃ!」

俺でも無理だったな、これは。

「じゃあ、文句を言わないで頂戴？」

「くっ……………仕方ないのお」

そう言うと、二人は俺に対して「ちよっと待ってて」と言っ
て、俺の家を出て行った。

……………俺の穏やかなクリスマスが……………去っていくぜ……………。

さて、今の状況を説明しよう。

俺は今、学校にいる。あの後、二人と一緒に学校に行っていると、まず須川に見つかった。

さて、今の話を聞いただけで勘が良い人はもうお気づきだろう。俺は今……校内を全速力で走っている。

「誰か、助けてくれえええええええッ！」

「やつを殺せええええええええッ！」

「殺されてたまるかああああああッ！」

ただいま、補習と補習の間の昼食の時間。
地獄の鬼ごっこが開始されていた。

「くそおおおおおおおッ！」

「コロスコロスコロスコロス！」

「漢字より、カタカナのほうが怖いんだぞ!？」

「蒼太を殺せー！ーッ！」

「なんでかな、こいつらの声は凄く安心する!？」

や、やばい！ Fクラスの中で、変な派閥が出来てやがる!

カタカナ野郎共に捕まったら、俺はマジで死ぬるかもしれないぞ
!？」

そして、今は屋上……そいしてそこには……。

「ああ、蒼太。お疲れ様」

「後もうちよつとじゃぞ、蒼太」

「アンタも大変ねえ……」

「頑張ってくださいね」

「……頑張って」

「そうだね。頑張ってね、蒼太君」

「が、頑張って下さい」

「何でお前達はこんなにくつろいでだあああああッ!？」

優子、秀吉、島田、姫路、霧島さん、工藤、佐藤がくつろいでいた。

……ちなみに、何で霧島さんと工藤と佐藤がいるかと言うと、霧島さんはみんな大体予想がつくよな？

そう、本人言わく「雄二がいるなら休日でも来る。雄二が来ないなら平日でも来ない」らしい。

工藤は、何だか面白そうだから。

佐藤は、休日と言うことを忘れていたらしい。……忘れるか、普通？

「何でつて聞かれても……ねえ？」

「そ、そうじゃな」

「アンタも大変ねえ」

「お昼休みですし……」

「……昼食を摂ってる」

「あはは、おいしいよ？」

「そ、蒼太君も食べますか？」

「お、それはうれしいなあ。じゃあ、言葉に甘え……」

『ブチコロスブチコロスブチコロスブチコロスブチコロス』

そうだな。

まあ、頑張つて、二人とも。

その後、二人は俺と同じように地獄の……いや、命掛けの鬼ごっこが始まった。

ちなみに、FFF団のやつらも二人を「裏切り者には死を」と言いながら追いかけていった。

いやあ、何にせよ……。

「めでたしめでたし」

「めでたしつてアంత……」

「ま、まあ、いいんじゃないかのお」

「あはは、相変わらず楽しいクラスだね」

「ただだ、大丈夫なんでしょうか!？」

「大丈夫だろ……死にはしないさ」

「え、えええええええええ!？ 死ぬ事以外は大丈夫じゃないんですか!？」

「まあ、そんなに気にする事ないって」

実際、あいつ等はどういう状況を何度も潜り抜けてるからな。死ぬことは無いだろう。

「さて、じゃあ、俺も昼飯を食べるか」

「そうね、一緒に食べましょう」

「そ、そうじゃな」

「皆で食べると美味しいよねえ」

「は、早山君と一緒にご飯……」

「ん？ 何言つてんだ？ 俺の弁当箱は教室だから、教室で食べるぞ?」

「……あつそ」

「勝手にするんじゃない!」

「ありやしゃ、それは仕方ないね」

「シヨックです……」

「じゃあな」

そう言うつと、俺は屋上を出て教室に向かった。

さてと、これでようやく飯にありつけるぜ！

「さてつと、ようやく飯にありつけるぜ！」

今の教室には誰もいない……。

まあ、多分みんな明久たちを追いかけてるんだろつなあ。

しかし、これはこれで何だかシユールな絵だな……。

だって、この教室にいるのは俺だけなんだぜ？

いやはや、こんな事もあるんだな。

「まあ、どうでもいいけど」

そんなことよりも、飯だ飯

今日の飯は、コンビニの弁当なんだが、今の俺からしたら、弁当でも最高級のランチみたいなものだ。

だって、休み時間の度に追いかけられてたからな。

腹ペコなんだよ……。

さてつと、それじゃあ、早速！

「いったただつきまーすっ！」

「あんた、声大きいわよ？」

「ゆ、優子！？ 何でここに！？」

「な、何でつて……あ、アンタと一緒にご飯を……（ボソボソ）」

「？ 何て言ったんだ？」

「だから！ アンタと一緒に……その、ご飯を……ね？」

「……ああ、一緒に食べようってか？」

「そ、そうよ」

「じゃあ、一緒に食べるか？」

「ええ、そうしましょう！」

……優子の顔が真っ赤になりながらも笑顔になる。

……どうしよう、スゲー可愛いんですけど。

「じゃあ、隣に来いよ」

「え、ええ。そうね」

そう言つと、俺の隣に優子は座った。

まあ、飯はみんな食べたほうが美味しいっていうのは、まあ常識だよな。

「つて、アンタのご飯ってコンビニのお弁当なの？」

「ああ、あの時間から作るのはめんどくさかったしな」

「そうなんだ。……わ、私のお弁当、少し食べてみる？」

「おっ！ いいのか？」

「え、ええ。別に構わないわよ？」

「おお、じゃあありがたく頂くよ！」

そう言つと、俺は優子のお弁当箱の中に入れてある、から揚げをとった。

そして、そのままから揚げを口の中に放り込んだ。

「うっ……」

「うっ？」

「旨い！ これスゲー旨い！」

「そ、そう？ ありがと」

そう言つと、優子の顔は赤いながらも、凄く嬉しそうに微笑んだ。

うん、旨い！ ……でも、何でこんなに余つてんだ？

だって、さっきまで秀吉たちとご飯食べてたよな？

……まあいいか。

「ど、どんどん食べていいわよ？」

「おう、ありがたく頂……」

「あ、姉上！ なんでFクラスにいるのじゃ！？ そして、何で蒼

太と一緒にご飯を食べているんじゃ！？」

「ひ、秀吉！？ 何でここに！？」

「姉上が帰ってこないから、もしかと思ったんじゃよ！」

「っ！ しくつたわね」

「そして、蒼太！」

「ふあんだ？（何だ？）」

「食べながら、ワシの話を聞くんじゃないぞい！」

「モグモグ……ゴクツ。悪い悪い、おいしかったからね」

「くっ！ 蒼太、ワシの弁当も食べるのじゃ！」

そう言つと、秀吉は弁当箱を俺に差し出した。

「……へ？」

「早く食べるのじゃ!」
「あ、ああ」

俺はそう言つと、秀吉の弁当を食べ始めた。

……うん、まあ普通に旨い。

「ど、どうじゃ!?!」

「うん、旨い」

「姉上のとどちが旨いかのお!?!」

「え!?!」

「ちよ、秀吉!?!」

「何じゃ、姉上!?!」

「何でそんなことを聞くのよ!?!」

「どっちが旨いか気になるじゃろ!?!」

「別にいいじゃない!」

「気になるのじゃ!」

「ならない!」

「なる!」

「ならない!」

「なる!」

……えええつと、これはどうしたらいいんだ?

俺は答えを言ったほうがいいのか?

それとも、言わなくていいのか?

つとそこで、校内放送が聞こえた。

『えええ、連絡です。お昼は学校を閉鎖するので、至急校内にいる生徒は、学校を出るようお願いします』

ん? 閉鎖つて……何をするんだ?

あれか？ 青い戦士が通いやすいように、ウェーブボードでも開通させたり、どこかの島のようにいろいろな場所にデュエルツクスでも作るのか？

『ちなにみ、閉鎖といっても、閉鎖している間に工事をするっていうわけではありませんよ』

「心が読まれた!？」

「アンタ、何言ってるの？」

「べ、別に」

び、びっくりしたあ。

まるで俺の心を読んだみたいな発言をするんだもんなあ。
いやあ、びっくりびっくり。

「それより、今の放送聞いただろ？ 早く帰ろうぜ？」

「む、しかたあるまい」

「じゃあ、私は荷物を取って来るから、ここで待っててね」

「ああ、早くしてくれよ？」

「分かってるわよ」

そう言うと、優子はAクラスへ向かって歩いていった。

「さて、少しゆっくりしておく………がつ!？」

「……………」

………皆さん、大変です。

秀吉に、押し倒されました。

しかも、なぜか顔が赤いです。

………あれ？ これって、俺ヤバくね!？

「な、何すんだよ、秀吉!？」

「……どっちのお弁当が美味しかったの？」

女口調k t k r。

最近思っただけけど、女口調の時の秀吉って……何か大胆じゃね？

「ど、どっちって言われても……」

「はっきり言って!」

「う〜ん……そうだなあ」

正直、両方凄く美味しかった。

それだけにどっちの方が美味しいっていうのはなあ……。

「両方美味しかったって言うのは駄目？」

「駄目! どっちか!」

「そうだなあ……」

……ガラッ。 トビラが開く音。

……ドゴッ。 秀吉が優子に蹴られる音。

……ドタドタッ。 秀吉が畳の上でのた打ち回る音。

「お、お姉ちゃん!? いきなり蹴りは無いと思うよ!？」

「アンタこそ何してんのよ! 何で蒼太を押し倒してんのよ!」

「べ、別にやましい事はしてないよ!」

「顔を赤らめてるやつという事が信用できるわけ無いでしょうが!」

「ごもつともだな。

にしても……ドゴッって。

「だ、大丈夫か、秀吉?」

「だ、大丈夫……夫じゃない！」

「へっ？」

「だ、大丈夫じゃないから……そ、そのお」

「？」

「い、家までおんぶして！」

「は、はいいいいいいい！？」

「おんぶ」

「ちょ、ちょっと！何を言っているのよ！？」

「……まあ、仕方ないか」

「そ、蒼太！？」

「ま、気にするな。優子は悪くないって」

そう言つと、俺は優子の頭を撫でた。

まあ、蹴りはどうかと思っけどな。

「そ、そうよね？ 私は悪くないわよね？」

「うんうん、優子は悪くない」

「うう……蒼太、おんぶ！」

「はいはい」

そう言つと、秀吉のかばんは優子に持ってもらい、俺は秀吉をおんぶした。

「さて、帰りますか」

「うん」

こうして、俺達はようやく帰宅することが出来た。

「じゃあ、後で行くわね」

「楽しみにしておくのじゃ」

「……別に来なくても」

「何か言った？」

「な、何も言っておりませんよ！」

「そう、ならいいわ」

「じゃあ、後でなのじゃ」

「お、おう」

そう言つと、優子と秀吉は家に帰つていった。

「……俺の穏やかなクリスマスが……」

俺は力なく呟くと、家に入っていった。

「ただいまあつと。……なぜか言つちまうんだよな」

皆も言つてしまふと思うけどな。

家に入ると、とりあえず俺はソファーにかばんを置いてネクタイを外すと、冷蔵庫を空けた。

「……あ、あれえ？ おつかしいなあ……。俺の目がおかしいのかなあ？」

冷蔵庫……だよな？ 俺ん家だよな！？

……みんなに、言っておこう。俺は基本冷蔵庫の中に何か一食は作れる様に素材を入れている。

な、なのに……何で今日に限って！

「何にも入ってねえんだよ……！？」

俺は、その場に崩れ落ちた。

……あ、ありえねえ！俺とした事が！

「買いに行くか」

俺はそう言っ、買い物に向かった。

……はずだった。

「何で俺は追いかけてらるんだああああああッ！？」

「お前は絶対に許さない！」

「何でだよ！？お前らが勝手に失敗したんだろっが！」

「誰のせいだ！」

「お前らのせいだろうが、コンチクショーツ！」

俺は今、明久と雄二に追いかけているため、死に物狂いで逃げている。

え？何で死に物狂いかって？……だって、あいつ等の目に本気で殺すって書いてあるんだぜ？

流石に逃げるだろう!?

「と、とりあえず撒かないと駄目だ! 買い物が出来ない!!」

「逃がすかああああああああ!」

「見逃してくれええええええええ!」

「見逃す……」

「……雄二、逃がさない」

「見つけたわよ、アキ!」

「もう逃がしませんよ、明久君!」

「……から、僕（俺）達を助けて（くれ）!」

……まあ、悪くない取引だな。

「分かった、じゃあこっちへ来い!」

「うん!」

「急げ! あいつらに捕まったら……!」

「そ、想像しちゃ駄目だよ、雄二!」

「あ、ああ」

こうして、俺達は女子軍勢から逃げることになった。

……何かを忘れているような気がするけど、今はこっちが優先だ!

「さて、それじゃあ買い物に行くか!」

「ちょっと待て」

「どうした、雄二?」

「明久がいない」

「ああ、明久は……」

「僕、もうお婿にいけない……」

「……そこにつて、暗いぞ、明久!」

「誰のせいだよ!!?」

「あ、明久……ついに頭がおかしくなったのか？」

「ち、違うよ！ 蒼太が、蒼太があ！」

「あれだ。今の明久と雄二がカップルみたいにしたら、案外バレないんじゃないかなあって思ったからさ」

「バレるだろう、普通」

「まあ、やってみたらどうだ？」

「……こうなったらやけだ！ 行くぞ、明久！」

「ええ！？ 本当にやるの！？」

「行くぞ！」

「うう、分かったよ……」

「じゃあ、お前達は俺ん家に帰ってくれ。鍵渡すから」

「何で僕は女装したの！？」

「よし、行くぞ！」

「ちよつと待って！ 僕は一度蒼太を殴らないといけないんだ！」

「バカ言っでないで、とつと行くぞ！」

そう言うと、明……アキちゃんは、雄二に引きづられて、俺ん家に帰っていった。

さて、今日は俺と明久と雄二と秀吉と優子とのクリスマスだ。

結構な量の買い物に……ああっ！

「そつだ！ 優子と秀吉との約束が！！」

……まずい。非常にまずい！！

こ、これは急がないと！

そう思った俺は、急いで買い物を済ませると家に早足で帰っていた。

番外編 メリークリスマス！ いえいえ、もうお正月です。〈前編〉（後書き）

「……前編だけで、長くないか？」

……それでは！ 次もよろしくお願いします！

「無視するな！！」

番外編 メリークリスマス！ いえいえ、もうお正月です。〈後編〉（前書き）

ふう、やっと書き終わりました！

……みなさん、メリークリスマス！

「あけましておめでとございます、だろっが！」

番外編 メリークリスマス！ いえいえ、もうお正月です。〈後編〉

「は、早く帰らないと！」

こ、殺されるかもしれない……

クリスマスに殺されるなんて、嫌だぜ！？

……は、早く帰ろう、人生で一番早くに。

そう思うと、俺は今までこんなに早く走れるのかって言っぐらいのスピードで家に向かって走っていった。

「た、ただいまあ……」

シーン

……も、もう家に帰りたい！ ここ、俺の家だけど……！

「あ、明久？ 雄二？ 秀吉？ 優子？」

シーン

だ、誰か助けて……！

こ、こんな変な空気が漂ってる家が自分の家だなんて信じたくない

い！

俺はそのままリビングに入るうとした。

……そして、扉を開けると……………。

「……雄二、浮気は許さない」

「おかしい！ 元々お前と俺は付き合ってた……」

「……最近、こんなものを手に入れた」

そう言つと、霧島さんは右手にスタンガン（見た目30万ポルトぐらい？）を持ち出した。

「……ないわけがないな！ うん、俺は翔子と付き合ってるぞ

「……」

「……うれしい」

「っ！？（そ、蒼太！ 助けてくれ！！）」

「（わ、悪い。俺には無理だ……………）」

俺はそう言つと、縛られている明久のほうを見た。

……縛られている？

「アキ？ アンタ、私達との約束を破つて、何で坂本と！？」

「何で何ですか、明久君！？」

「だ、だから誤解だつてば！」

「何が誤解なのよ！？ 実際、アンタは坂本と一緒にいたじゃない！」

「そうです！ 何で坂本君と！？ そ、そんなに男の子がいいんですか！？」

「何で姫路さんは僕を同性愛に導こうとしてるの！？」

「み、導こうなんてしてません！ むしろその逆です……！」

「逆ってなんなのさ！？」

「そ、それは……は、恥ずかしくていえません！」
「君は一体何を僕に教えようとしているの!？」

……うん、放っておこう。
触らぬ神に祟り無しって言うしな。

「……蒼太？」

「さ、さあて、夕ご飯の支度でもするかな！」

「蒼太！」

「は、はい！」

終わった。……俺の人生が終わった。

「良かった、帰ってきてくれて！」

「本当に良かった！ 帰ってきてくれて本当に良かった!！」

そう言つと、何故か二人は俺に泣きながら抱きついてきた。
どどど、どうなってんだ!？

「な、何で泣いてんだ!？」

「アンタがいないから心配して、携帯に電話したら……」

「電話に出ないし……」

「……」

た、確かに俺は携帯なんて見てる時間が無かった。
主に明久と雄二のせいだな。

「わ、悪かったな。明久達に追いかけて……」

「そう……秀吉？」

「うん、分かってるよ。お姉ちゃん」

そう言うと、優子は雄二に、秀吉は明久に近づいていった。
……恐怖の笑顔を浮かべながら。

「き、木下！？ 何故いきなり俺を見つめるんだ！？」

「代表、お願いがあるの」

「……雄二はあげない」

「分かってるわ。で、お願いって言うのはね……そのスタンガン、貸してくれない？」

「……分かった」

「待て翔子！ 今それをそいつに渡すあべべべべべべべべべべ」

「こんなんじゃ済まさないわよ？」

「あべべべべべべべべべべ」

……雄二が可愛そうに思えた一日だ。
で、秀吉は……。

「二人とも、お願いがあるのじゃ」

「何ですか木下君、お願いって？」

「後にして、木下！ ウチは今忙しいの！」

「明久に攻撃するのを止めてほしいんじゃ」

「なっ！？」「」

「ひ、秀吉い！」

「ほら、縄を解いてやったぞい？」

「あ、ありがと！ 流石は僕のお嫁さんだね！」

「ワシは蒼太のお嫁さんじゃ。お主みたいなの、バカでアホなやつのお嫁さんではないぞい？」

「フラれた！ っていうか、何か凄く罵倒された！？」

「なっ！？ それは酷いぞい！」

「だ、だよね！ 秀吉がそんなこと言うなんて……」

「いつワシがお主の事、バカでアホで鈍感で、ルックスがバカの顔みたいで非力で……」

「止めて！ もう僕のライフはゼロだよ！」

「……着られている服が可愛そうで、使われている枕や布団とかも可愛そうで」

「あががががががが……チーン」

「遊ばれてるゲーム機とかも可愛そうと言ったんじゃない？」

「……………」

「き、木下！ 言いすぎよ！？」

「そ、そうですね！ あ、頭はともかく、顔はかわいいですよ！」

「むう？ そうかのお？ ワシのほうが可愛いと思うのじゃが」

「た、確かにそうですね……」

「そ、それにしただって言いすぎよ！」

「ふん！ こんなやつ、もう知らんのじゃ！」

そのまま秀吉は島田や姫路と会話を始めた。

あ、明久が白い……だと！？

……これからは、あの二人を怒らせないようにしようと思った日でもあった。

あの後、俺はちゃんと全員分の夕ご飯を作ると、皆に俺の料理を振舞った。

……作り終わるまで、あの二人はやられ続けてた。

まあ、だからといって早く作るわけも無く、あの後じつくり1時間もかけて料理を作った。

「じゃあ、みんな食べてくれ」

『いただきまーす!』

そう言うと、みんな料理を食べ始めた。

……へっ？ 何でみんながここで食べられるほどの机があるかだつて？

まあ、そこは気にしないでくれ。

「お、おいしわね」

「おいしいです……これにかつにはもっとオリジナルの味を出して

……」

「流星は蒼太、おいしいわ」

「本当じゃな、流星は蒼太なのじゃ」

「……おいしい」

「おいしい!……って言うか、良く生きてたね、雄二」

「お前もな、明久」

「って言うか、皆が集まるならムツリー二とかも呼んだら良かったな」

「それは無理だよ、蒼太」

「何で？」

「ムツリー二は今日、取材だつて」

「何でだろう、取材って聞いただけで、アイツの変態行動が目につかぶ……」

「まあ、無理も無いがな」

この後、俺達は和気藹々と会話をしながらご飯を食べた。

はずなのに……。

「蒼太は私のよ！」

「違う！ 蒼太は私の！」

「こんの、弟のくせに！」

「でも、お姉ちゃんよりは可愛いわよ！」

「な、何ですって!？」

「何よ!？」

「明久君はやっぱりいい匂いですう」

「本当よねえ。いい匂い」

「な、何で僕は二人に抱き付かれてるの!？」

「……雄二、脱いで」

「お前は変態かっ!？」

ど、どういう状況!？」

さっきまで和気藹々のご飯を食ってたよな!？」

何で!？」 何がどうなったの!？」

ちなみに、秀吉と優子は俺に、姫路と島田は明久に、霧島さんは雄二に抱きついてる。

「お、おい、優子に秀吉!？」 お、お前等一体どうしたんだ!？」

「別に、どうもしてないわよお？」

「そつよ。どうかしたの、蒼太あ？」

「……何か、お前等酔っ払いみたいだな」

……だって、こいつらの頬が少し赤いんだぞ？
これはよってるおかしかならぬ！

……しかし、俺ん家にお酒なんてあつたか？

「酔ってないわよ？」

「そうそう、私達が料理のお酒で酔っわけない」

「あ、なるほどね」

こいつ等……って言うか、女子（&秀吉）全員だろっけどあれで酔ったのか！？

って言うか、何であれを飲んだんだ！？

「そ、蒼太！？ ど、どうしよう！？」

「……とりあえず、家に送ったほうがよさそうだな」

そう言うって、俺は家に置いてある時計を見た。

時間は、ただいまPM10時。

流石にこれ以上、年頃の女の子を俺ん家に置いて置く訳にも行かないしな。

「じゃあ、島田と姫路は明久が。霧島さんは雄二が責任を持って家に届けてくれ」

「うーん、そうだね。分かった」

「何で俺が翔子を！？」

「まあまあ、いいじゃんか」

「良くない！」

「……雄二、お願い」

「……チツ、分かったよ」

そう言うと、雄二も観念したかのように頷いた。
……まあ、流石の雄二でもあんな状態の霧島さんを放っては置けないんだな。

「ほら行くぞ、翔子」

「……うん」

そう言うと、坂本夫婦（仮）は帰っていった。

「じゃあ、僕もそろそろ帰るよ」

「ああ、どこ行くんですか明久君」

「どこ行くのよ、アキい」

「さあ、帰るよ、二人とも」

「いやですう。もっと明久君の近くにいたいですう」

「そうよお。ウチもアキの近くにいたいい」

「はいはい。じゃあね、蒼太」

「おう」

「ほら、行くよ」

そう言うと、明久は二人を連れて帰っていった。
いやあ、美少女二人に好かれると大変だね。

「蒼太あ、だあい好き！」

「私も、だあい好き！」

「……俺もか」

さてつと、こいつらをどうするか……まあ、とりあえず家に電話
だな。

「ちょっと離れてくれ、お前等ん家に電話するから」

「別にいいけどお、誰もいないわよお？」

「そうそう、親同士でクリスマスデートに行ったからねえ」

「んなっ!?!? じゃ、じゃあ、お前達はこのあとどうするつもり!?!?」

「「そんなの、蒼太の家に泊まるう」」

「嘘だ!」

「「ひぐらしネタは古いと思うう」」

「酔ってるのに正確な突込みをありがとな!」

どどど、どうするんだ!?

この状況、もしかして……イける!?

……いやいやいやいや! か、考える!

この小説にはR15は付いてなかった!

ツて事は、やっぱりああいふ展開だよな?

そう思って、俺は抱きついてきている優子たちを見た。

「「すうすう……」」

「ですよねえ……」

俺はその後、優子のズボンのポケットから鍵を取り出して木下家にお邪魔すると、二人を部屋に寝かせて鍵を閉めて家に帰ってきた。

まあ、鍵は明日返せばいいよな。

そう思って、俺は部屋に向かった。

「さてつと、とりあえず……寝るか」

だつてすることがなかったんだよ!!!

仕方ないだろ!!!

俺はそのままベッドに入って、そのまま寝ることにした。

俺は今日一日で、こんなクリスマスでもいいと思いました。

アレツ!?! 作文ツ!?!

〈後日談〉

「……雄二、私昨日何かした?」

「……」

「……雄二?」

「し、死ぬかと思った」

「……だから、私が何かしたの?」

「……まあ、そうだな」

「……何をしたの?」

「……悪い、言いたくない」

「……?」

「（い、言える訳ねえ! コイツを送っていく時に、コイツにせがまれてそ、そのお……ききき、キスをした何て言える訳ねえ!）」
「……???」

番外編 メリークリスマス！ いえいえ、もうお正月です。〈後編〉（後書き）

それでは、今年もよろしくお願ひします！

第三十三話（前書き）

「やっと本編だな」

「そうだね！　そして！」

「おう？　何かするのか！？」

本編に戻ったのを記念して、コラボを

「するのか！？」

募集します！

「……ああ、成る程ね」

つと言っわけで、コラボしていただける方は、感想かメッセージで
お願いします！

第三十三話

「雄二」

「来たか、蒼太と明久」

「ここか？」

「ああ、そうだ」

その後、俺と明久は走って雄二の所に向かった。

雄二は文月学園から5分ぐらいのカラオケボックス前の所で立っていた。

その後、俺達はカラオケボックスに入って誘拐犯がいるパーティールームの前まで来た。

「雄二、行くぞ」

「待て蒼太。俺達の出番はもうちょっと後だ」

「どういうことだ？」

「もう少ししたらムツツリー二が気を引いてくれる。俺達はそので飛び出す」

「でも、どうやって中の状況を知るの？」

「ああ、それに関してはこれで大丈夫だ」

そう言つと、雄二は盗聴の受信機みたいなものを取り出した。

「……何でお前がそんなもんを持ってんだ？」

「俺のじゃない、ムツツリー二のだ」

「ああ……成る程な」

まあ、ムツツリー二のなら何となく分かる気がするな。

俺達は、中の状況を知るために盗聴に耳を貸した。

『さて、どうする？ 坂本と早山と……吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本と早山は下手に手を出すとマズい。坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしい』

『早山というやつは？』

『最近は知らないが、昔はやばかったらしい』

『どういう意味だ？』

『小学生の頃、闇組織を一個壊滅させたらしい』

『……………はっ？』

『そついうわけだ。だから、坂本と早山にはうかつに手を出すな』

『あ、ああ』

『……………出来れば、事を構えたくはないな……………』

『気持ちは分かるが、そもいかないだろ？ 依頼は木下秀吉を含めたその4人を、動けなくする事なんだから』

受信機から、音楽に混じって聞こえる会話が聞こえてきた。

それを聞いて、俺達は顔を見合わせる。

「お前、今の話本当なのか？」

「ん？ 闇組織を壊滅させたっていう話か？」

「そつだ」

「根も葉もない噂だよ」

「そつか、ならいい」

本当は、ある事情があつて壊滅させたが、まあ嘘つて事でいいだろつ。

「にしても……………雄二、依頼つて言うことは、この人たちの後ろには黒幕がいるつて事だよね？」

「明久にしては勘がいいな。多分そうだろう」

「まあ、とりあえずこいつらから黒幕っていうやつ話を聞こうか」
「ああ、そうだな」

とりあえず、こいつらは遠慮無しでやるか？ ……まあ、恐怖心を与えるぐらいで良いか。

『お、お姉ちゃん………』
『アンタ達！ いい加減葉月を離しなさいよ！…！』

聞こえてきたのは、島田の怒鳴り声と今にも泣きそうなの、島田妹の声だった。

こいつら、絶対許せねえっ！

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』
『ギャはははは！』

くっ！ ……もうそろそろ堪忍袋の緒が切れそうだな。と思つていたら、明久が今にも飛び出そうとしていた。

「（待て明久、勝手に行動するな。気持ち分かるが、人質の救出が優先だ。ムツツリーニがうまくやるまで待つてろ）」

「（……分かったよ）」

俺が言う前に、雄二が明久を止めてくれた。

ここで出て行ったら、俺達の我慢が水の泡だからな。

『……灰皿をお取り換えいたします』

『おう。で、このオネーちゃんたちどうする？ やっちゃっていいのっ』

『だったら俺は、コツチの巨乳チャンがいいなー!』
『あつ、ズリー! それなら俺、2番目ね!』

パーティールームの中から、下品な笑い声が聞こえてきた。

『あ、あのっ! 葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください!』
『だってさ。どうする?』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな?』

『やゆ! さ、触らないで...』

『ちよつと、やめなさいよ!』

『あーもう。うっせえ女だな!』

『きゃあっ!』

ドン、という突き飛ばした音と、島田の悲鳴。

そのあと、まるで何かがテールを巻き込んで倒れたような音。

そして、その音を聞いた明久は雄二の止める声を無視して、パーティールームに入っていった。

「おじやましませー!」

「おい、待てっつて明ひ...っ!?!」

俺が明久を止めようとすると、俺の視界には両手両足を縄で縛られ、ガムテープで口を塞がれて今にも泣き出しそうな顔をした秀吉と優子がいた。

それを見た俺は明久の肩を持って思いっきり後ろに飛ばすと……
そこからの意識を失った。

「……おい、明久」
「……言いたいことは分かるよ、雄二」

僕達は今、何十人の中に一人で乗り込んでいる蒼太を見ている。

「……蒼太って、本気で怒ると無言になるんだね」

「……ああ、そうだな。……これからは、蒼太に対する悪ふざけも、程々にしないと」

「……そうだね。……今の見た？」

「……ああ、見た。殴られたやつが15mぐらいぶっ飛んだぞ？」

「……蹴られた人のお腹から煙が出てきたよ？」

「……アイツの足が何十本にも見えるのは俺だけか？」

「……大丈夫、僕にもそう見えるから」

「……今、ナイフを取り出したやつが蒼太にナイフを取り上げられて、刺されたぞ？」

「……しかも、両腕を刺されたね。……僕、闇組織を壊滅させたつて言うの、本当だと思う」

「……奇遇だな、明久。俺もだ」

少し、蒼太に関することを探ってみようかな？

……止めておこう。バレたら、本気で命が無くなる。

「そ、そろそろ止めに行こうか？」

「……止めるより先に、姫路達を救出するか」
「そうだね」

そう言うのと、僕達は絶対に、鬼神^{そつた}の視界に入らないように「コソコソ」と歩いた。

僕は美波に、雄二は姫路さんの所に向かった。

「あ、アキ？」

「大丈夫、美波？」

「う、ウチは大丈夫だけど……」

そう言うのと、美波は蒼太の方を見た。

「だ、大丈夫だと思うよ……多分」

「……まあ、ウチは別にいいんだけどね」

「お姉ちゃん！」

「葉月！」

そう言うって、葉月ちゃんは美波に抱きついた。

「こ、怖かったですう！」

「よく頑張ったわね！」

「葉月ちゃんも無事それで何よりだよ」

「バカなお兄ちゃん、助けてくれてありがとうございます！」

「どういたしまして……って言うても、助けたのは蒼ただけだね」

「蒼太お兄ちゃんって言うのは、あの無言であの人たちをボコボコにしてる人ですか？」

「葉月ちゃん、女の子がボコボコって言っちゃ駄目だよ？」

「はい、分かったですう！」

「さて、じゃあ、秀吉と木下さんを助けてくるよ」

「ええ、そうしてあげて」

僕は美波と話し終わると、秀吉たちが縛られている場所に行った。そして、二人の縄とガムテープを取り外した。

「大丈夫、二人とも？」

「わ、ワシ達は大丈夫なのじゃが……」

「蒼太！」

「蒼太がお……って、姉上！ 一人で蒼太の所に行くでないぞい！？」

そう言つと、秀吉と木下さんは蒼太の所に向かった。

……僕、ありがとうとか言われてもいいんじゃないかな？

「……」
「ちよ！？ も、もうむ」

「……」
「がふっ！？ す、すいま」

「……」
「ぐふっ！？ ……」 (ブクブク)

「……」
「そ、蒼太！ もう大丈夫だから！」
「もういいんじゃ、蒼太！」

「……優子？ ……秀吉？」

「……そう、優子（秀吉）！ 私たちはもう大丈夫だから！」
「……良かった」

「「そ、蒼太!?!」」

秀吉達に抱きつかれて何か言われた後、蒼太はその場で倒れた。
つて、やばいよ!

みんなそう思ったのか、その部屋にいたみんな（チンピラは全て
気を失っている）蒼太に近づいた。

「蒼太! 大丈夫!?!」

「蒼太、蒼太!」

「……………すうすう」

「へっ?」

「すうすう」

「ね、寝てるだけ? よ、よかったあ!」

「うむ! 本当に良かったのじゃ!」

「……………まあ、お約束だね」

その後、寝ている蒼太を起こさないように僕と雄二が抱えて、僕
達の喫茶店へと戻って行った。

……………ちなみに、このチンピラたちは数週間意識を取り戻さなかつ
たらしい。

第三十三話（後書き）

感想、アドバイス、コラボお待ちしております！

第三十四話

「……ううん……」

俺が目を覚ますと、俺はなぜか保健室のベッドで寝ていた。

……確か、俺は明久たちとチンピラ退治に行って、そこから……
どうしたんだっけ？

「「蒼太!!」」

「わふっ!?! い、いきなり飛びつくやつがいるか!?!」

「ご、ごめん……でも、良かった!」

そう言つと、二人は俺から少し離れた。

「本当によかったのじゃ!」

「あ、ああ。……ところで」

「何じゃ?」

「どうしたの?」

「何で俺はここで寝てるんだ?」

「……蒼太、全く覚えてないのかのお?」

「あ、ああ。明久たちとチンピラ退治に行った所までは覚えてるんだけどなあ……」

「そ、そうか」

「蒼太は、捕らえられていた私達を助けてくれたのよ!」

「……ううん。実感ねえな……」

「しかし、事実じゃ。本当にありがとうなのじゃ!」

そう言っていると、外から明久、雄二、ムッツリー二、霧島さんが保健室に入ってきた。

「蒼太、起きたんだね」
「ったく、心配掛けやがって」
「……………本当に心配した」
「……………本当に大丈夫？」
「ああ、もう大丈夫だ」
「良かった、心配したんだよ？」
「そうか。ありがとうな、明久」
「本当に心配したよ……………別の意味で」
「……………はっ？」
「明久！ それは言わない約束だろう！」
「ああ、そうだった！ ……………いやあ、無事で良かった右腕がねじれる様に痛いっ！？」

俺は、直ぐにベッドから起き上がると、明久の右腕をロックした。
「吐け！ いったい、俺の身に何があったのかを洗いざらい吐け！」
「……………」
「分かった、分かった！ だから、右腕をおおおおおおっ！」
「分かった。さあ、早く吐け！」
「だから右腕ッ！！？」

俺は仕方が無いので、明久の右腕を開放してやることにした。

「さあ、お前の罪を数えろっ！」
「僕に罪は無いよ！！」
「その幻想をぶち殺す！」
「結構好きだね、禁 目録！」
「早く言いやがれ！」
「僕のツツコミ、オール無視！？」

「もう一回右腕を逝くか!？」

「スイマセン、言います。言えます。言わせて下さい!」

……何かこういうのも禁 目録にあつた様な……。

「あのね、あの後……フゴツ!？」

っと、明久がしゃべり始めると、いきなり雄二が明久の口を手で覆った。

「(明久! これは内緒の話だろうが!)」

「(で、でも!)」

「(それに……そのうち分かるだろうから、俺達はなにも言つな)」

「(……分かつたよ)」

二人は、何か会話をすると思われ、雄二は手を離れた。

そして、明久はすぐさま保健室を出た。

……あの野郎オ。

「逃げやがったな!！」

「まあ、蒼太。許してやれ」

「俺が許すと思うか？」

さて、捕まえたらどう料理してやるのかな……。

「ちなみに、蒼太。今のお前が外に出ると、変態扱いで学校生活を送ることになるぞ?」

「……はっ? 何を言つて……るう!？」

そう言われた俺は、自分の体を見た。

あれ？ おかしいなあ。疲れてるのか、俺？

「服が、見えない？」

「バカかお前は。服を着ていないんだ」

「何で俺は下着だけなんだよ！？ 俺に何があつたんだよ！？」

「それは……まあ、お前の思ったとおりに聞いてみたらどうだ？」

「……………」

「「！？」（ササツ）」

雄二がそう言って俺が優子と秀吉を見ると、二人は慌てて俺から視線を外した。

……なるほど、犯人が分かったぞ。

「お前らか！？」

「ななな、何のことかしらね！？」

「そそそ、そうじゃ！ 一体、どういう証拠があるんじゃ！？」

「秀吉、それは明らかに何かをしたやつが言う台詞だと思うのだけ
ど？」

「じじじ、じゃから、証拠を見せてみるのじゃ！！」

「俺の発言は無視か！？」

しかし、こいつらの慌て様を見ると犯人は明らかにこの二人だな。
ここは……少し心が痛むがやってみるか。

「雄二、お前の好きな女のタイプは何だ？」

「い、いきなりだな」

「まあ、答えてみるって」

「そうだなあ……胸が大きい……クペツ！」

雄二は、霧島さんの目にも止まら早業で、雄二の頸動脈を締めた。

「……雄二、私の胸を大きくするの手伝って」

「……………(ジー)」

「雄二、俺をそんな熱い視線で見ると。て、照れるだろ？」

そう言つと、俺はツンデレがやりそうな表情を作ってみた。

「代表、私達に坂本君を貸してくれない？」

「……ダメ。雄二は今から私と……ごにょごにょ」

「(ジー……!!)」

「だ、だから照れるって、雄二」

もう一度演技を試してみた。

「霧島殿、ワシにもちよつと雄二を貸してくれんかのお？」

「……ダメ」

「ちなみに、俺の嫌いなタイプは嘘を言うやつかな」

「「ごめんなさい」」

「……雄二、行こ」

「(ブンブン!)」

雄二は首を一生懸命に、横に振っていたが結局、霧島さんに連行された。

……さっさと俺に教えていればいいものを。

「さてつと、どうしてこんな事をしたんだ？」

「それは、そのお……………」

「蒼太の体の成長を見ようということだ……………」

「……よし、分かった。とりあえず、握り締めている俺の服を返せ」

「「嫌よ!」」

「何でだよ！？ 俺、寒いんだよ！！」
「「じゃあ、布団にでも包まっていれば！？」」「
「何で！？ そして、それでどうやって喫茶店に帰るの！？」
「って言うのは冗談で」
「冗談になつてねえよ！？」
「はい、コレ」

サツ（差し出される制服ver女子）

ダツ！（逃げ出そうとする俺の足音）

ガシツ！（二人に捕まる音）

「離せ！！」

「コレ、着てみてよ」

「嫌じゃボケエツ！」

「まあまあ、そう言わずに。私だつてたまに着させられるんだから」

「秀吉のは、もうほとんど正装じゃねえか！」

「し、失礼な！」

「私も着てるわよ？」

「お前は女だろうが！！ 俺は、男だ！！」

「「まあまあ」

「何がまあまあなんだよ！？」」「

「「早く着て？」」「

「嫌だつて言うのが分からんのか！？」」

「「早くう！」」「

「無視か！？ 無視なのか！？」

「「ねえつてばあ！」」「

これは、埒が明かねえな。

しかし、着てしまったら俺の中の何か壊れていく気がする……。
「……！」

「二人とも、聞いてくれ」

「何？」

「俺、女物の服を着たら死ぬんだ」

「早く男物の制服を着て」

「OKでしたーっ！」

「あ、ああ」

俺はその後、服を渡してもらい着替え始めた。

そして、着替え終わると二人と一緒に喫茶店に戻って行った。

第三十四話（後書き）

感想、アドバイス、コラボ、お待ちしております！

第三十五話

喫茶店に戻ると、なぜかクソババアがそこにいた。

「おう、蒼太。戻ったか」

「……生きていやがったか」

「おいコラ待て！ 今、明らかにおかしい反応をしたよな!？」

「うるせーっ！ それより、何でババアがここにいんだよ!？」

「会って、ひと言目がババアさね!？」

「うっさい！ どうせ、今回のこともババアのせいなんだろう!？」

「ほう。流石だな、蒼太」

「へっ?」

「その通りだ。今回の一連の事件の黒幕だ」

「違うさね! ……でも、アンタ達に話してないことがあったのも事実さね」

「……それを洗いざらい吐きやがれ、クソババア!」「」

「分かったから少し黙ってな、クソジヤリ共!」

ふう、コレだけ言ったら少しはスッキリするかと思っただけ……
あんまりスッキリしないな。

「しかしねえ……やれやれ、賢い奴らだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点をたたき出せる優勝候補を使えば良いからな」

「……何の話?」

「ああ、そういえばお前には言っただけだったな。実はな……」

俺は、雄二たちがクソババアとの取引について説明してもらった。ってか、あの時は鉄人にしごかれたからなあ……。

「つまり、お前達は自分達で対決する教科を決めれるかわりに、優勝して賞品を回収するって事でいいのか？」

「ああ、大体その通りだ」

「……アンタ、取引の内容を知らないのに何で犯人がアタシだと思っただい？」

「いやあ、ババアならしそくだなあ〜って思ったから」

「……もう一回、西村先生に頼むとするかねえ」

「すいませんでしたーっ！」

流石に、アレをもう一回やれと言われると厳しいからな。

……人生、賢く生きていかなきゃならねえ！！！！

ん？ って言うか……如月ハイランド……。

何かを忘れてる気がするが、まあいいか。

「つたく、最初からそうしてりゃいいのさ」

「じゃあ、話に戻るけど」

そう言っつて、明久が話を切り出した。

「そくだよね。優勝者に、後から事情を話して譲って貰うとかの手段も取れた筈だし」

「ああ。俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる。それに、俺達が勝ち上がったって来て、妨害も増えた」

「確かにそくだね」

「まあ、妨害のレベルがおかしかったけどな」

誘拐とか、一歩間違えたら警察沙汰だしな。

「そこで俺は、俺達Fクラスが勝ち上がると困るやつがいると考えた。そして、それは教員の誰かって事で考えてる。そして、そこでだ。もしもそいつは学園をぶっ壊そうとしてるとしたら、一番手っ取り早いのは、学園長が無能だという事を世間にさらせばいい」

「そうだな。そう考えると……ババアの狙いつていうのはもしかして……腕輪か？」

「ああ、俺もそう考えた。っで、どうなんだ？」

「……ったく、本当にアンタ達は良くそんなに頭が回るね……。そうさね、アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットではなく、もう一つの方さね」

「達か、白金の腕輪だったか？」

「ああ、あの特殊能力がつくとかいうやつ？」

「そうさね。……はあ……アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね……」

そう言うと、ババアは少し暗い顔をしながら言葉をつづった。

「アタシにとって、企業の目論見なんてどうでもいいのさ。アタシは腕輪を、アンタ達に勝ちとって貰いたかったのさ」

「勝ち取る？ 回収するんじゃないか？」

「お前は本当にバカだな。新技術っていうのは、人に見せてなんぼだろう？」

「あ、そういえばそうだね」

「そして、これは俺の勝手な予測だけだな……多分、その腕輪は2個あって、ちよっとした欠陥……しかも、俺達が使うに当たっては問題ないような欠陥があるんじゃないのか、クソババア？」

「……アンタ、本当にFクラスかい？ そうだよ。召喚用フィード作成用と、召喚獣を同時に召喚する事の出来る腕輪があるさね。で、不具合ってのは、入出力が一定水準を超えると、暴走を引き起

「すんだよ」

「ほお！ フィールド召喚用っていうのは、役に立ちそうだな！

……同時召喚は、集中力が持たないだろうな……」

「成程な。だから得点の高い優勝候補を使わず、俺達みたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』がババアにとっては一番理想的だったってことか」

「それって、一応褒められてるんだよね？」

「いや、俺達はバカだと言われているんだ」

「何だとババア！」

「説明されぬとわからん時点で、否定できないと思うんだが……」

……明久、自分で気づけよな……」

「召喚用フィールドの方は、ある程度まで耐えられるんだけどねえ。同時召喚用は、現状だと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは出来れば吉井専用にと……」

「蒼太に雄二。これは褒められてると取っていいんだよね？」

「バカにされてるんだよ、凄い勢いでな」

「何だとババア！」

「自分で気づけ、このバカ野郎ツ！！」

「めんどくせつ！ コイツは、お前はバカだ、って言われないと分からないのか！？」

「話に戻るが、ということは俺の予想はほぼ合ってたみたいだな」

「そうだね。……でも、犯人は誰なんだろうね？」

「そんなもん、教頭の竹原だろう？」

『えっ！？』

俺がそう言うと、その場にいたみんながそう言った。

「な、何でそんなに驚くんだ!? 普通分かるだろう!？」

「いや、普通はその逆だと思うが……」

「僕なんて、サッパリだよ!」

「ああ、明久はそうだろうな」

「少しは否定して欲しかったよ、こんチクショウ!!」

「どうして、犯人が竹原だと思ったんだい？」

「いや、どうしてって言われても……。大体、分かるんじゃないか?」

「というと?」

「まず、前にクソババアの所に、教室の修繕を要求しに行った時に、中から竹原の声が聞こえてきただろ?」

「ああ、そうだったな」

「そして、中に入った俺達を見て、クソババアにこう言った……貴女の差し金ですか? とな」

「そういえばそうだったな……なるほど、そういうことが」

「ああ、そうだ」

「……どういうこと?」

「お前は本当にバカだな」

「同時に言われるとも思ってたよ!」

「その後のことを思い出してみる」

「その後……あ、そうか!」

「ああ、思い出した通りだ。竹原は、クソババアに対してこうも言っていたからな……学園長は隠しごとがお得意の様ですから、ってな」

「……ったく、アンタをFクラスに置いとくのは、勿体無い気がしてきたよ……。でも、当たりさ。犯人は、多分竹原のやつだと思っ
よ」

「となると、あのチンピラたちも竹原の差し金か」

「そうなるな……さて、あの野郎にはどうやって復習してやるつか
……クッククック」
『怖っ！！』

さてさて、どうやってあいつに絶望を与えてやるつか……。
あ、そうそう。良いこの皆は、絶望の中でも希望を見つけようね！

「遊 王も結構好きだね、蒼太！」
「何で聞こえてるんだよ！ 俺、時々明久がこえーよっ！！！」

いや、本当にこえーっ！
何で、あいつに俺の心の声が聞こえるんだよ！？

「……って言うことは、もしかして僕達、文月学園の存続が掛かった問題に巻き込まれてたって事だよな？」
「まあ、そうなるな。でも、もう大丈夫だろ」
「何で？」

「次の相手は、蒼太達だからな」
「ああ、なるほどね」
「まあ、一件落着じゃな」
「ふう、一時はどうなるかと思っただわよ……」
「……良かった」

「……良かった（雄二との愛の巣が壊されるところだった）」
「おいコラ、翔子！ 声に出てるぞ！？ そして、ここは俺達の愛の巣でもねえ！」

「……ここは？」
「……言い方を変えよう。俺達に、愛の巣なんて無い！」
「……と言う幻想をぶち殺す」

バチチチ 霧島さんが、スタンガンを出す音。

ダッ！ 雄二が逃げ出す音。

ガシツ！ 俺と明久が雄二を捕まえる音。

「離せー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「誰が離すかつ！！」

「俺は、まだ死にたくねー！ー！ー！ー！ー！」

「大丈夫だ！ スタンガンで死ぬほど、お前は弱くない！」

「スタンガンを当てられた後の事を言ったんぎゃあああああああああ
ああっ！！」

雄二は、霧島さんにスタンガンを当てられた。

雄二は気絶した…… B Y ドラクエ風

「……って言うか、霧島さんも禁 目録好きだね」

「…… 早山に進められて、ハマった」

「やっぱり蒼太なんだね！？」

流石は、霧島さん！ あれの面白さが分かるか！

「……じゃあ、雄二は私が連れて行く」

「……………」

「どうした、明久？」

霧島さんがそう言うと、明久は何かを考え始めた。

「蒼太、明日は真剣勝負だよね？」

「ん？ ああ、そうだな」

「……学園長、質問があります」

「何だい？」

「腕輪の暴走って、総合科目が平均点に行かなければ起こらないんですか？」

「そうさ。1つ、2つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

ん？ 何を言ってるんだこいつは？

「霧島さん、今日は雄二を開放してやってくれないかな？」

「なっ！？ あ、明久！？」

「……ダメ。これは絶た……」

「もし、僕達が優勝したら如月ハイランドのチケットをあげるから……分かった」

そう言うと、霧島さんは雄二を手放して教室を出て行った。

「さてっと。雄二、起きろー」

明久は、そう言いながら雄二に往復ビンタをし始めた。

「いってえ！ はっ！？ ……し、翔子は！？」

「帰ったよ……貸しーだからね？」

「……チツ。まあ、いい。どうせ、今日で貸しが0に戻るしな」

「そういうこと。じゃあ、僕達はそろそろ帰るね……明日も早いし」

「ああ、そうだな」

そう言うと、二人はさっさと帰っていった。

「……にやるおめ……。秀吉、あいつ等本気で来るぜ？」
「別にいいじゃろう。勝つのはワシ達なんじゃから」
「お前の自身はどこから出てくるんだ？」
「うむ、そうじゃなあ……。主に心からじゃな！」
「くさい台詞をありがとう」
「なんじゃと!？」
「はいはい。……じゃあ、俺も帰るわ」
「何じゃ、早いのお？」
「ああ。明日は……真剣勝負だからな」

俺はそう言うと、家に向かって教室を出た。

SIDE 秀吉

「……今の蒼太の目を見た？」
「……うむ、ちゃんと見たぞい。……蒼太のやつ、真剣じゃな」
「アンタ、蒼太の足を引つ張るんじゃないわよ？」
「うむ……。しかし、今回の日本史は少し自身が無いのじゃ」
「ったく、世話の係る弟ね……。ほら、帰って勉強するわよ」
「うむ、そうじゃな！」
「(どうしても無理な場合は、私が代わりに出てあげるわ)」
「ん？ 何か言ったかのお？」
「言っていないわ。ほら、早く帰るわよ」
「あっ！ 待つんじゃ、姉上！」

そう言って、ワシは姉上を追いかけた。

……明日は、絶対に勝って蒼太と如月ハイランドに行くのじゃ

第三十五話（後書き）

感想、待ってます

第三十六話(前書き)

今回は短めです

第三十六話

「アキに早山、おはよ〜」

「二人とも、おはようございます」

「あ、二人とも。おはよう」

「ああ、おはよ」

俺と明久がそこらへんを歩いていると、島田と姫路が登校してきた。

ふむふむ。二人とも元気そうだな。

昨日の様なことがあったから少し心配していたんだが……杞憂に終わったっぽいな。

そう思っていると、明久が二人に声を掛けた。

「あゝ、その……昨夜はぐっすり眠れた？」

「え？ はい、ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃ……朝ご飯はきちんと食べて来た？」

「はい。きちんと食べてきました」

……明久。気を使っているのがバレバレだぞ？
もう少しバレ無い様にしろよな……。

「えっとそれじゃあ」

「ふふつ。明久君、気を遣いですよ？」

「そうよ、アキ。私達は大丈夫よ？」

「ほ、本当に？ 昨日、暴行未遂なんて怖い目に会ったんだよ？」

「でも、大丈夫です。不思議なくらい落ち着いていますから」

「ウチも結構落ち着いてるわよ」

「本当に？」

「はい。結局皆無事でしたし……それに、きつとまた明久君が助けられますから」

「……あれは、ほとんど早山のおかげだけだね」

「そ、そうだね」

島田がそう言うと、島田と明久は俺を見た。

な、なんで二人して俺を見るんだ!?

「いや、確かに俺だけだよ……」

そんな会話をしていると、ムツツリーニが少し遅れてやってきた。

「……………おはよう」

「ムツツリーニ、どうだった!？」

明久が、すぐさまムツツリーニに話しかけた。

まあ、コイツのことだ。大方、ムツツリーニにこの二人の護衛でも頼んでたんだろうな。

「……………何も無い」

「良かったあ」

「アンタ達、いったい何の話をしてるの？」

「えっ!？ な、なんでもないよ!？」

「慌てすぎだ、明久……ふあああ……」

「? 早山、眠たいの？」

「ん? ああ。昨日はほとんど寝てないからな」

「「えっ?」」

俺の言葉に驚いたのか、二人が俺の言葉に対して驚きの声を上げていた。

「そんなに驚くことか？」

「まあ、あのめんどくさがり屋の早山がそこまでやる事に驚いたわね」

「わ、私もです」

「うわあ、微妙に傷つく……」

「正直、僕も驚いたよ。朝からテストをしていたら、いきなり蒼太が教室に入って来るんだもん」

「お前が言っただら？ 真剣勝負だつて」

「まあ、そうだけどさ」

「と言うわけだ。俺達は、少し眠る」

「雄二！？ いきなり現れないでよっ!？」

「ん？ 別にいいだろ。お前達が、用件を言っただけだ」

「ま、まあそうだけど」

「と言うわけで、俺たちはこれから仮眠を取るから、11時まで起きてこなかったら起こしてくれるか？」

「あれ？ 試合って、1時からじゃなかった？」

「1番混み合う時間は僕達も手伝うよ」

明久は、笑いながらそう言った。

それを聞いた島田と姫路はお互いに顔を見合わせると、少し微笑みながら「分かったわ（分かりました）」と言った。

そうすると、明久と雄二は屋上へ仮眠をしに向かった。

……俺達はいいい友達を持ったよな、明久。

うん？ そういえば、秀吉の姿が見えないんだけど……寝坊か？

「なあ、秀吉を見なかったか？」

「木下？ 木下なら、今日は休みよ？」

「……はっ？」

「なんでアンタが知らないのよ……」

「えっ？　ちょ、ええっ!？」

「本当に知らなかったんですか!？」

「本当に知らなかった……」

そして、俺の今日の大会はどうなるんだ？

これだけのことをして、俺は不戦敗してしまうのか？

「……そんなことはさせない」

「えっ？　何か言った？」

「俺は絶対に不戦敗なんてしないぞ!」

「当たり前でしょうが!!」

「イテっ!」

俺がそう叫ぶと、不意に後ろから頭を叩かれた。

「誰だよ、痛いだろ!」

「アンタが変な事を言ってるからよ」

「ゆ、優子?」

俺の後ろには、優子が立っていた。

「私が出ればいいでしょ?」

「はい?」

「だ・か・らっ!　私が大会に出ればいいでしょ!？」

「は、はいいいいいいいい!!?」

朝一番の学校に、俺の叫び声が木霊した。

第三十七話(前書き)

超久々更新です^ - ^ :

第三十七話

「お前が秀吉の変わりに出るのか!？」

「そうよ。何か文句でもあるの?」

「あるに決まって すいません、無いです」

……まあ、いいんじゃないかなそれぐらいは!

だから、早く握り締めた拳を下ろそうか!!

「ふんつ。じゃあ、試合時間のちよつと前になったら会場に行くか

ら

「はいはい。りょーかい」

「勿論、本気で行くわよ?」

「おう! それは当然の事だぜ!」

「分かってるなら良いわ。それじゃあ、また後でね」

そう会話すると、優子は自分のクラスへと帰って行った。

「……蒼太君も大変ですね」

「そういうなら、助けてくれよ」

「ウチ達にはどうしようも出来ないわよ」

「ですよねー」

いいもん! 分かってたもん!!

「じゃあ、私達はそろそろ行きますね?」

「おう、じゃあ、12時30分くらいになったら起こしてくれよな」

「えっ? アンタは手伝ってくれないの?」

「どうせ、お前たちの事だから時間的にはそのぐらいだろ？　じゃあな」

そう言っつて、俺はその場を後にして仮眠を取りに屋上へと向かった。

次に起きるときは、決勝戦まで30分つて時か……。

……どうやって決勝戦、戦おうか。

秀吉がいないって事は、Wに変身は出来ないって事だろ？

……まあ、優子の事だから日本史の点数も高いだろうから、多分大丈夫か。

ふああああ……。寝よう。

「さてっと、それじゃあそろそろ行くとするか」

「ああ、そうだな」

「了解。僕、美波達に言っつて来るよ」

「さっさと行け、バカ」

「ハモっつて言っつことなの!？」

と言っつ会話をし、明久で遊んだ後、俺達は試合会場へと向かった。

「にしても、まさか秀吉の代わりが秀吉のお姉さんだなんて。実力が違いすぎるんじゃない？」

「確かに秀吉よりは点数が高いだろうが、変身は出来ないだろうからまだマシだろう」

「ありや、バレてた？」

「当たり前だ。っと言うかお前と木下姉が変身したら、いろんな意味で卑怯だろ」

「……確かにね」

「まあ、出来ないんだろうけどな」

などと会話をしていると、試合会場に着いたので俺は明久達と別れて、優子を探すことにした。

「にしても、優子のやつどこにいやがんだ？」

後5分ぐらいで試合が始まるぞ？

珍しいな。アイツが5分前に集合してないなんて。

とか思っていると、遠くのほうから「この子どうしたらいいのかしら……」と言う声が聞こえてきた。

「ん？ 今の声って……優子？」

まあ、とりあえず声のがした方へ行ってみるか……。

………なんだろう。見知った顔が、すごーく笑顔なんだけど。アイツ、いったい何とじゃれてんだ？

「優子、お前何してんだ？」

「はううっ！？ そ、蒼太！？ ベベベ、別に何もしてないわよ！？」

「嘘だっ！」

「……ひぐらしネタは古いと思うわ」

「……コホンッ。優子、お前は今何を隠したんだ？」

「へっ！？ ななな、何も隠してなんかやしないわよです」

「語尾がおかしいぞ、語尾が」

「っ!?! うづうづ、うっさいわね!」
「もしもし、顔が赤いですよ?」
「うづうづ……………」

……あれ? 優子ってこんなキャラだったけ?

「……………さてはお前、優子の偽者だろ!」
「本物よ!」

「痛い痛いっ!! スイマセン、ごめんなさい! そして、腕の骨はそっちには曲がらないいいいいっ!!」

「ふん! アンタが私を偽者扱いするからよ」
「すいません、本当にスイマセン」

「さっ、行くわよ!」
「うん、ちよつと待とうか」

「何よ?」
「だから! お前は何を隠したんだ!」

「えっ? だ、だから、それは」
「ギヤオギヤオ!」

「……………なんでも……………」
「……………よし、ちよつと見せてみようか」

今の声は、もしかして…………。

俺の予想が正しければ、決勝戦は雄二の予想を覆せるぞ!

「な、なんでもないわよ!」

「俺の予想だが、それは多分恐竜の形をしてないか?」

「な、なんでそれを!」

「やっぱりな! とりあえず、それを持って早く会場に入るぞ!」

そう言うと、俺は優子の片手を握って会場へと入っていった。

第三十七話（後書き）

感想、お待ちしております！

三十八話(前書き)

グダグダ感MAX

三十八話

「さて、みなさん。長らくお待たせいたしました！ ただいまより、召喚大会決勝戦を始めます！」

そう司会者が言うと、まず雄二たちのほうにスポットライトが当たる。

「2年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です！ 皆様、拍手で御出迎えください！」

司会者がそう言うと、観客は拍手をしてくれた。
いやあ、なんだか凄いことになってんな。

「そして対する選手はこれまた同じくFクラス所属・早山蒼太君と、Fクラス所ぞ…ん？ 少々お待ちください」

司会者はそう言うと、アシスタントさんから今回出るのは秀吉ではなく優子だって事を伝えた。

「ええ、本当ならばFクラスの秀吉さんが出るところでしたが、体調不良のため本日はお休みとのことなので、今日はそのお姉さんの木下優子さんが出るようになりました！」

……なんか、今普通に秀吉、さん、っていわれてたな。

「と、言うわけで決勝戦はなんとFクラス所属が4人中3人もいます！ 最高成績を持つAクラスを抑えて最低成績のFクラスが決勝

戦に出ているわけですが、これはFクラスに対する認識を改めないといけませんね」

おお！ 中々嬉しいことを言ってくれるじゃないか！
これで、Fクラスの株が上がるといいなあ。

「決勝戦の対戦科目は、日本史です！ お互いに、準備は良いですか！？」

「うん、いつでも！」

「勝つぞ！」

「負けねえからな！」

「いつでもいいわよ！」

「それでは、決勝戦開始ですっ！！！」

『試獣召喚！』

『Fクラス 早山蒼太 & Aクラス 木下優子

日本史 234点

205点

』

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

日本史 215点

166点

』

「明久！ まずは木下からだ！」

「了解！」

そう叫ぶと、二人は優子に向かって突撃してきた。
っち！ そうはさせるか！

「行くぜ！！ 優子！」

「ほ、本当にやるの?」

「勝つためだ! 行くぞ!」

「う、うん……」

そう言つと、俺は召喚獣の腰にベルトを出現させ、JOKERメモリーを持たせた。

そして、優子は……俺と同じようにベルトを出現させていた。

「「なっ!?!」」

「行くぜ、優子!」

《JOKER》

「し、仕方ないわね」

そう言つと、優子の召喚獣もあるメモリーを持っていた。

勿論、そのメモリーと言つのは

《FANG》

「「変身!?!」」

そう言いながら、ベルトにメモリーを入れると、何故か俺のほうにFANGのメモリーが移ってきた。

これは……良いのか? 本当に良いのか?

「って、考えてる場合じゃないな!」

そう言いながら、俺は召喚獣のベルトを開いた。

《FANG》
《JOKER》

そう音声が鳴り、召喚獣は左側は黒く、右側は白くて、顔は目の周りが少しギザギザした感じのWとなった。

『F&Aクラス 仮面ライダーW（早山蒼太&木下優子）
日本史 439点 （234点+205点）

『さあ、お前達の罪を数えろ！』

『……………』

『ちよ、優子！？一緒に言ってくれないの！？』

『えっ！？だ、だって私、そもそもW・・・だっけ？知らないもの！』

『んなああにつ！？』

『……………ま、まあ、よく分からないけど行くよ、雄二！』

『あ、ああ』

『ああっ！くそ！もう、どこからでもかかってきやがれ！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9184/>

俺とテストと学園生活

2011年10月6日09時56分発行